

325

439



始



THE CHRISTIAN BELIEF

BY

Rev. PAUL M. KANAMORI.

信仰の
すゝめ

金森通倫著

325-439



の
す
め

大正
5. 8. 19
内交

目次

第一章 眞の神

○食はずらひ○ヤツは聞いても分らぬ○キリスト教の三綱領○神の輸入○神に國なし○人間は神にはなれぬ○不思議な力あるもの○日と月と星○善き神と悪しき神○神々の雑居○三億三千万の神○人に罰せらるる神○文明と神信心

第二章 天 父

○凡ての物はみな神に造られたるもの○四海兄弟○骨は何本○産むと作るとのちがひ○天の父上○米はどろしてできる○水はたゞ○空氣には貴賤なし○世界は無盡蔵○己れの金で己れが食ふ○五十は鯛の價か○萬物みな神の賜物である○神はどこにても在ります○御父さん見てるものがあるよ○眞の親孝行○神を恐るゝは智慧の始めなり

第三章 罪 惡

○良薬は口に苦し○二口目には罪々さいふ○神の律法と政府の法律○人殺と泥棒○姦淫の罪○罪の卵○鳥が居る○罪の種類○掃溜よりも汚いもの○鉢の泥水○ゆすぶりもの○泥水がへり○三千万の芥○靈の顕徴○鏡○キリスト教の正門

第四章 審 判

○鏡のくもり○罪は謀叛である○罰が怖い○神の罰○この世は學校○死ぬることはどういふこと○罪の活動寫眞○死んで行く先○一つの罪で地獄行○一つの罪で監獄行○玉の噓

第五章 來 世

○魂は消えるか消えぬか○學問と提灯○死は生の目的○浮世と航海○一寸先は地獄○未來には誰が待つてゐる○未來があつたら君はどうする○未來がなくても損はない○未來信仰の副産物○未來信仰についての權威

第六章 基 督

○三大聖人○孔子○釋迦○キリスト○四つの相違○富士と天

目次

第七章 贖罪

○ハリツケ問答○殉難の死○贖罪の死○教訓では救はれぬ○人殺し身代り○十字架の救ひ○救ひの信仰○千年も一日の如し○十字架の死○罪は犯かせぬ○殉教者○眞の愛○先生は愛の人○愛の反響○先生手を打って己れを罰す○全校泣く○五つの結果○十字架の事もかけ○泣きかたがまだ足らぬ

第八章 献身

○決心○凡ての妨げに勝たねばならぬ○道は只一筋である○宗教は道具でない○眞理はたゞ一つ○凡ての罪と縁を切る○凡てをキリストに捧げる

第九章 祈禱

○名醫の遺言○祈りは話しをするこゝろ○なんでも祈れ○祈りは聞かれる○祈りの答は様々である○祈つたら待つてをれ○信仰の祈り○いくらでも祈れ○祈りの稽古○上手な祈り○祈りご聲○長い祈りと短い祈り○御名に依て祈る○祈りは靈の呼吸である

第十章 應驗

○デヨーツ、ミユラー○祈りの孤兒院○金持にも頼まない○二千の孤兒の晝飯がない○食堂掛の免職○六十年間に千三百五十萬圓の寄附○偉大なる信仰○ミユラーの大目的○三萬遍の答へ

第十一章 聖書

○聖書の讀みかた○聖書の飛び讀み○靈の糧○毎日よめ○どこへでも持つて行け○聖書と雜書○一生涯のよみもの○聖句の暗記

第十二章 救霊

○信仰は後生道樂ではない○すぐひの船○救ひは説教家の専門でない○敵を打つものは兵である○人倍増傳道○天下の信者我れ一人○八つの規則○一人ではできぬ○火元になれ○新しい信者と古い信者○一人一人傳道はキリストの命である

目次終

信仰のすゝめ

金 森 通 倫 著

第一章 眞神

○食はずぎらひ

一度も物を食つて見ないで、只それを嫌ふのを、食はずぎらひといふ。食はぬでは、甘い辛い、味の分らう筈がない。また味の分らぬさきには、はやそれを嫌ふといふは、これもまた分らぬはなし。

むかし、牛肉ぎらひといふものがゐた。今でも、まんざら無いではないが、僕等が肉を食ひ始めたころには、ことに、その仲間が多かつた。そこで、その牛ぎらひの連中に、なぜ君等は牛をさらふかと聞くと、なぜでもない、たゞ嫌ひだといふ。あのギエウといふ名がさらひ、あの肉の色の赤いのがさらひ、中にはまた、あれは四つ足だか

らさらひだなど、つまらぬ事を言ひたて、むやみに牛肉をさらうたものである。ところで、面白いのは、一度その連中に、ロースかビステークを食はせてやると、もう占めたもの。始めの反対どこへやらで、たちまち牛黨の改宗者ができる。

いま世間に、ヤソ教はさらひだといふ人があるから、なぜ嫌ひかと聞けば、これも亦なぜといふ事はない。只さらひだといふ。あのヤソといふ名がさらひ、ヤソは昔のキリシタンだからさらひ、あれは外國の教だからさらひだなど、理屈でもない理屈をつけて、まだ一度も、キリスト教の説教を聞いたこともなく、またその教の本を讀んでも見ずに、たゞ名のみを聞いて、むやみに、これを嫌ふ人がある。しかし、さうもせず、よみもせずでは、その教の善惡が分るまい。またその善惡の分らぬさきには、はやそれを嫌ふのは、これも同じく食はずさらひの仲間ではあるまいか。

どうぞ君等は、そんな食はずさらひなどいふ無茶なまねをせず、一度よくキリスト教のはなしを聞いて見てもらひたい。そしてその上で、愈々いけないものと分つたら、その時こそは、反対でも、攻撃でも、思ふ存分にやるがよい。僕等は慎んで、その反対論を聞かう。又その攻撃をも受けて見よう。その代り、聞いた上で、キリスト教の眞理が、いよく分つたら、その時はまた、思ひきつて、キリスト信者になつてもらひたい。分つても、なほグズグズと、いろ／＼な事情にからまれて、斷然教に入ることをしないのは、それは卑怯といふものである。

○ヤソは聞いても分らぬ

ところで、ヤソは聞いても分らぬといふ人がある。なぜだらう。キリスト教は、そんなに分りにくい教ではない。誰にでもすぐ分る教である。これには、大乘も小乗もない。たゞ一筋の救ひの道で、どんな無學なものが聞いても、一度でよく分るやうにできてゐる。しかるに、それが分らぬといへば、それは大かた、聞きやうが悪いが、但しはまた、説きやうが悪いからだらう。むやみに理屈ばつて、哲學なんぞを引っぱり出して、小六かしい説きかたをすれば、すぐ分る筈の救ひの道に、却つて、怪しい霧が掛つて、分らぬやうになることもある。しかし、さうばかりでもない。こゝには、一寸分らぬといふ理由のありさうなところもある。日曜ごとに、キリスト教の會堂

で、説教してをるのを聞くと、何れもみな、教の一端づゝを説いて、必ずしも、毎度、その全體を説くといふものではない。體でいへば、あるときは頭を説き、あるときは手を説き、あるときは足を説くといふやうに、教の一部分づゝを、きれ〜に説いてをるから、始めて道を聞く人には、どこにキリスト教の本體が存してをるやら、一寸、分りにくいやうな事もあるだらう。して見れば、ヤソは聞いても分らぬといふ批評は、まんざら當らぬ批評でもないかと思ふ。そこで、今こゝに、始めて道を聞く人のため、成るべく分りよいやうに、凡ての六かしい議論をよして、又さうきれ〜でなく、教の全體を一纏めにして、誰にでも、一讀してすぐ分るやうに説きあかして見たいと思ひ、この「信仰のすゝめ」なるものを著はしたのである。素より、こんな小さな本で、教の深いところを、ことごとく説き盡すといふ譯にはゆかぬが、飛行機にでも乗つて、空から下を見おろす時のやうに、一寸一目に、キリスト教の全體を見渡すことぐらいはできようかと思ふ。

○キリスト教の三綱領

キリスト教を信ずるについて、まづ知るべきことが三つある。(一)天地萬物の造物主なる眞の神のいますこと。(二)人はみな神に對して罪を犯してをること。(三)罪人はキリストの十字架によつて救はるゝこと。この神、罪、救、の三つが、キリスト教の三綱領である。綱とは、網の本綱のこと。網の目は、たとひ幾千あらうとも、その本綱をよつて引けば、凡ての目がみなついてくるやうに、キリスト教も、ひろい教で、その中には、いろ〜な教理や教訓が澤山に載せてあるが、まづこの三綱領をよく會得しておくと、あとは自然に分るやうになる。しかるに、この三綱領をよく呑みこまずにおいて、いくらきれ〜の説教ばかり聞いたところが、それでは、到底、教の眞意の分りようがない。

○神の輸入

さて、三綱領の第一は、眞の神のいますこと。これが、キリスト教の根本眞理であるから、まづ、この事から説かねばならぬ。ところで、神といふ話になると、すぐこゝろいつて反對する人がある。ヤソの神は西洋の神、外國の神ではないか。日本には日本

の神がある。日本は神國といふぐらいで、神には不足はない。數からいつても、國中には八百萬の神々がある。神はもうこれで澤山。いくら輸入ばやりの今日でも、尙この上に外國の神まで輸入せぬでもよさそうなもの。西洋人はどうだか知らぬが、日本人は先祖代々拜んできた、日本の神さまだけを拜んでをれば、それで結構。なにも今さら、外國の神信心などを始めぬでもよいと、こういつて頻りに頑ばつてをるものがある。

○神に國なし

なるほど。この、日本には日本の神があるから、外國の神は入らぬといふ話は、或人には、一寸尤な理屈のやうに聞えるかも知れぬが、この考へが、そも／＼根本からまちがつてをる。なぜなれば、神には國といふものはない筈。これが英國の神、あれが獨逸の神と、國々に、その國々を治むる王様たちのあるやうに、神にもまた、この國、あの國を別々に守る、特別の神があるやうに思ふのは、大なる誤りである。神といふものは、そんな人間がこしらへた國境などで、その働きを限られるやうな、小さ

なものではない。眞の神は、只ひとりで、世界萬國を治め、且つこれを守り給ふのである。この眞の神は、無論、西洋のみの神ではない。外國から輸入した神ではない。これが、本當の日本の神。日本はこの神に造られ、この神に守られ、この神に恵まれて、今のやうになつたのである。なにも日本には、日本の神があつて、それが、特別に、日本ばかりを造り、日本ばかりを守つてをるといふものではない。全體、この眞の神の外には、天地の間に、もう神といふものはない。天に二つの日なし。世界を照らす太陽は、たゞ一つである。太陽には、東洋と西洋のわかちはあるまい。日本と英國のちがひはあるまい。日本の太陽は丸いが、英國の太陽は三角ださうなど、誰がそんなつまらぬことをいふ。世界には二りの神なし、萬國を守る神はたゞ獨りである。この獨りの神が、日本を守り、支那を守り、英國を守り、米國を守り、その外、世界萬國を、皆ひとりで守り給ふのである。この道理をわきまへずして、國々に、其國其國を守る、特別の守り神でもあるやうに思ふのは、それは迷信といふもの。

○人間は神にはなれぬ

それでは、これまで日本で拜んでゐた神は、なんであつたかといふに、あれは、本當の神ではなかつた。たゞ人間の考へで、神とあがめて祭つたもの。その多くは、國家に功勞のあつた人。又は、なにかにえらく秀でたところのあつた人を、後世の人が神と崇めて祭つたものである。彼の湊川神社は、楠正成を祭つたもの。清正公は、加藤清正を祭つたもの。いづれも國家に功勞があり、又えらくもあつたから、後世の人がその功を思うて、神に祭りあげたものである。その他、すこし歴史に名のある人は、大抵みな神に祭られてゐる。

抑々、國に功ある人の功績を覺えて、國民一般これに向つて特別に敬意を表するのは、善い事である。その手段としては、記念碑をたつるもよからう。銅像をつくるもよからう。我々が先祖の中で、特別に家に功ある先祖の石碑を、普通のよりも、すこし大きく拵らへて、これに敬意を表するのと同じ事。併しながら、いくら功勞のあつた人でも、その人を神と崇めて、拜んだり、祈つたりするのは、大なる誤りである。人は、いくらえらくても、神にはなれぬ。生きてゐる間に人であつたら、死んだ後に

もまた人である。生きてゐる間に人であつたものが、死んだからとて、俄かにそれが神になれるものではない。蛇が年數を経た功徳によつて龍になるといふ昔話のやうに、人間も生きてゐる間に、多くの善い事をすれば、死んだ後には、その功徳によつて神になれるといふやうなものではない。人間は、いつまで立つてもやはり人間でゐる。神にはなれぬ。

また、人が人を神にするといふ事もできぬ。日本では、昔のえらい人たちを、後世の人が、神に祭るといふ事があるが、これも亦まちがつてゐる。人間は、自分でも神にはなれぬが、人をもまた神にする力はない。共和國で、人民の多數が寄つて、その中の偉い人を、大統領に擧げるやうに、後世の人が大勢寄つて、昔の英雄豪傑の中より、あの人を、この人をと、勝手に人を神に選舉する譯には行かぬ。

○不思議な力あるもの

しかし、こゝに一つ注意を要する事は、キリスト教でいふ神の意味と、日本でこれま

主である。キリスト信者は、この造物主の外、何者をも神として拜むことをせぬ。神はたゞこの獨りの造物主に限つてをる。ところで、日本のはさうではない。神は必ずしも造物主に限らぬ。なんでもよろしい。人間以上の不思議な力を持つてをると思ふものを神にする。死んだ者を神として拜むのは、死んだものには、生きてをる人間の持たない不思議な力があると思ふからである。幽霊を恐るゝのも、この迷信から來てをる。普通の人ですらさうであるから、まして偉い人が死ねれば、その人の靈は、死んだ後には愈々えらくなつて、ますます不思議な力を顯はすだらうと、こう思ふところから、昔の偉い人々を神として拜むやうになつたものである。一口にいへば、日本の神は、たゞ人間以上の不思議な力を持つてをるもの。さうして、それはなんでもよい。人に限らぬ。鳥でも、獸でも、虫けらでも、不思議な力があると思へば、すぐそれを神にする。古狐、古狸、大蛇、大蜈蚣、いづれもみな神に祭られてをる。林の中ですこし目に立つ大木でもあると、あの木には木の精がをるといつて、すぐその廻りにしめ縄を張る。石でも、小さなものは、足の先で蹴ころがしておきながら、すこし

大きな岩でもあると、すぐ大岩大明神と崇めてをる。實にまちがつた神の觀念である。

○日と月と星

又かの日や月や星なども、神と思つて拜む人がある。彼等は、日を御日様と唱へ、月を御月様と唱へ、星を御星様と唱へて、なんだか、生きてをるものでもあるかのやうに、これを尊んでをるが、實に愚な話ではないか。太陽は、神が世界を照らすために作つて下さつた火の玉である。誠に重寶なもので、これがなければ、人も何もみな死んでしまふから、有りがたい賜物には相違ないが、しかし、そんな結構な火の玉を下さつた神を拜まずに、却つてその賜物に向つて手を合はするのは、とんでもない間違つた考へではあるまいか。寒い日に、人の家にいつたとき、その主人が火鉢を出してくれて、御かげでぬくもつたからと言つて、その主人には禮をいはずに、頻りにその火鉢に向つて御辭儀をするのと同じではあるまいか。少し道理の分つた人なら、すぐ、その愚な事が分るべき筈であるのに、今なほ立派な人たちが、毎朝、日の出に

向つて、恭しく手を合はしてをるのを見ると、迷信の力といふものは、中々えらいものだと思ふ。

○善き神と悪しき神

一體、これまで我々が拜んでゐた神は、こんな迷信から出てをるので、その中にはいろいろなものがある。えらい神もあれば、さうまでえらくない神もある。上等の神もあれば、下等の神もある。甚しきは、善なる神の傍に、悪なる神までがある。かの石川五右衛門も神に祭られてをる。鼠小僧もまた神と拜まれてをる。こういう者を神として拜むものには、いづれ碌なもの居るまいが、それにしても、泥坊や掏摸の親分までを神とするに至つては、實に、わが國に於る神の觀念の低さ加減が分るであらう。そして又、こんなもので神とするやうになつたから、神の數がむやみに殖えて來た。

○神々の雜居

そこで、近ごろは、あまり神が多すぎるといふところから、ソロ／＼と減らす工夫が

始まつた。しかし、今まで祭つてゐた神を、今さら全く無くしてしまふのも、なんだか氣がすまぬやうに思はれるものと見え、體裁よく、神社合併の名義の下に、神々の雜居を企だてた。しかし、その實は、廢止も同然である。

ある所に、五百戸足らずの村がある。そこには、これまで七十幾つかの神社があつた。ところで、村費多端の今日、七十有餘の神社の世話は、到底できかねるといふので、村民一同協議の上、村内の神社を四ヶ所にまとめ、もうこの村には、神社といふものは、この四ヶ所の外にはおかぬことにした。さてこの決議のため、酷い目に逢つたのは、この村の神々である。今までは、間口三間奥行五間といふ立派なお宮が、今度は俄かに、二尺に三尺といふ小さな祠になつて、それが二十も三十も、貧乏長屋がならんだやうに、新しい神社の境内に、ヅラ／＼とならんでをる。なるほど。村の側からいへば、それで年々の入費が減つて、誠に結構な話であらうが、神々の側になつたらどうだらう。何も神々の方から、合併の申出があつた譯ではなし、又その神々の同意を得て、この合併を行つたといふのでもない。たゞ村民の懷都合で、勝手に

にこの改革を行つたものである。しかし、若しこの七十幾つの神々が、本當の活ける神であつたなら、さうまで村民の手ごめにされて、それでも黙つてをるだらうか。いくら貧乏人でも、自分の住居を、さう勝手に人に扱はれるやうなことはせぬ。こちらを見ても、こんな神は、本當の生きてをる神ではない、たゞ人間の迷ひから出た無生の偶像であるといふことが分らねばならぬ筈。つまるところは、こういう神は、もと人間が勝手に拵らへた神、すなはち人間手作りの神であるから、廢するも、合するも、また人間の勝手次第といふ譯だらう。

○三億三千万の神

しかし、澤山の神を拜んでをるのは、獨り日本ばかりでもない。朝鮮も、支那も、印度も同じこと。ことに、印度の如きは、甚しい多神教國である。印度の人口は、現時三億といふ。それに、神の數は三億三千万もある。實に夥しい神ではないか。日本の八百萬などは、逆てもそばにも寄りつけぬ。日本では、人口七千萬に對する八百萬の神であるから、人九人に、神ひとりといふ割合に當つてをるが、印度では、三億に對

島、神、日本、神、種、偉人、崇拝、國民団結、土、必、然、生、産、物、が、是、海、ハ、マ、セ、

する三億三千万といへば、人一人に、神はひとり一分に當る。酷い國もあつたものだ。さすがは印度、釋迦の出た國だけはある。

○人に罰せらるゝ神

その外、いづれに行つても、まだ人智の開けない國には、神の數は澤山にある。野蠻國に行くと、蠻民どもが、棒切でも、石ころでも手當り次第に、少し異つたものがあれば、すぐそれを突き立て、神といつて拜んでをる。朝狩りに出るとき、彼等は、その棒切に向つて、頻りにその日の好運を祈つて行く。そして、幸に獲物があれば、歸りには、又その棒切の神に禮をいつて歸る。ところが、不幸にして、その日に獲物がなかつたら、歸りには、その神を酷い目に逢はせる。折々は、その神を縛りあげて、明日獲物をくれたら許してやるが、さもなくば叩き毀はしてしまふと、神を嚇しつけて歸ることがある。人間が神を叩くとか、毀はすとかいふ事は、我々には、一寸受け取れぬほど愚な話に聞えるが、野蠻國では、いま實際にさういふことが行はれてをる。素より、棒切の神は、蠻民どもの手作りの神であるから、叩くのも、毀はす

三、眞、面目、二、研、究、サ、レ、ヨ、人、ナ、リ、

のも、また彼等の勝手であらう。しかし、こういう話を聞いても、あまり蠻民どもの愚を笑はれもせぬ。今のわが國の神社合併のはなしと、その愚さは、蓋し五十歩百歩の間ではあるまいか。また神を罰したとか、叩いたとかといふ話は、日本の昔の本にも、折々見えてをる。こゝらを見ると、人智の開けない時には、どこの國でも、大抵みな同じことをやつてをるものと見える。

○文明と神信心

然るに、世が開け、國が文明にすゝめば、こういう迷信はみな無くなつてしまふ。今の世界で、文明國と言はれてをる、ヨーロッパやアメリカでは、もうこんな迷信を持つてをるところは一國もない。彼等は、天地の造物主なる只獨りの活ける眞の神の外には、何者をも拜まない。併しながら、これらの國でも昔からさうではなかつた。昔はみな、今の支那、印度のやうに、色々な偶像を拜んでゐた。神の數はかうへきれぬほど澤山あつた。それが段々なくなつて、今のやうに成つて來たのは、丁度、夜の間は澤山の星が空にキラ／＼光つてをるが、いよ／＼夜があけて、太陽が東の空に上つ

あつた
私生児

てくると、その小さな星の光はみな消えて、世界が全く太陽の獨舞臺になるやうなもの。今の西洋は、もう眞の神の獨舞臺である。日本も、アジアの半開國の仲間を脱して、ヨーロッパやアメリカと肩をならぶ文明國にならうといふには、早くこんな小さな星の光をみな無くしてしまつて、眞の神の獨舞臺になさねばなるまい。いつまでも半開國のまねをして、神でもない偶像を拜んでをるのは、偶々以て文明國の恥である。

第二章 天 父

○凡ての物はみな神に造られたもの

さて、キリスト信者が拜んでをる、たゞ獨りの活ける眞の神とは、一體、どういふ神であるかといふに、これがすなはち天地萬物を造つて、これを主宰したまふ造物主である。凡そ天地の間にあるもの、なに一つ、この神によつて造られぬものはない。かの大空の日も月も星も、みなこの神によつて造られたもの。この世界も、またその上にある山も川も海も陸も、みなこの神によつて造られたもの。またその中にをる、禽

も、獸も、虫けらも、草も木も、金石も、土塊も、みなこの神によつて造られたもの。素より、天地には、天地自身を造る力はない、萬物にも、萬物自身を造る力はないから、家を見て、これを作つた大工を思ふやうに、天地萬物を見ても、これを造つた造物主を思ふべき筈である。また人間が物を作るときには、かならず材料が入る。大工が家を作るには、木や石や金が入る。材料がなければ、なにか一つ、人間の手で作れるものはない。しかるに、神が天地を造りたまふたときには、全くなんにもないところ、すなはち空の空なるところから、この複雑なる世界を造り出したまふたのである。これは、神には限りなき力と、限りなき智慧とがあるからである。

○四海兄弟

神はまた、萬物の一番終りに、人間を造りたまうた。いま世界中には、約十五億といふ、實に大した人間が在る。これがみな神に造られたもの。神に造られない人間は、この世には一人もゐない。だから、神がすなはち人間中の眞の親で、人間はみなその子供である。そして、互にはまた兄弟である。四海兄弟とはこの事をいふ。そこで、

神を敬ふ
 一統ハサルモノ
 叔ヲホリ、

仰いで、この神に親として敬ひ事へ、伏してはまた、互に兄弟として相愛する、これが人間第一の務めである。爾心を盡し、精神を盡し、意を盡し、主なる爾の神を愛すべし。これ第一にして大なる誠なり。第二もまたこれに同じ。己の如く爾の隣を愛すべし。(馬太傳二二三の三七、三八、三九)

○骨は何本

ところで、こういふとまた、ナアニ、己れは己れの親に作つてもらうた。そんな知りもせぬ神なんぞに作つてもらうたのではない。全體、子は親が作るといふが、天地自然の法則ではないか。なにもその間に、餘計な神なんぞを挟まんでもよさそうなもの、一寸小理屈を捏ねて見るものがある。どうも、物の道理の分らぬにも程がある。さういふ人は、ほんとうに、子は親が作るものと思つてをるだらうか。若しさうなら、一つ、自分で子を作つたといふ親に向つて尋ねて見たいことがある。

御前の子は、御前が自分で作つたものなら、自分が作つたその子については、お前は、なにもかもみな承知してをる筈であるが、どうだ、その子の體には、骨は何本ある、

肉は何斤ついでをる、血はまた何升入れてあるのか、一寸聞かせてもらひたいと、こ
ういふ事でも、一つ尋ねて見たなら、その人はなんと答へるだらう。ハイ。私の子の
體には、骨は何本、肉は何斤、血は何升入りますと、そんな答へができるだらうか。
中々。それどころではあるまい。御前の子の胃袋はどこに吊つてある、その腸は幾尋
に作つてあるかと、一寸腹の中のからくりを尋ねて見ても、これに向つて、満足な答
へのできるものが、世の中にどれくらいをるだらう。生理學でもやつたものは、兎も
角も、片田舎の百姓のおかみさんに、一つこんなことでも尋ねて見たなら、そのおか
みさんが、どういふだらう。へー、なんだか分りませんが、私の子の腹の中にも、そ
んな小六かしい道具があるのでせうか。私の子には、目は二つ、耳は二つ、鼻は一つ
と、これだけは分つてゐますが、もうそれ以上は、私たちには分りませんと、これよ
り外に答へはあそまい。こんな無教育のおかみさんたちに、どうして、體のからくり
なんぞが分るものか。その癖、こんなおかみさんたちに限つて、子を産むことはいく
らでも産む。産むことだけは、學者にも、金持にも、誰にも負けぬ。

○産むと作るとのちがひ

しかし、ほんとうに、自分で物を作つたといへば、その自分が作つたもの、性質、ま
たは組立ぐらひは、精しく知つてをる筈である。時計師は時計を作つた人。これに向
つて、御前の作つた時計には、彈條がいくつある、齒車がなんまいある、螺旋がまた
なん本さしてあるかと、こう問うたら、どの時計師でも、それぐらひは即座に答へる。
御互は、時計を買つて持つてはをるが、作つた人でないから、その中の機械のことは
さつぱり分らぬ。たゞその時計は、金か銀か、大か小か、それぐらひの答へはできる
が、もうそれ以上はなんにも分らぬ。そして、その分らぬところが、持つてはをる
が、作つたものではないといふ立派な證據。

親は子を産む、産んで持つてをる。それだから、その子は、男か女か、大きいか、小
さいか、それぐらひは、どの親でも知つてをる。併し、もうその上は分らない。親に
は、子を産む力はあるが、作る力はない。産むと作るとはちがふ。子を産むのは人に
限らぬ。犬猫でも産む。産む力は彼等の方が却つて多い。しかし、誰が、猫が猫を作

り、犬が犬を作るといふか。また産むことも、人が産むとはいふものゝ、これもまた人間獨りでは産めぬ。神様に産ませてもらふ。その證據には、いくら産みたくても、一人の子供も産めない親がある。男がほしくても女が生れ、女がほしくても男が生れる事もある。こればかりは、親の自由になるものではない。それでもなほ、子は親が作るものと言へるだらうか。すこし考へたら、分りさうなもの。子を産むものは親。子を造るものは神。神が即ち造りの親である。この造りの親のあることを教へるのが、キリスト教の神信心である。

○天の父上

いま僕が、君等に向つて、キリスト教の信仰をすゝむるのは、なにも、縁もゆかりもない、外國の神信心をすゝめる譯ではない。實は、君等に、この造りの親を知らせてあげるのである。君等はこれまで、かういふ有りがたい天の父上の在ますことを知らずにゐたらう。また知らなかつたから、信ずることも、愛することも、しなかつたであらう。それはもう、知らぬ間は致方なしとしても、既にこう分つた上は、どうぞ

この親に早く事へてもらひたい。子供の方では知らずにゐても、親の方では素より知つて、愛して、守つてゐて下さつたのである。君等に食物をあたへ、着物をあたへ、水をあたへ、空氣をあたへ、日を照し、雨を降らして、今日まで、この世に生き長らへさせ給うたものは、すなはち、この造りの親なる眞の神であつた。人間は、この神の力を離れては、たゞの片時でも、この世に生きてをることはできぬものである。

○米はどうしてできる

人間は、まづ食はねば生きてをれぬが、その食ひものゝ中でも、我々にとつて、一番大事なのは米である。ところで、その米は、百姓が作るといふが、その實は、たゞの一粒でも、百姓の力一つでできるものはない。米のできるには、四つの大事なものがある。種と土と水と太陽。この四つのものが一つかけても米はできぬ。しかるに、その中の一つでも、百姓自ら作るものはない。百姓はたゞ、既に作つてある種を播いたり、土を掘つたり、水を流したりするだけ。ことに、太陽の熱になると、もう百姓の力では、どうする事もできぬ。その照りかたが弱すぎては米はできぬ。また強すぎて

は早魃かんぼうになる。さればといつて、弱よわすぎるから強つよくする、強つよすぎるから弱よわくすると、竈かまどの火でも加減かへんするやうに、太陽たいやうの照てりかたを、百姓ひやくしやうの勝手かたてに加減かへんする譯わけにはゆかぬ。こゝらを考かんがへても、たゞの一粒つぶの米でも、神かみの力ちからによらなければできないものでないといふことが、分わからねばならぬ等ばう。

○水はたゞ

人間には、食たひもの、外ほかに、飲のみものが入いる。米こめや麥あわの外ほかに水みづが入いる。これが又神かみの賜物たまもの。この水は、誰たれにでも、たゞ取とれるやうにできてをる。水みづには價あたいはない。若しこれが、酒さけか醬油しょうゆのやうに、一升いっしょういくらというて、買かふものであつたらどうだらう。人々ひとびとがどれくらい難儀なんぎをするか分わかるまい。ことに貧乏びんぼう人が難儀なんぎをする。煮にたき洗せんたく風呂水ふうずいなどに、惜おぼしげもなく使つかつてをるこの水みづを、今いま俄はかに、一々いっさ金かねを出だして買かふやうにでもならうものなら、それこそ天下てんかは大騒おほさわぎになるだらう。有ありがたいことには、そんな大事だいじな水みづであるから、こればかりは、いくらでもたゞ使つかへるやうにできてをる。世界中せかいじゅう、至いたるところに、水みづは流ながれ、水みづはふき出してをる。我々われらは、もう慣なれてしまつ

て、なんとも思おもはず使つかつてをるが、こゝにいふ大事だいじな、必要ひつたうな、結構けつこうな、便利べんりなものを、こゝ自由じゆう勝手かつてに使つかへるやうに拵しらへておいて下くださつた神かみの御恩ごおんは、感かん謝しゃせずには居ゐられない等ばう。ナアニ、冷水ひやみづ一いっぱいかなど、たゞ一口いっくちに言いひ去さるけれど、實じつは、その冷ひや水みづ一いっぱいが、尊たよとき神かみの愛あいの賜物たまものであるといふことを忘わすれてはならぬ。

○空氣には貴賤きせんなし

又またこゝに、人間にんげんの生活せいかつ上じやう、米こめよりも、水みづよりも、なほ大事だいじなものがある。それは空氣くうき。飯いひは四十日食しじゅうにちしょくはぬでも生きてをる。水みづは一週しゅうかん間かん飲のまぬでも生きてをる。空氣くうきは五分間ごふんかんもすはぬとすぐ死しぬといふ。人ひとの體からだに取とつて、これほど大事だいじなものはない。しかるに、その大事だいじな空氣くうきが、また絶對ぜつたいに價あたいなしである。こればかりは、いさゝかも人ひとの手間てまを要まをしない。水みづはたゞ飲のめるとは言いふもの、井戸いどを掘ほつたり、水道すいどうを引ひいたりして、時にはいくらか人ひとの手間てまを要まをすることもあるが、空氣くうきをすふには、そんな手間てまもなんにもいらぬ。たゞ吸すひさへすればよい。

空氣くうきはまた絶對ぜつたいに貴賤きせんなし。これこそは本當ほんたうに平へい民みん的てきである。王様わうさまのすふ空氣くうきも、乞こ

食のすふ空氣も、金持のすふ空氣も、貧乏人のすふ空氣も、空氣にはかはりはない。いや、實をいつたら、金持が大金かけて作った立派な家の中の空氣よりも、貧乏人が、いつも自由にすうてをる、青天井の野原の空氣の方が、遙かに上等である。空氣だけは、却つて貧乏人の吸ひ糶を、金持や貴い人たちがすうてをる譯かも知れぬ。

○世界は無盡藏

ほんとうに、この世界はよくできてをる。人間の生活上、絶対に必要なものは、絶対に價なし。又さうまででもないものには、段々と手間がかゝり、金がかゝり、さうして、いよ／＼必要でない贅澤品や、または有害物になると、随分高い價を拂はねばならぬ。しかし、兎に角、この世界は、慈悲ぶかき親が、その愛子のために設けてくれた家のやうに、愛なる神が、その子供である人間のために、供へて下さつた住居であるから、我々の幸福を受くるに必要なものは、なにからなまでに、みな備へつけてある。我々が智慧を搾つて取りさへすれば、いくらでも取れるやうにできてをる。まづ食ふためには、穀物、野菜、果物、肉類など、數知れぬほど、山海の珍味が供へてある。

着物のためには、綿なり、麻なり、絹なり、毛なり、それ／＼の氣候に應じて、これもまた十分に供へつけてある。住居のためには、木もあり、石もあり、金もあり、土もあり、どんな大きな建物でも、どんな立派な家でも、自在に作れるやうになつてをる。その外、目を悦ばすには、花も咲く。耳を樂ませるには、虫もなく。鳥もうたふ。實にこの世界は造物主の無盡藏である。我々は、この無盡藏から、勝手に引き出してきて、食つたり、飲んだり、着たりして、それで、この世に生きてをるから、この神の御恩に對しては、常に感謝してをるべきである。

○己れの金で己れが食ふ

しかるに、己れは、己れが儲けた己れの金で、飲んだり、食つたり、着たりしてをる。誰の厄介にもなつてゐない。この鯛でも、己れが五十錢出して魚屋から買うてきたもの。神がたゞ下さつたものではない。若し神が、こんな魚をたゞ下さつたなら、その時は、その神の御恩に感じて、御禮も言はうが、神でもなかく／＼たゞは下さらぬ。やつぱり五十錢の價を出さねば、この鯛は己れの口には入らない。相當の價を

出して買うて食ふ魚のために、どこに向つて御禮なんぞが入るものかと、こんな無茶をいふものがある。

○五十銭は鯛の價か

しかし、よいことを聞いた。若し神がこんな魚をたゞ下さつたら御禮を言はうと。それでは一つ、研究してもらひたい。實のところ、その魚は、神からたゞもらうてゐるのではあるまいかと言ふことを。そも／＼、鯛のために拂うたといふ五十銭は、その實なんのためだらう。それを君等は、その鯛の價といふのか。そこがまちがつてゐる。その五十銭は、鯛の價ではない。それは、海の中に網をふるして、その鯛をとつた漁師の骨折りちんと、それを漁師から買うて、君等のところまで持つてきた魚屋の手間ちんとで、それが合せて五十銭になる。さうすれば、その五十銭では、鯛そのもの、價を拂うた譯ではなく、たゞその漁師と魚屋の骨折りちんを拂うたにすぎぬ。すこし引事が不釣合かは知らぬが、そも／＼この鯛について、三通りの手間が掛つてゐる。第一は、これを作つて海の中に放しておいた神の手間。第二は、網を打つてそれを取つ

た漁師の手間。第三は、それを持つてきた魚屋の手間。この三つの手間が揃はなければ、一尾の鯛も、御互の口には入らぬ。ところで、その五十銭では、第二と第三の手間を拂つてゐるから、もう漁師と魚屋に對しては、別に禮を言ふ必要もないが、その第一の魚を作つて海の中に放しておいて下さつた神の御手間に對しては、君等はいくら拂つてゐるのか、海の中に泳いでゐるものを、たゞ取つてくる漁師の骨折りや、それを運んだ魚屋の手間に對してすら、なほ且つ五十銭を拂ふほどなら、こんな結構な魚を作つて下さつた神に對しては、いくら拂うたら宜いだらう。中々五十銭や一圓ではすむまい。若しほんとうに鯛の作主に向つて、その魚の實價を拂ふといふ事になつたら、たゞの一尾の鯛でも、その價は實に大したものになるだらう。

○萬物みな神の賜物である

いくら人智が進んでも、人間には生物を作る力はない。若し人間の力で、小鯛一尾でも作れたら、その小鯛の價は、一體いくらぐらいするだらう。とても相場はあるまい。あの左甚五郎の彫つた猫は、その價が中々安くはないさうな。なぜなれば、その猫

は、丁度、生きてるやうであるからと。しかし、たゞ生きてるやうなと言ふだけで、さうなのならば、若しその猫がほんとうに動き出して、ニヤードでも泣いたらどうだらう。甚五の猫は生きてるさうなと、それこそは、世の中がひつくりかへらう。そんな活きた猫の價は、とても算盤にはかゝるまい。

併しながら、昔から、生物といつたら、虫一疋でも、人間の力でできたものはない。又この後とても、こればかりは決してできぬ。生物を作るは、たゞ神のみである。その神が、色々な活きた魚を澤山に作つて、海や川に放しておいて下さつた。また活きた鳥や獸を澤山に拵へて、地の上に放しておいて下さつた。それを人間が、網や鐵砲で、たゞ取つてきて食つてをる。さうすれば、神からは、こんな生物は、凡て皆たゞ頂いてをるのではあるまいか。全體、何物に限らず、我々が商人に拂ふ物の價といふは、物そのものゝ價ではない。それはみな、神が作つて下さつたものを、取つたり、運んだり、切つたり、刻んだりした、人間の手間賃を拂ふのであつて、肝心なその物の價を拂うて居るのではない。萬物みな神からはたゞ頂いてをる。人がまじめになつ

て考へたなら、この世界には、神からたゞ頂いてをらぬものは、なに一つないことが分る筈である。それに、どうして、己れの金で己れが食ふなどいへるだらうか。實に、神に對して恐れ入つたる暴言ではあるまいか。かゝる思知らずの罪は、決して輕くない。神はまた、かういふ思知らずの罪人を、決して見のがしにはなさるまい。神は愛の神であるが、同時にまた義の神である。人は愛したまふが、罪は憎みたまふ。

○神はどこにでも在ます

キリスト教では、神のために宮を建てぬ。神棚もつくらぬ。なぜなれば、眞の神は、そんな人間の手で作つた小さな宮や、狭い棚のすみなどに居たまふ御方ではない。廣い天地がすなはち神の宮である。神は天地にみちて居たまふ。我々のをるところ、行くところ、神の在まさぬところとてはない。どんな闇いところにも、どんな淋しいところにも、神は必ずそこに在まして、我々のすること、なすこと、みな見て居たまふのである。人間は神の前には、丸裸である。

そも、人間が惡事をするのは、多くは、自分ひとり居る時である。獨り居るとこ

ろでは、誰も見てをるものがないから、何をして構はぬといふ氣になつて、勝手次第に悪事を働くのである。若し誰かそばにゐて、始終見はつてをつたら、いくら悪人でも、さうズウ／＼しく悪事の働けるものではない。ところで、眞の神を信仰すると、いつもその神が我々のそばについてゐて、我々のすること、なすこと、みな見張つてをられるから、その目を盗んで、コツソリと、悪事を働くといふ譯にはゆかぬ。それで、神を信ずるものには、もう獨居といふことはできなくなる。どこに行つても獨りではない。神と偕にをる。この神が始終身につきまとうて居たまふので、それが恐ろしくて、もう悪事はできなくなる。これが神信心の功德といふもの。

○御父さん見てるものがあるよ

あるところに、野あらしをする爺がゐた。野あらしとは、畑に作つてある物を盗む泥坊のこと。ある夜、胡瓜を盗みに行かうと思つたが、アイニク、その晩は月夜で、世間が晝のやうにあかるいので、ヒョット、人にも見つかつては大變だと思ひ、自分の息子を番人につれて行つた。息子を泥坊の番につれて行くと、實に恐れ入つた家

庭教育である。さて、いよく胡瓜畑に着くと、爺はその子に、お前はこゝに立つて番をしてをれ。お父さんは、あすこで仕事をやるから、そして、若し上からでも下からでも、人が来るやうであつたら、すぐ御父さんに知らせにこいと、よく言ひつけておいて、自分は畑に入つて、頻りに胡瓜を取つてゐた。

子供は、親に言ひつけられたまゝ、道に立つて、あちこちを見まはしてゐたが、誰も来るやうな様子はない。しかし、子供の心には、始めから一つの怖いものがあつた。そして、その怖いものが、段々に怖くなつて、もう怖くて怖くて堪らないやうになつてきた。そこで思はず聲を立て、お父さん。お父さん。見てるものがあるよ。見てるものがあるよと叫んだ。これを聞いた爺は、ビックリして、折角とりためた胡瓜をみな投り出してしまつて、早速息子のそばへ飛んできた。どら、どこに、だれが見てをるのかと問ふと、子供は、始めの間は黙つてゐたが、頻りに問はれて、天を指して、お父さん。神さまが見て在らつしやるではないかと言つた。

○眞の親孝行

さて、どうしてこの子は、そんなことを知つてゐたかといふに、有りがたい事には、こんな悪黨の子でも、近所の子たちにさそはれて、日曜ごとに、キリスト教の日曜學校に出て、先生から、神さまはどこにでも在らつしやる、野にも、山にも、内にも、外にも、晝も夜も、どんな闇い所にも、又どんな淋しい所にも、神の在まさぬ所はないから、人間がどんなに隠れて悪事をして、神さまはチャント上からそれを見て在らつしやると聞いてゐた。そこで、いま自分の親がそれを知らずに、誰も見てゐないつもりで、しきりに胡瓜を取つてをるところを、その神が天から睨んで居たまふのが、子供の信仰の目に、有り／＼と見えて來た。それで、もう怖くてたまらなくなつて、お父さん。見てる者があるよと叫び出したのである。また實際にそうであつた。この子の信仰の通り、神はその晩でも、チャント上からその野あらしのすることを見て居たまうた。そして、その爺は、確にその罪のために罰せらるゝ所であつた。それを知つて、早く止めたのは、この子に取つては、あつばれでかした親孝行である。

○神を恐るゝは智慧の始めなり

併しながら、自分が悪事をしてをるところを、上から神に睨みつけられてをるのを知らずに、平氣でヅウ／＼しくやつてをるのは、たゞこの野あらしばかりでもないだらう。恐らくは、天下の人みな然りではあるまいか。晝のあひだは、人目があるので、少しは憚つてもをるが、夜になると、もう誰も見てゐないつもりで、勝手次第に悪事を働いてをるところを、上からジツト義なる神に睨まれてをるといふのは、實に、どういふ恐ろしいことだらう。そも／＼、人間の運命といふものは、全くこの神の手に握られてをる。活すも、殺すも、罰するも、助くるも、凡てこの神の自由である。人間にもいくらかの自由はあるが、併しその自由は、池の中の魚の自由と同じこと。遅かれ早かれ、一度はみな神の手に引きあげられてしまふものである。聖書に、神を恐るゝは智慧の始めなりとある。どういふ恐ろしい神のいますことを知つて、心からその神を恐るゝやうにならなければ、人の悪事は止むものでない。こんな神の在ますことを知らない人に向つて、いくら善をすゝめ、惡をいましめても、それはダメなことである。世のいはゆる道德家が、神をぬきにして、たゞ古人の金言や格言なすを引

いて、それで人心の改善を計らうとしても、それだけでは、到底その目的を達することはできぬ。眞の神を知らぬ世界は、ますます腐れ、ますます汚れて、罪の淵に沈むより外はなきものである。

第三章 罪 惡

○良藥は口に苦し

キリストは靈の醫者。キリスト教は靈の藥。良藥は口に苦しで、ある者には、キリスト教は随分にかい藥である。又ある者は、この教に入る前には、随分いたい療治を受けねばならぬ。キリスト教は、善惡こんこう、誰でも御座れといふ教とはちがふ。この教に入る人は、その苦い目や、痛い目は、素より覺悟の上でなければならぬ。しかし、なぜ人が御醫者をよんで、苦い藥を飲んだり、痛い療治を受けたりするかといふに、それは、自分に病氣のあることが分つたからだらう。又その病氣を捨て、おいたら、ことによると死ぬかも知れぬといふことが知れたからだらう。若しさうでなかつたら、誰がお金を出してまで、そんな苦い思ひや、痛い思ひをするものか。魂の療治

もこれと同じ。自分には、罪といふ靈の重い病氣のあることが知れなければ、又その罪のためには、魂が終には滅びるといふことが分らなければ、靈の御醫者も、靈の藥も、あまり懇望しないであらう。そこで、神のことが、一通り分つた上は、これから一つ、罪について話をしよう。

○二口目には罪々といふ

ところで、ある人はこういう事を言つてをる。どうも、ヤソの説教を聞くと、二口目には、すぐ罪々と言つて、人を罪人あつかひにする。我輩は、まだ人殺も泥坊もした事はない。また不義理をして、人に迷惑をかけた覺えもない。不肖ながら、人間一人まへはやつてをるつもり。なにも、さうやたらに、罪人よばりをされる筈はない。あれだから、ヤソは嫌ひだ。ヤソを聞くと癩にさはると。

なるほどその通り。キリスト教では、二口目には罪々といふ。若し罪々といはぬキリスト教があつたら、それは恐らくキリスト教の偽物だらう。本物のキリスト教なら、どうしても、二口目には、罪々と言はねばならぬ。全體人間には、罪があるからある

と言ふので、なにも、ないものを殊更に拵らへて、人いやがらせに言ふのではない。却つて、現にある罪をないと言つたら、それこそは嘘つきになる。若し醫者が病人をつかまへて、お前には病氣はない、薬も入らぬ、療治も入らぬ、たゞ食ひたいものを食ひ、飲みたいものを飲んでをれば、それで宜しいといつたらどうだらう。病人はそれを聞いて、その時は悦ぶかも知れぬが、あとではキツト泣くことがある。若し病人が、自分に重い病氣のあるのを知らずに、我がまゝばかり言つてゐたなら、いくら嫌やがつても、その重い病氣のあるのを知らせてやるのが、醫者の親切ではあるまいか。また、それを聞いて、あの醫者は氣に喰はぬ。人さへ見れば、二口目には、病氣病氣と、人を病人あつかひにするから、癪にさはると、こういうものがあるだらうか。若しあつたら、それはその人が悪いのである。

○神の律法と政府の法律

己れは人殺はせぬ、己れは泥坊はせぬと、こう言つて威張つてをるが、それは全體人としての當りまへのこと。なにも威ばるほどのものではない。世の中に、さうむやみに、人殺や泥坊がゐてたまるものか。一體、世間の人は、罪といへば、すぐ政府の法律を犯すときの罪のことを考へて、泥坊や人殺のやうな酷いことさへせぬば、人には罪はないやうに思つてをるが、そこに大きな間ちがひがある。そもくキリスト教でいふ罪とは、政府の法律を破る罪ではなく、神の律法を犯す罪のことである。無論、政府の法律を破る罪も、その中に含んではをるが、それはほんの一小部分にすぎぬ。政府の法律も随分綿密にできてはをるが、神の律法に比べて見ると、實にあらつぽいものである。政府の法律では、現に人を殺さなければ、人殺の罪には落ちぬ。又現に人の物を取らなければ、泥坊にはならぬ。しかるに、神の律法はさうでない。殺さぬさきに人殺がある。盗まぬまへに泥坊がをる。

○人殺と泥棒

なぜ人が人を殺す。譯なしには殺すまい。おい、一つ、やつて見ようかと、大根の首でも落すやうに、人の首を切るものはない。人を殺すは、その人を憎むから。まづ憎まねば殺さない。あいつは憎い、憎い奴だと、憎い／＼が高じてくると、ついその人

を殺す氣になる。殺すは憎むの結果、憎む心が人殺の本である。ところで、人殺は容易にないが、憎む心は誰にでもある。世の中に、一度も、人を憎んだこと、怨んだこと、嫉んだこと、怒つたことのない者が、一人でもあるだらうか。すでに、この心があれば、神の律法の前では、その人はもう人殺の罪人である。故なくして其兄弟を怒る者は審判に干らん（馬太傳五の二二）。

またなぜ人が物を盗む。慰みには盗むまい。欲しいからだらう。欲しい、欲しいが高じてくると、つい人の物に手がかかる。凡ての盗みは、この人の物を欲しがる心から出る。さうして、これがまた誰にでもある。人の着てる衣服が欲しい。人の持つてる時計が欲しい。人のはめてる指輪が欲しい。人の溜めてる金がほしいと、貧乏人が金持を嫉み、お三どんが奥さまの着物をうらやむ。これがすなはち泥棒の卵である。

○姦淫の罪

聖書には、凡そ婦を見て色情を起す者は中心既に姦淫したるなり（馬太傳五の二八）とある。政府の法律では、現に女を犯さなければ、姦淫にはならぬ。しかし、神の律

法では、女に對して、汚れた情慾を燃すものは、もう既にその罪を犯してをる者と見る。人には、人の心の中が見えぬから、その人が、どんな恐ろしいことを巧んでゐても、それが業に現はれなければ、知る事ができぬ。しかし、神の前には、人の心は丸だしであるから、なにもその事の現るゝまで待つ必要はない。凡ての惡の根本である心の思ひを直ちに察して、すぐそれを罰し給ふことができる。全體、心が人の本體で、體はその道具である。心が命ずればこそ體が行ふ。既にその心に姦淫があれば、もうその人は、その罪に落ちたも同然。たゞそれが表に現れぬのは、まだ機會を得ないか、但しは、人目を憚かつてをるからである。しかし、機會や人目で抑へてをる罪惡ならば、若しその抑へものが無くなつたら、すぐその人はその罪を犯すやうになる。だから、既にその心があれば、もうその罪を犯したもとして罰したまふのは、當然の事だらう。

○罪の卵

鳥は卵から生れる。卵を見ると、黄身と白身の外、なにもないやうであるが、實は、

その中には鳥がをる。その卵の黄身と白身の中には、他日、鳥の羽となり、肉となり、血となり、骨となるべき一切のものが、みな備はつてをる。それで、卵から鳥を出すには、かの手品師などがするやうに、外から種を入れぬでもよい。たゞそのまゝに、牝鳥の腹の下で温めさへすれば、雛がひとりでに飛び出してくる。あすこを見るに、卵の中には、始めから鳥がをつたと言ふても宜いだらう。人殺や、泥坊や、姦淫は、鳥である。憎む心や、欲しがる心や、汚れたる情慾は、卵である。この卵も温めさへすれば、必ず鳥が飛び出してくる。實に恐ろしい卵ではないか。ところで、この毒蛇の卵よりなほ恐ろしい罪の卵が、人間の心の中には満ちてをる。

○鳥が居る

しかしながら、今こゝに、人間の心は、罪の卵で満ちてをるといつたのは、まだ聊かひかへ目に言ふたつもり。若し無遠慮に、有りの儘をいはせて貰へば、卵とはいはぬ、鳥と言ひたい。人間の心の中には、もう罪の鳥が満ちてをる。ことに、姦淫の罪の如きは、天下に充ち満ちてをる。若いものに最も多いが、年寄りにもある。上流にもあ

る。下流にもある。都會にもある。田舎にもある。しかも、この罪を犯させる場處が、公々然と、政府の許可を得て、全國至るところに設けられてをるとは、實にひどい話ではないか。丁度、國の真中に、竈をこしらへて、その中に若い男女を追ひ込んでをるやうなもの。素より、その竈に落ち込むものも悪いであらうが、そんなものを態々こしらへて、その中に人を追ひこんで、その生血をすゝつて、それで自分の腹を肥さうといふのは、實にどういふ悪魔の所爲だらう。そしてまた、政府も政府、それこそ人目を生を悪と知りつゝ、公然それを許すなどとは、これもまた言語道斷、沙汰の限らぬ、やれやれ、罪の世の中、淺ましい次第である、そんな事は、

○罪の種類

すい人ヲオモクヤにえつて、以上の三つ、人殺、泥坊、姦淫は、罪の中でも、最も目に立つ罪であるから、こゝには、たゞ罪の例としてあげたのである。しかし、罪の種類は、まだこの外にいくらかもある。嘘をいふこと、誇ること、高ぶること、貪ること、驕ること、怨むこと、嫉

むこと、誹ること、争ふこと、懶けること、博奕を打つこと、酒飲むこと、親に不孝なること、子に不慈なること、夫に不貞なること、妻に不實なること、主に不忠なること、人に不義理をすること、不正を行ふこと、不親切なることなど、一々數へあげたら、罪の種類は、中々夥しいものである。それが皆人間の心の中に満ちて居る。卵もあるが、鳥も居る。

誰でも、すこし本氣になつて考へて見たら、自分に罪のあること位はすぐ分る筈。誰がまじめになつて、己れには罪はない、己れは無疵の全い人間などと、そんな戯言がいへるものか。俯仰天地に耻ぢないなどは、ほんの口先、人前のほらといふもの。天地どころか、その實は、自分に對しても耻づかしい筈である。

○掃溜よりも汚ないもの

全體、世の中に、人間の心ほど汚ないものはない。掃溜がきたないと言ふが、心は又より以上である。手でも、足でも、出せといつたら、すぐ出すだらう。躊躇はずまい。少々はよごれてゐても構はない。しかし、心は一寸さうできぬ。こればかりは、

さう造作なく人の前に出せるものではない。親子の中でも、夫婦の間でも、わが心を丸出しには、一寸しにくい。若しこれができたら豪いもんだ。一つ試みに、君等の心を妻君の前に丸出しにして見給へ、妻君がなんと言ふか。マア、こんなことゝ知つてゐたならと、随分後悔せぬとも限るまいよ。御互に皮を被つて、内の様子を隠してゐるから、それでまづ持つたもの。若しこれが、あのガラス張りの店みたやうに、外からソックリ丸見えにでもならうもんなら、逆でも、こうまじめに附き合つてはをられまい。今のやうに、皮を被つて隠してゐても、まづ遠いあひだが花である。近よつたらもうおしまい。すぐお互のぼろがでるから。

○鉢の泥水

ある家に行つたとき、鉢の中に、水が一ばい汲んであるのを見た。一寸見たところでは、綺麗な水で、飲んでもよさそうに思つたぐらい。しかし、側に行つてよく見ると、底には泥が溜まつてをる。元は泥水であつたと見える。そこで、俄にいたづら心が起つて、一寸その鉢をゆすぶつて見た。すると、素より泥水であつたことゆゑ、そ

の底に沈んでゐた泥が、一時にみな浮きあがつてきて、鉢の水は、たちまち元の眞赤な泥水にかへつてしまつた。

そこで悟つたのが、ア、これが人間の心だナアといふこと。何事もないときには、罪はみな心の奥底に沈んでゐるから、一寸見れば立派な人、罪なやがどこにあるかと思へるぐらい。ところで一つ、何かの機会をつかまへて、一ゆすぶり、ゆすぶつて見ると、今まで心の底に沈んでゐた凡ての罪が、みな一時に湧きあがつてきて、その人は、見る／＼内に、全く別人間となつて、罪人の本性を現はしてくる。

○ゆすぶりもの

一體、罪の本性は、何かのゆすぶり物に出會はなければ、ほんとうに現はるゝものではない。そしてまた、このゆすぶり物が、人によつて各々がふ。男には、男のゆすぶり物がある。女には、女のゆすぶり物がある。年寄にも、若いものにも、學者にも、無學者にも、貴きも、賤じきも、富るも、貧しきも、皆その道々のゆすぶり物がある。酒ずきには、酒といふゆすぶり物がある。放蕩家には、女といふゆすぶり物がある。博奕打には賽ころ、喧嘩ずきには拳骨、慾張りには金、名譽家には世間の評判、姑には氣に入らぬ嫁など、人は各々そのゆすぶり物を持つてゐる。それで一つ、ゆすぶられた日にはもう堪らない、たちまち罪人の本音をばくやうになる。

○泥水がへり

ある旅館に泊つたとき、すこし雨戸をあけて寝てをると、巡査がきて、どうやうして下さいといふ。なぜかと聞けば、これが、泥坊の泥坊心を引きおこす元になるからと。長いあひだ、監獄で苦しめられて、もう／＼泥坊なやが決してすまいと、漸く改心して出てきたものが、一寸夜中に、人の家の雨戸の隙でも見つけて、あれから入れば、すぐ旨い仕事ができるナアと、こう思つたら、もう堪らぬ、漸く底に沈んでゐた泥坊心が、忽ち湧きあがつて来て、再び元の泥水にかへつてしまふと言ふこと。なるほど。さういふ事があるかも知れぬ。どこの監獄にでも、そんな泥水がへりの泥坊が大分多いやうである。して見れば、いくら監獄で、長いあひだ、懲らしたり、諭したりして、罪人を改心させても、罪の泥は、たゞ心の底に沈むばかりで、まだ全く無く

なつてはをらぬ。先に見た鉢の泥水のやうに、雨戸の隙といふ泥坊心のゆすぶり物でゆすぶられると、もう一堪りもなく、すぐ又元の泥水にかへつてしまふ。どうも、こちらを見ると、心の中の罪の泥は、中々容易なことで取りきれぬものではないと見える。さうして、その罪が、ゆすぶれば、ゆすぶるほど、いくらでも出て来るところを見ると、人の心の奥には、どれくらい澤山の罪の泥が溜つてをるか分るまい。

○三千萬の芥

空氣には芥がある。けれど、只是見えぬ。しかし、障子の隙からさしこんで来る太陽の光にすかして見ると、キラ／＼キラ／＼、その中には、實に夥しい芥のあることが分る。ところが、これはまだ我々の肉眼で見ただけの芥。若し顕微鏡でこれを見たなら、肉眼には、一つの芥しか見えぬところに、忽ち何千何萬といふ澤山の芥が見える。ある學者が、空氣の中の芥を試験して見て、實に驚くべき事實を發見した。空氣の中でも、都會の空氣に一番芥がある。ある市の家の中の空氣を取つて試験して見ると、その一寸立方中に、芥が三千萬以上もあつたといふと、芥だけでない、いろ／＼

な微菌もまた居るさうな。三千萬といへば、日本の全人口の半分である。それだけが芥となつて、一寸立方中に籠つてをると言へば、空氣の中の芥が、如何に多いかと云ふことが分るであらう。實に驚くべき事實ではないか。

○靈の顕微鏡

さて、人の心も空氣と同じ、罪と汚れに満たされてをる。けれど、たゞの目にはそれが見えぬ。信仰の目を以て、神の光に照らされて見ると、心の中の罪の有様がよく分つてくる。實は、キリスト教にこない間は、罪といふことが、まだほんとうには分らんでをる。これまでも、罪といふことを聞いてはゐた。又言ふてもゐた。しかし、その罪が自分の心の中にどれくらい澤山あるか、どんなに汚ないものか、又どんな靈の微菌がその中にをるか、顕微鏡のやうな神の靈の力によらなければ、その眞實の有様が分るものでない。一たび神の靈によつて、わが心の中を照らされて見ると、實に恐ろしいほど澤山に、その中から罪が現はれて来る。今までは、平氣で爲てゐたこと、平氣で言つてゐたこと、平氣で思つてゐたことが、みな罪である。今までは、善いと

思つてしてゐたこと、誇つてしてゐたこと、得意になつてしてゐたことが、みな罪である。自分の生涯は、徹頭徹尾罪の生涯。自分の心は罪に満たされてをる。自分は全く罪の塊であるといふことが分つて来る。

○キリスト教の正門

そこで、いよく自分の罪の深いことが分つてくると、もう堪らなくなつて、その罪を悔いて、泣くものもある。倒れるものもある。氣絶するものもある。しかし、こうならねば本當ではない。ほんとうに、神の靈の光を受けたものは、必ずこうなるべきである。これを罪の悔い改めと言ふ。すなはちキリスト教の正門である。罪人は、この正門から入らなければ、奥座敷にそなへてある救ひの御馳走にあづかることはできぬ。今時は、罪の悔い改めなすは古くさいから、一つ新趣向で入らうかなど、つまらぬことを考へてをる者がないでもない。しかし、それはダメ。救ひの道に入るには新趣向も何もあつたものではない。こればかりは、昔も今もかはらない、罪の悔い改めと言ふ狭き門より入らねばならぬ。若しこの正門より入らずして、垣を破つたり、

堀を越えたりして、入らうとしたら、それこそは、盗人なり、強盗なりで、キリスト教に入る資格のない人である。世間には、キリスト信者といつてをる中に、往々この種の無資格者がまぎれこんでをる。注意すべき事である。

第四章 審判

○鏡のくもり

罪のあることはよく分つた。人には罪がある。人は罪のかたまりである。しかし、罪があればどうなるといふのか。罪がなぜ悪い。罪を犯すのがなぜ怖い。昨日の罪は、今日はもう消えてをる。若い時の罪は、年を取ると無くなつてしまふ。なにも罪々と、さう仰山にいふ必要はない。鏡に曇りがかゝつたら、拭へば取れる。顔に墨がついたら、洗へば落る。さう心配するほどのことでもあるまいと、罪といふことを、ごく軽いことに考へてをる人がある。

ところで、罪といふものは、そんな軽いものではない。鏡の曇りや、顔の墨などにならふへきものではない。實は、こゝろいふ喩が、そもくまらがひの種である。全體、

喩といふものは、眞理ではない。眞理を説きあかす手段にすぎぬ。そして、その喩の引きやうによつては、却つて眞理を誤まらせる事になる。この鏡の曇りの喩の如きがすなはちそれで、こんな誤つた喩のため、これまで罪といふ事が甚だ軽いものに考へられてゐた。

○罪は謀叛である

そも／＼罪といふものは、律法を犯すこと。なしてはならぬと止めてあることをする。又せねばならぬと命じてあることをせぬ。例へば、政府の法律に、盗んではならぬと止めてあるのに盗む。税は納めねばならぬと命じてあるのに納めぬといふやうな、凡て權威を以て上から言ひつけられてをることと反いて行ふことである。それだから、罪は、その法律を立てた者に對しての謀叛である。日本の法律を犯すものは、その法律をお立てになつた、天皇陛下に對しての謀叛に當る。謀叛の罪は、鏡の曇りや、顔の墨のやうに、拭へばすぐ取れるといふものではない。若し喩を取るなら、丁度、テンプルに釘を打ちこんだやうなもの。假令その釘は引きぬいても、その釘跡はいつま

でも残つてをる。一度犯した罪は、もう永遠に消ゆるといふことはない。

○罰が怖い

又なぜ人殺や泥坊の罪が怖いかといふに、なにも法律書に、人を殺してはならぬ、人の物を盗んではならぬと、かいてあるからだけではあるまい。たとひ法律書には、どんな大きな字でそんな事がかいてあつても、只それだけならば、別に怖い事はない筈である。しかるに、それが怖いのは、その後には警察と監獄とがひかへてゐて、泥坊すれば、すぐ巡査がきて警察につれてゆく、人を殺せば、すぐまた自分も殺されるといふやうに、靦面に罰がくるからである。若し盗んでも縛られず、殺しても殺されぬといふことであつたら、泥坊も人殺も、さう怖がるほどの事でもあるまい。世界の中には無政府の國がある。そこでは、泥坊も人殺も勝手次第、取れば取りどく、殺せば殺しどく、そんな國では、なにをやつても、怖いといふ事はないだらう。

○神の罰

凡ての罪は、神の律法を犯す、神に對しての謀叛であるから、これには、一々神の罰

がついてをる。若しこの罰がなかつたら、神の律法を犯しても、さう怖いことはないだらう。神の在ますことを知らぬ人は、素より、罪には、そんな罰が一々ついてをると言ふことも知らぬから、彼等が罪についての考へは、頗る淡泊。いはゆる顔についた墨、汚ないから拭うたらよからうと言ふぐらいで、別に罪を犯すことが、さう恐ろしい事とは思つてゐない。だから、彼等は凡ての罪を、平氣で犯してをる。若し神の律法には、非常に綿密な罰則がついてゐて、一分一厘でも、これを犯せば、嚴重に罰せられると言ふ事が分つたら、もう人はその罰が怖くて、罪を犯すことはできなくなる筈。ところで、凡ての罪には、實際にさういふ嚴重な神の罰がついてをる。政府の法律書を見ると、その罰則が中々綿密で、水も漏れぬほどにできてをるやうであるが、それでも世間には、その法律をくゞるものが澤山にをる。然るに、神の律法は、誰もこれを脱けくゞりすることができぬ。打てば響くといふほどに、凡ての罪には必ずその罰が報いてくる。さうして、その罰が、時々は靦面にくる。火をつかひと、すぐ手が焼けるやうに、悪事をすれば、すぐその場で、その悪が報いてくることがある。併

しまた、さう急には來ないで、チリ／＼と、いつ受けたか分らぬ内に、はやその罰を受けてをることもある。天網恢々疎にして漏らさずで、神の網は、一寸見たところでは目があらくて、いくらでも脱け潜りができるやうに思へるが、實は中々さうではない。非常にこまかく、非常に緻密で、人間はどうしても、その目を脱け出すことはできぬ。悪人どもが、一寸一旦は逃れたやうでも、すぐ又その網に引つかゝつて、酷い目に逢ふ。

○この世は學校

併しながら、こゝに一つ知らねばならぬことがある。それは、善惡の賞罰は、この世では完全に行はれてゐないといふこと。それで、この世に於ては、時々悪人が榮えて善人が苦しむこともある。善には善報、惡には惡報といふことは、この世だけでは完全ではない。だから、天道は是非かならずといつて、この世に神の賞罰のあることを疑つたものもあるぐらい。これは尤もな疑ひだと思ふ。若し人間がこの世ぎりのものであつたら、善惡の賞罰は、どうも、公平ではないやうなところが見えぬでもない。

積善の家には餘慶ありなどいって、いくら理屈をつけて見ても、この世かぎりでは到底、満足に、この道理を説きあかすことは出来ぬ。

ほんとうは、完全なる善悪の賞罰は、この世に於てはない。未來に於てある。人間がこの世を去つて、神の前に出たとき、そこで始めて、善は善、悪は悪の完全なる報いを受けることになる。これを學校に喩へていへば、學校にはいろいろ試験がある。學期試験とか、學年試験とか、また學校に在るあひだに、度々さういふ試験によつて、學力を試めさることがある。しかし、及落いづれかといふ、最後の大試験、すなはち卒業試験は、いよいよ學校の課程をまつた後でなければ受けることはできぬ。また學校の課程がいくらでも残つてをるあひだは、その最後の大試験は受けられぬ。

この世は學校である。人間はこの世で未來ゆきの學問をしてをる。人生五十年は、浮世の學校の五學年である。この學年中にも、折々は試験を受けて、善悪をためさるゝこともあるが、しかし、人生の卒業試験は、この世の學校の課程をまつた終つたのち、すなはち、人間が最後の息をひきとつて、魂が體を離れて、神の前に出たときにある。この時が、天國に昇るか、地獄に落ちるか、いはゆる及落いづれかといふ、人間の命運の定まる所。これが死後に於ける神の審判といふものである。

○死ぬるとはどういふこと

全體、死ぬるといふことは、人間が消えて亡くなることではない。たゞ、その魂と體とが別れるまでのこと。もと人間は、體と魂の二つから成つて居る。その關係をいへば、體は家、魂はその主人。家は舊くなると毀れることがある。しかし、家が毀れたからとて、主人までが一緒に死ぬといふ筈はない。この家が毀れたら、また他の家に移ればよい。人間の體も、年を取ると、方々が毀れ始める。肉は落ちる。骨はもろくなる。凡ての機械は弱つてくる。丁度舊い家の柱が腐れたり、壁が落ちたりするやうなもの。そして體はもと土であるから、死ぬれば又その土に歸へる。魂はもと神から出てをるので、この體を離れると、すぐ又その神の前に出て、嚴かなる審判を受けねばならぬ。そのとき神は、その人が生れてから死ぬるまでになした凡ての業について

試験をなさる。たゞに業だけではない、その行うたこと、言うたこと、思うたことについて試験をなさる。すなはち人生の卒業試験を受けるのである。

○罪の活動寫眞

神には忘れるといふことがない。人間は、久しくなると忘れる。多いと忘れる。小さいと忘れる。神はさうではない。どんな小さなことでも、どんな多い中でも、どんな久しい前のことでも、一度あつたことは、もう決して忘れたまはぬ。だから、人が犯すすべての罪は、神はみな覚えてゐたまふ。たゞ一口の嘘でも、たゞ一遍の汚ない思ひでも、未來に於ては、かならずその審判を受けねばならぬ。凡て人のいふ所の虚言は審判の日に之を訴へざるを得じ(馬太傳一二の三六) 丁度活動寫眞にでも取つたやうに、人間一生涯のことは、大も小も、みな神の前に寫し出されてをる。終りの審判の日には、それがことごとく我々の目の前にあらはるので、もう誰もその場に於ては言ひ逃るゝことはできぬ。この世の裁判では、折々罪人どもが、偽りの申立をなして、それで裁判官をごまかして、その場を逃れるやうなこともあるが、未來の審判の

座では、もうそのごまかしはきかなくなる。自分が生涯に犯した罪を、ことごとく自分の目の前に見て、たゞ恐れ、たゞ悔やみ、たゞ齒がみするのみ。

○死んで行く先

死んだあとで、人間の行くところが二ヶ所ある。天國と地獄。天國は神の在ますところ、地獄は罪人どもが罰を受けて入る未來の監獄である。この世にをる間に、一度も罪を犯さず、清き疵なき全き生涯を送つたものは、天國に入つて、神の子供となつて、限りなき幸福を受けることができる。併しながら、この世にをる間に、神に従はずして、罪を犯した者は、みなこの地獄に落ちて、限りなき刑罰を受けねばならぬ。これが神の御定めである。そしてまた、以上二ヶ所の外に、未來に於て、人間の行くべき所はない。天國に行けないものは、かならず地獄にゆく。地獄に行かないものは、かならず天國にゆく。二つの内、どちらかに行かねばならぬ。その中間といふ所はない。これが人間の運命である。一度死ぬる事と、死にて審判を受くる事とは、人に定まれる事なり。(希伯來書九の二七) 死ぬるといふことが、人に定まつた運命であるや

うに、死んだあとで、神の審判を受ける事も、また人に定まつた運命である。この運命は、誰も逃れることはできぬ。しかるに、死んだ後には、かゝる恐ろしい運命が待つてをることを知らずに、たゞこの世のことにみに氣を取られて、うか／＼と月日を送つてをるのは、丁度、川下には、ナイアガラのやうな恐ろしい瀧のあるのを知らずして、悠々と流に従つて舟をこぐ愚かな人と同じこと。無情の舟は、刻一刻、己れを呑む死の淵に向つて走り込みつゝあるに、舟の中では、なんにも知らずに、飲めよ、食へよ、歌へよ舞へよと、狂ひまはつて騒いでをるのは、實にどういふ危ぶない浅ましい有様だらう。しかし、これがこの世の罪人の眞の有様。氣の毒なことではないか。そして、一旦その淵に落ちこんだら、もう永遠にそこを出ることはできぬ。滅えざる火の中で限りなき苦しみを受けねばならぬ。

○一つの罪で地獄行

さて、地獄の刑罰は、滅えざる火に投げ入れらるゝといふ恐ろしい罰であるから、そこに入つて、その限りなき苦しみを受くるものは、定めしこの世で、人殺かなんか、

よほどの悪事でもしたものだらうと、一寸さう思ふ人があるかも知れぬが、さうではない。神の前では、そんな人の目に立つほどの悪事をしたものばかりが罪人ではない。人間は凡てみな神の律法を犯してをるから、誰も彼もみな罪人である。そして、罪人はみな地獄に行くべきものときまつてをるから、この世界には、この地獄の刑罰を逃るゝものは、たゞの一人もないのである。録して義人なし、一人もあるなしとあるが如し。(羅馬書三の一〇)

一體、罪といふは恐ろしいもの。一つあつても、もう天國には入れない。たつた一つの罪のため、その者は地獄に行かねばならぬ。罪の勘定は、金の勘定とはちがふ。借りが多ければ借方にする。貸しが多ければ貸方にするといふやうに、人の生涯の善事と悪事とを差し引いて、善事が多ければ天國行きにする。悪事が多ければ地獄行きにする。この者には、いくらか罪はあるけれど、どちらかと言へば、まづ善行の方が多いから、マア、天國行きにしてやらうと、そんな譯にはゆかぬ。天國に入る者は、罪の少ないものではない。まづたゞ一點の罪なき者でなければならぬ。たつた一つでも

罪があつたら、もう、その人は、天國の良民たる資格を失うて、その一つの罪のため、その運命は地獄行きとさまる。

○一つの罪で監獄行

一つの罪で地獄にやるとは、神の罰があまり厳しすぎはせぬかといふ人がある。厳しすぎるか、どうか、それは今こゝで、我々が論すべき限りではないが、兎に角、罪といふはそんなもの。たつた一つで、人の運命を定むる力を持つてをる。これまでに、どんな善事をしてゐた人でも、一つの犯罪をやると、その一つで、凡ての善行をみな打消されてしまつて、その人は監獄に行かねばならぬ。あれには、これ／＼の善行があつたから、マア、それぐらいの犯罪はこらへてやれと言ふ譯にはゆかぬ。

僕はまだ一度も、政府の法律を犯したことはない。國家のためには、功勞はあつても、犯罪はない。法律から見れば、無疵の良民である。ところで、今晚にも、一つ誰かの家に入つて、人の物を盗んで見ようか。早速、明日からは、赤い着物を着て、臭い飯を食はねばならぬ。それも、たつた一度でよい。二度は入らぬ。その一度の犯罪で、

僕の全生涯の名譽も功績もみなだいなしにしてしまふ。假令これまでは、國家のために、どれほどの功勞があつたとしても、それはもう、この一つの犯罪のために、みな打消されてしまふ。そしてまた。さうなつたら、もう誰もかはいさうとか、氣の毒とか言つてくれるものもない。却つて、マア、あれが、あんなことをしてと、世間からは爪弾きされるのみ。たつた一つの犯罪で監獄行きとは、政府の法律が、あまり厳しすぎはせぬかなどと言つて、僕に同情してくれる者は、恐らく一人もないだらう。現に目の前に、その例があるではないか。勳何等、功何級、何々何々の肩書を持つた連中が、たつた一度の犯罪で、勳章も位記も、皆取りあげられてしまつて、火付強盗人殺どもと、今は一緒に監獄の中で苦しんで居る。實に罪といふは恐ろしいもの。

○玉の喩

この有様を喩へて見たら、丁度、天井から、十の鎖で吊つてあつた玉が、その鎖の一つが切れたため、下に落ちて微塵にくだけたやうなもの。玉を砕くには、十の鎖を十まで悉く切らぬでもよい。たゞ一つを切れば、それで澤山。他の九つはみな丈夫であ

つても、この一つが切れたなら、玉はすぐ碎けてしまふ。日本帝國の良民といふ名譽の玉を安全に保つには、政府の法律が、幾千條あらうとも、それを悉く守らねばならぬ。よしんば、その千條中の九百九十九までを守つても、第千條目の一つを破つたら、もうそれで、良民の仲間を出て、監獄行きをやらねばならぬ。玉は微塵にくだけてしまつた。いくら厳しすぎるとか、酷すぎるとか言つたところで仕様がなない。これが法律、これが犯罪、これが刑罰といふものである。

以上の話で、罪の恐るべきことは、もうよく分つたであらう。凡ての罪は神に對する謀叛である。謀叛の罪は一つで澤山。二つは入らぬ。一度謀叛すれば、それでも立派な謀叛人である。神の國の良民たる資格はまつたく消えてしまふ。ところで、前にも言つた通り、人間の罪は、一つや二つではない。人間一生涯には、どれほどの罪を作るか分らない。こんな罪人が、どうして、一點の罪も汚れも許さない、天國に入ることができようか。死後に於て人間の行くべき所は、もう地獄より外はないのである。

第五章 來世

○魂は消えるか消えぬか

人間はこの世かぎりだ。死ぬときには、ランプの火の消えるやうに、ポーツと消えてしまふ。地獄も天國もあつたものかと、自分で自分は、死ぬときにはもう消えて亡くなつてしまふ者ときめ込んで居るものがある。併し、その人はどうしてそれを知つてゐたらう。自分が作つた魂ではあるまいし、死んだ後に消えるか消えぬか、そんなことの知れよう筈がない。ランプの火の消えるのは、毎晩の事實であるから、それはさうだと確にいへるが、人間の魂が死ぬときに消えてゆくのを誰が見た。見た事のないものを、どうしてさうはつきりと云ふ事ができるか。いや、自分は見た事はないが、世の學者たちがさう言ふから、多分さうだらうと思ふと言ふのか。なるほど、多くの學者の中には、そんな説を立てる者がないでもない。併し、その學者はまたどうしてそれを知つてゐたらう。彼等も人間の魂が死ぬときに消えてゆくのを見た事はない。物理や化學の試験をするやうに、人間の魂が死ぬときに消えるか消えぬかを試験した學者もあるまい。彼等もたゞ、人間の魂は死ぬときには多分消えるだらうと想像して

言ふにすぎぬ。素より無證據の論である。そんな無證據の想像説を信じて、それで安心して居れるだらうか。學者の想像説にまちがひの多いことは、誰もよく承知してをる筈であるのに、なんで自分の大切な死んで行く先の事を、そんなまちがひだらけの學説なんぞに任せておくだらう。實に劍呑な話ではないか。

僕等は、學者の學説によつて、未來のある事を信ずる者ではない。併し、若しこれについて學説を持ちだす者があるなら、これだけは確に知つてゐて貰ひたい。未來のある事を信じ、靈魂の不滅を説く學者は、その反對を言ふ學者よりも、數に於ても、力に於ても、遙に優つてをるといふ事を。ことに近頃、心理學上の色々な事實が発見されたため、學者間に於ても、靈魂不滅の議論が非常に勢力をましてきたといふ事を。併しながら、繰り返して言つておく。僕等は、未來の在る事と、靈魂の不滅については、學者の説がどうであらうが、そんな事には、聊かも頓着しないつもりでをる。

○學問と提灯

一體、世の中の人は、學者といへば、非常にえらいもので、學者のいふことは、なんでもほんとう。學問さへすれば、世の中のことは、なんでも知れるやうに思つてをるが、それは學問の買ひかぶりといふもの。學問の力には限りがある。その限りある學問の力を以て、人間の知りうるところは、この世の事についても、誠に僅かばかりである。喩へていへば、學問の力は、提灯の光のやうなもの。足下をてらすだけには、それでも足りるが、その提灯をふりまはして、二十間も三十間も、さきの先きまで、見通すといふことはできぬ。マア、石につまづかぬやう、穴にあつちぢないやうにするのが、精々上げた提灯の効能である。學問の力もその通り。人がこの世を渡るに於いて、聊かその足下の暗やみをてらすぐらいの効能はあるが、直ちに、その小さな光を以て、人間の死んで行く先きまでをてらすといふことはできぬ。ましてや、その學問で、靈魂の永遠の運命までを知らうといふは、實に無理な注文である。であるから世の中の學者が、なんと云はうが、我々の未來については、彼等の學説を當てにすべきものではない。この事については、學問には、どうとも、こうとも、斷言する權威はない。それを知らずに、ある一派の學者の想像説を丸呑みにして、靈魂消滅論など

を信じてをる人は、實に氣の毒の至りである。また得意になつて、當りもしないランブの引事などを持つてきて、證據もなにもない自分の想像説をふりまはして、世の人を誤らせる學者の罪もまた重いかなのである。

○死は生の目的

また、未來があらうがあるまいが、魂が消えまいが消えやうが、そんな事はどうでも宜い。まづ生きてをる内はこの世が大事。この世さへ満足に渡ることができれば、それで澤山。死んだら死んだで、その時には、又どうにかなるだらう。分りもしない未來のことまで、今からさう心配しておかぬでもよさうなもの、未來のことを全く無頓着でをる人がある。しかし、こういう人は、目先のことに氣を奪はれて、深く自分の身の上を考へない人だと思ふ。若しはじめになつて考へたら、大事な自分の行く先のことを、さう無頓着でをれる筈がない。そもく人間一生涯のできごとの中で、死ぬるといふことほど重いことはない。死は生よりあもい。葬式は、誕生の祝ひよりも大事である。全體、死は生の目的で、人のこの世に生れてくるのは、死ぬためと言

つても宜い。死ぬために生れてくるなどといへば、なんだか縁起の悪いことでも言ふやうに聞えるだらうが、さう聞えても仕方がない。本當にさうであるから。死は浮世の旅路の最終で、これが人生の到着點である。我々は、この死といふ人生の到着點に向つて、毎日く歩いてをるもので、遅かれ早かれ、一度はそこに達せねばならぬ。誰が旅をするとき、行先などはどうでも構はぬ、道中が一番大事。道中さへ旨くやれば、それで澤山など、そんな無茶をいふものか。

○浮世と航海

浮世は航海のやうなもの。船に乗つて航海するものは、航海そのものを目的とはしてゐない。目的は向ふの港についた後にある。しかし、船にをる間は、船の中の生活もまた大事であるから、それを疎かにする譯にはゆかぬ。船中でも、飲み食ひはせねばならぬ。寝起さもせねばならぬ。客仲間の付き合ひもせねばならぬ。凡てみな船の規則を守つて、客一人前の務めを怠つてはならぬ。また航海中には、楽しいこともあるが、折々は苦しいことも出てくる。和風の時には、海がしづかで、客はみな悦んで、踊つ

たり、跳ねたりして、大騒ぎをやつてをるが、一つ、大暴風にでも逢はうもんなら、みな船室に逃げ込んで、丸で青菜のやうになつてしまふ。天候一つで、たちまち天國たちまち地獄、ほんとうに、船中生活は、浪風あらし浮世の有りさまをよく寫し出してをる。併しながら、面白いのも、辛いのも、楽しいのも、苦しいのも、どちらにしても、十日か二十日、瞬くひまに立つてしまふ。この短い船中生活は、素より船に乗つた目的ではない。目的は上陸の後にある。

ところで、上陸後はどうでも宜いさ。そんな事を今から考へるのは愚の至り。マア、船に居る内は、船中生活が一番大事。これさへ旨くやつてのければ、それで澤山。向ふに著いたら著いたとき、又どうにか成るだらうよと、そんな呑氣を言つてる客があるだらうか。あべこべに、船中ははづかなあひだ。たとひ大暴風で、酔ひどほしに酔つたところが、たかが十日か二十日の辛抱。向ふに着けば、あれがある、これがあると、上陸後のたのしみを夢に見て、船中の憂さ辛さをなぐさむる者はある。併しこれがほんとう。

○一寸先は地獄

また一つ、浮世と航海とによく似たところがある。船の中で、客人たちが、踊つたり跳ねたり、歌うたり。舞うたりしてをる間に、船そのものは、そんなことには、一向に頓着はない、ツウ／＼ツウ／＼、一瞬間も止まらずに、目ざす港に向つて走つて居る。この世が丁度その通り。人間が、食つたり、飲んだり、寝たり、起きたりしてをる間に、人の壽命は、一秒時間も止まらずに、キチ／＼キチ／＼、刻一刻、死の港に向つて走つてをる。こう言つてをる間にも、おたがひの壽命の船は、間斷なく進んでをるが、君等の中には、もう、その道の半分ぐらゐも來てをる者がありはせぬか。中には、既に七八分、いな九分九厘まできて、死の港は、はや目の前に迫つてをるに、なんかの霧におほはれて、それが一寸見えぬのではあるまいか。一寸下は地獄と言ふが、これはまた、一寸先は地獄ではあるまいか。

○未來には誰が待つてゐる

遅かれ早かれ、船はかならず港につく。いよくそこに着いたとき、さて誰がきて待

つてをるだらう。親か夫か。兄か弟か。若しさうでなく、ヒヨット巡査でも来て、監獄行きの馬車でも待つてゐたらどうだらう。さういふ事がないとも限らぬ。若し船中で犯罪でもやらうもんなら、すぐ無線電信で、向ふの警察に知らせてあるから、着くと早々、巡査に捕まつて、そのまゝ監獄に投りこまれてしまふ。

この世に居る間に、神に従はずして、罪を犯してゐたものは、いよく死の港に着いて、いざ未來に上陸となつたとき、皆さういふ目に逢はねばならぬ。この世に於て人の犯した罪は、皆未來には分つてをる。そこに着いたら、地獄の迎ひが来て、チャント待つてをる。さうなつたら何もかももう駄目だ。泣いても喚いても、追つ付くことではない。行くべき所に行つて、受くべき罰を受けねばならぬ。この世では、金があるとか位があるとか言つて、いくら威張つてをつてもそれはダメ。金も位も未來まではついて来ぬ。裸で生れた者は、又裸で行かねばならぬ。さうして、皆一様に神の審判を受けて、地獄の火に投げ入れらるゝより外はない。これが罪人の運命である。

○未來があつたら君はどうする

僕は一度、ある人と、かういふ議論をしたことがある。君は、未來はないといふが、君もまだ未來には行つたことがないから、果して有るやら無いやら、それを知つてをる筈がない。それで、君が未來はないと言ふのは、たゞ君の考へだけだらう。しかし、君の考へには、まちがひがないとは言へまい。これまでも度々あつた。君がないと言つたことで、有ることがあつた。善いと言つたことで、悪いことがあつた。して見ると、君の未來なしといふ考へにも、ヒヨットしたら、又まちがひがあるかも知れぬ。若しそれがまちがひつても居ようもんなら、君は實に大變だろ。無い／＼と思つて居た未來が、君の死んだとき、その目の前に出て來たら、君はその時どうするつもり。ナアニ、出たら出たとき、又どうにかしようとはいかぬよ。未來に行つたら、君はたしかに地獄に落ちる。これだけは請け合つておく。君のやうな罪人が、どうして天國に行けるものか。かならず地獄の滅えざる火の中で、限りなき苦しみを受けねばならぬ。もうさうなつたら、取りかへしはつかなくなるよ。そんな大事な君の身の行く先きを、僅かばかりの君の學問や、まちがひだらけの君の考へにまかせておいて、

それで君は安心してをれるのか。實に危険なはなしではないかと、こういつたら、すぐ、向ふからも、シツペイがへしに、さういへば、君とても同じぢやないか。君は未來があると信じてをるが、若しなかつたら、どうするつもり。有る／＼と思つて居た天國がなかつた時は、君も大變損をする譯さ。だから、若しお互に考へがまらつたといふ日には、君も僕も同じことだよ。なにも、さう僕ばかり責めぬでも宜いだらう。

○未來がなくても損はない

いやちがふ。それにしても、君と僕とは大變なちがひである。僕にすれば、よしその考へがまらつて、望んでゐた未來がないとしても、別に損はない。素より危険はない。未來がなければ無いまでさ。それ以上にはなにもない。若し未來がないとすれば、僕の魂は死ぬときには消えてしまふ。消えてしまつた魂には損も得もあらう筈がない。死んだあとで、その魂が生きてゐて、それで望んだ天國がなかつたとすれば、その時は、その魂が失望するだらう。併しもうそれまでに、既に消えて無くなつてを

る魂には、失望もなにも有りやうがないではないか。失望とか、損失とかいふのは、それは魂があつてのはなし。無い魂になにがある。だから、僕の方では、僕の信仰がまらつてゐて、未來がなくとも、損はない、素より危険はないといふのである。併し君の方はさういかぬ。若しまらがつたら地獄があるから。地獄に落ちて限りなき苦しみを受けねばならぬといふ危険がついてをる。こゝが君と僕のちがひである。

○未來信仰の副産物

そんなら、未來のある事を信じてをれば、この世に於て、なにか損する事でもあるかと言ふに、これがまた損どころではない、却つて大變な得がある。未來を信ずると、大なる望みができる。そしてその望みから、楽しみが出る。悦びが出る。勇氣が出る。忍耐が出る。これらは、未來信仰の副産物とでもいふべきものであるが、我々はこの副産物の御蔭で、浪風あらしき浮世をやす／＼と渡る事ができる。よし未來がなく望んだ天國には入れぬとしても、その信仰が産み出す以上の副産物だけでも、誠に

結構な譯ではないか。この點から見ても、僕の信仰は、遙に君の不信仰に勝つてをる。一體、論の當否はしばらく置いて、君のやうに、人の魂は、死ぬればみな消えてしまふものと信じてをるのは、君がこの世を渡る上に、なにか益するところがあるのか。かういふ信仰、いな不信仰が、どれほど世の中の幸福を増すだらう。又この世のあらし浪風を凌ぐ上に、どれほどの勇氣や忍耐が、この不信仰から副産物として出てくるだらう。いくら勉強して智慧をみがいでも、骨折つて徳を脩めても、それはこの世にをる間のこと。死ぬるときには、その魂と一緒に、なにもかもみな消えてしまふから、もうさうなつては、學者も無學者もない、善人も悪人もない、みな同じやうに墓場の土になつてしまふといふ教が、世の中の善をすゝめ、惡をとどむる上に於て、どれだけ効力があるだらう。又親しい親子も、楽しい夫婦も、死んだらそれが無限のわかれ、又逢ふことも、見ることも、もう永遠にないといふ、なさけない死別の宣告が、親や夫の亡骸に取りついて泣いてをる遺族のために、それが、どれほどの慰めになるだらう。なるほど。人間は死ぬればみな消えてしまふから、マア、生きてる間

に、少しでも多く面白い目を見るが得だと、できるだけ肉の樂しみを貪る上には、あるひは未來なしの説が得かも知れぬが、それはしかし、あまり譽めた話でもないだらうよ。人の前で大きな聲をして言ふべきことでもあるまいと思ふ。世の中には、随分この肉の樂しみが貪りたさに、未來もなにもないなど、世間をごまかしてをるものもある。これらは、己れを欺き、又人を欺いてをる者である。

○未來信仰についての權威

以上は、未來の存否について、君の立場と、僕の立場とを、對等に見てのはなしであるが、實は、この點については、君と僕とは對等でない。君が未來なしの説は、たゞ君の考へだけで、それには、證據も權威もない。僕の未來ありの信仰には、權威がある。これは僕の考へだけではない。天地の主なる眞の神の默示に基いてをるものである。全體、未來の事については、神の外には、あるとも、ないとも、確にこれ言ひ得るものはない。キリスト教は、すなはちその神の教である。聖書は、すなはちその神の默示である。この聖書によれば、未來は確にある。靈魂は確に不滅。人は死ん

だら必ず神の前に出て、その審判を受けねばならぬ。罪人は必ず地獄に落ちて、限りなき刑罰を受けねばならぬ。善悪こんこう皆同じやうに墓場の土に化するものではない。僕はこの聖書によつて、未來のあることを確に信じてをるものである。さうして、この聖書の教にはまぢがひはない。君や僕の考へには、無論まぢがひがある。そのまぢがひだらけの考へを持つてをる互が、今こゝで未來の有無について、議論をしたところで、その議論の勝ち負けによつて、未來の存否を決する譯にはゆかぬ。議論は議論。事實は事實。あすの朝、太陽があがるか、あがらぬかの議論をして、よしんば、あがるといふ議論がまけたとしても、これがため、あがる太陽のあがらぬといふ理屈もあるまい。議論の巧拙は、事實には關係がない。議論で事實を有るやうにすることも、又は無いやうにすることもできぬ。そんな議論をしてをる間に、若し君が今夜にも死んで、無いと思つた未來が、その目の前に出て來たら、君は一體どうするつもり。もうさうなつては、後悔臍をかんでも及ばないから、よいかげんに我を折つて、神の教に従ひたまへ、これで議論は終つたのである。

第六章 基督

○三大聖人

世間には、キリストを、釋迦や孔子とならべて、世界の三大聖人などといふものがある。しかし、キリストは、釋迦や孔子とならぶべき方ではない。彼等は、いくら偉くても、やはり人間である。孔子は大聖といひ、釋迦は大智といふが、大聖でも、大智でも、人間は人間。それ以上ではない。

しかるに、キリストは、人間ではない、神である。その神であるキリストと、人間である釋迦や孔子とを一緒にして論ずるのは、すこし見當ちがひの議論ではあるまいか。長いとか、短いとか、劣るとか、優るとか、彼れと此れとをくらべていふのは、人間同志の間でのこと。まつたく違ふ神と人との間には用ふべき言葉ではない。

キリストが神であるといふ證據はいくらもあるが、この本は證據論ではないから、ここには、その議論をあげないつもり。けれど、たつた一つ、誰にでもよく分る事實を

あげて、キリストは神であるといふ證しをして見よう

○孔子

孔子は聖の聖、大聖といふが、それでも、始めからさうではなかつた。十五の歳から學問に志し、三十、四十、五十、六十と、段々に修業をつんで、漸く七十に成つたころ、自分が思ふまゝにふるまうても、どうやら、人間の道に外づれぬやうに成つたといつてある。して見れば、孔子でも、その前には、思ふがまゝに振るまへば、時には人間の道にはづれることがあつたと見える。孔子のやうな大聖人ですら、なほ且つ五十年の修業をつまねば、さういふ人には成れぬとすれば、人間の道といふものは、中々六かしいものである。又孔子には、澤山の弟子があつた。三千あまりも附いてゐたといふこと。その中には、當時のえらい學者もゐたさうな。孔子は、この澤山の弟子どもと偕に、五十年あまりもかゝつて、その教を傳へられたのであるが、それがすなはち今の儒教で、支那から日本まで傳はつて居る。

○釋迦

釋迦は、二十九才で親の家を飛び出し、これも同じく八十幾つまで、いろ／＼な難業苦業を経て、漸くのこと、後世から大智と仰がるゝまでに至つたのである。こゝらを見ると、世間から、大智や大聖と言はるゝまでになるのは、中々容易なことではないものと見える。彼にも亦澤山の弟子がついてゐた。その中には、師匠を凌ぐほどの豪傑もゐたさうな。釋迦が、この澤山の弟子と偕に、五十年あまりもかゝつて、漸く擴めたのが今の佛教。印度から起つて、支那日本までも擴まつてをる。

○キリスト

しかるに、キリストは前の二人とは全くちがふ。キリストは、釋迦のやうに、王の家で生れなかつた。ナザレといふ片田舎の大工の家に生れた。また孔子のやうに、えらい學問をした事はない。その頃、エルサレムといふユダヤ國の都には、大學もあつた。またその外の所にも、學校は澤山あつたが、キリストは、その中のいづれでも學んだといふ事がない。世間からは、無學の小民といはれ、三十才までは、大工を業と

して親兄弟を養うてゐた。さうして、三十才の時から道を説き始めたのである。そこで、當時の學者どもは、キリストが無學の大工である事をよく承知してゐるから、その下風に立つて、彼の弟子となることを耻とした。ニコデモといふ學者の如きは、キリストの所に晝くることを耻ぢて、密に夜來てその教を受けたといふことがある。當時のいはゆる上流社會の人々は、擧げてみな反對した。それで偶々キリストの弟子となつたものは、同じ無學のガリラヤの湖水に漁をしてゐた漁師どもであつた。それも僅かに十人あまり。キリストはこれらの僅かばかりの弟子どもをつれて、一寸足かけ三年ぐらい、あちこちを經廻つて、道を説いてゐたが、到々おしまひには、敵のために十字架にあげられた。しかるに、その教が、今は世界中に擴まつてゐる。

○四つの相違

そこで、今以上の三人の事を比べて見るに、その間に、四つほど、大變な相違の點のあることを見出すことができる。

(一) 大聖の孔子は、十五から七十まで。大智の釋迦も、二十九から八十餘まで。いづれも五十年餘の長い年月、いろ／＼な修業を積んで、それで漸くあれほどの大人物になつた。しかるに、キリストは、年輩からいつても、釋迦や孔子の半分にも及ばない。その上學問はせぬ。難業苦業もしたことはない。大工部屋から飛び出してきて、それですぐあのやうな方であつた。

(二) 釋迦にも、孔子にも、何千といふ當時の學者が、その弟子となつて従つてゐた。これがまた、布教のためには非常な勢力であつた。しかるに、キリストの弟子には學者はゐない。無學の漁師が十人ばかり、而も、その中から一人の裏切人も出たくらい。

(三) 釋迦も孔子も、五十年あまりもかゝつて、その道を開いてゐるのに、キリストはたった三年でこれを開いた。それも、始めから終りまで、反對と攻撃のみ。そして、最後は例の十字架であつた。

(四) 儒教も佛教も、支那や印度の半開國の宗教で、その勢力範圍は、今なほアジア洲内に限られて、いまだ一步も洲外には踏み出すことすらできないでゐる。しかるに、キ

リスト教は、同じアジアの西部に生れながら、忽ちヨーロッパに擴がり、アメリカに及び、今は世界の文明國も野蠻國も、この教の到らぬところはなきまでに擴がつてきた。儒教や佛教の本家本元である、支那印度日本までも押し寄せて来て、將に全世界を呑まんとする勢ひを示してをる。實に、*鐘エの時心腹、如く大盜賊也*

○富士と天

以上四つの相逢の點で、キリストと他の二人とを比べて見るに、その間には天地のちがひがある。しかるに、孔子は大聖。釋迦は大智。いづれも人間の頂上を占めてをるものとすれば、この二人を、かくも遙かに打ち越してをるキリストを、なんと評して宜いだらう。もう大智ともいへぬ。大聖ともいへぬ。こゝに至ると、神といふより外は、言ひやうがないだらう。實にキリストは神である。大智でも、大聖でもない。富士は高い山だ。下から見ると、その頂上は、もう天にくつゝいてともをるやうに見える。しかし、いざその頂上に登つて見れば、くつゝきどころか、天とその間には、依然として天地の隔りがある。低い山々に比べてこそ、富士山も高いといへるが、その

高さは、天の高さとは比べられぬ。そのやうに 凡人から見れば 釋迦や孔子は、殆どキリストとならんで居るやうに見えるかも知れぬが、さていよく、釋迦となり孔子となつて見れば、彼等とキリストとの間には、なほ神と人とのちがひのあることが分る。釋迦や孔子も、他の人間に比べてこそ、えらいともいへるだらうが、しかし、そのえらさは到底神なるキリストの尊さには比べらるべきものでない。

第七章 贖罪

○ハリツケ問答

ヤン教の中には、僕等にどうしても分らぬことが一つある。それはヤンのハリツケである。それほど偉いヤンならば、なぜハリツケにかゝつただらう。あれを見ると、なんだか、いやな心持がして、ヤン教があやしく見える。世の中には、信すべき教はいくらもあらうに、なにも殊さらに撰んで、ハリツケにかゝつた者の教を信ぜぬでもよさそうなもの。

なるほど。ハリツケは、誰が見ても、心持の宜いものではない。君等がハリツケを見

ていやがるのも無理はない。しかし、ハリツケもまたハリツケによりけりだらう。あの佐倉宗五郎のハリツケはどうだ。あれでも君等は、いやな心持がして、宗五郎があやしく見えるか。

いや、あれは宜い。あのハリツケは上等だ。宗五郎は、佐倉の百姓共の難儀を救ふために、あのハリツケにあがつたのだから、あれだけは別物だ。

さうだらう。して見れば、君等もあながち、ハリツケその物が嫌ひではないやうだ。ハリツケにも上等がある、宗五郎のは別物だといつてをるから。果して然らば、キリストのハリツケは、世界萬民の救ひのためであるから。これは又特別の特別だらう。でも、キリストが若し神であるなら、ハリツケなうにかゝらぬでも宜いではないか。宗五郎は仕方がない。いくらえらくても、たかゞ佐倉の百姓だから。あの殿様の毒手にかゝつては、逃るゝ道もなかつただらう。キリストはさうではあるまい。神ならば、どんな事でもできる筈。なぜその時、その悪人どもを打ち殺して、彼等の毒手を逃れなかつた。神ともあらうものが、どうしてオメ／＼と、人間ごときの手込めになつて、

あの見苦しい最後を遂げた。そのところが、僕等にはどうも分らぬ。なんだか理屈に合はぬやうである。

サア、そこだ。そこが一番大事なところ。キリストは、そのハリツケを逃れることができぬではなかつた。逃れようと思へば、いくらでも逃れることはできた。素より神であるから、人がいくら大勢でかゝつても、キリストにはかなはない。しかし、キリストは、そのハリツケを逃れようとはなさらなかつた。キリストを捕へにきたとき、弟子の一人が剣を抜いて、その敵を防がうとすると、キリストはそれを制して、爾の剣を故處に收めよ、……我今十二軍の天使を我父に請うて受くる事能はずと爾曹思ふや（馬太傳二六の五二、五三）と申された。その意味は、今若し敵と戦ふつもりなら、忽ち天より天使の大軍を呼び下して、この敵を打ち滅ぼすことはなんでもないが、さうしては、大事な萬民の救ひができぬから、今は彼等がなすまゝに任かせておけといふこと。素より、止むを得ずではない。オメ／＼とではない。自ら甘んじて十字架にかゝられたのである。いな、これがキリストのこの世に降られた目的である。キリス

トは、たゞこの十字架によつて、世界萬民の罪を救ひまたふ。この十字架をぬきにしては、キリストの救ひは成就しないのである。

○殉難の死と贖罪の死

宗五郎は、ハリツケにあがつて、佐倉百三十六ヶ村の百姓を救うたといふが、あれは併し、ハリツケそのもので救うた譯ではない。宗五郎のハリツケには、人を救ふ力はなかつた。佐倉の百姓を救ふ手段は、時の將軍家に直訴すること。この直訴が、時に取つての唯一の救ひの手段であつた。宗五郎のハリツケは、彼がこの非常手段をとつたため、その身に祟つた災難である。こういふのを殉難の死といふ。

ところで、キリストの死はさうではない。あれは、殉難の死ではなく、贖罪の死である。キリストは、あの十字架の死で、我々の罪を贖うて下さつた。キリストのハリツケは、救ひの道を立てるに於いて、餘儀なく受けた災難ではなく、世の始めより既にきまつてゐた、唯一の救ひの手段で、世界萬民をすくふ道は、もうこの十字架の外にはないのである。であるから、キリストのハリツケは、ハリツケそのものが救ひである。

○教訓では救はれぬ

キリスト教は、たゞの教訓ではない。無論教訓もその中にある。しかし教訓よりも何よりも、キリスト教で一番大事なものは、キリストが最後に十字架の上で流された血である。あの血が救ひ。あの血の外に救ひはない。

人は教訓で救はれるものではない。教訓は、これから後に罪を犯さぬために守るもので、それを以て、これまでに既に犯してをる罪を償ふといふ事はできぬ。例へば、己の如く爾の隣を愛せよといふ教訓を、今日から守つて、凡ての人を愛するやうになつたなら、これから後はそれでよからう。だが併し、既にこれまで、愛すべき隣を愛せず、却つてこれを憎んだ罪はどうなるだらう。今から後の善行で、今までの罪惡を皆打ち消すといふ譯には行かない。散々人に金を借りちらした揚句、漸く借金金の悪い事に氣がついて、もう借りぬ、これから後は一切借りぬと、斷然借金癖をあらためたからと言つて、それで、これまで借りた金の勘定がつくといふものではあるまい。改心は改心、勘定は勘定、彼と此とは別物である。借りた金は、耳を揃へて返さなければ義務

はすまない。罪も亦さうである。散々これまで犯した揚句、漸く改心して、今後はもう犯さぬと言つたところが、それでこれまでの罪が償へるといふ者ではない。

○人殺と身代り

例へば、僕がいま人を殺すと、すぐ巡査に捕まる、警察に引かれる、裁判所に送られる、そして死刑の宣告を受ける。そこで、大に後悔して、ア、過つた、悪いことをした、もう／＼決して人殺などはせぬ。裁判官閣下。今後はキツト改めます。いよく善心に立ち返りますから、どうぞこの度は御勘辨をねがひますと、眞心から罪をわびたら、今後の改心の保証によつて、それで放免になるだらうか。どうして。こうなつては、いくら改心しても、眞心に立ちかへつても、もうダメだ。既に犯した人殺の罪はそんなことで消えるものではない。鏡のくもりとは違ふ。拭うても取れはせぬ。たゞこの上は、死刑の執行を待つのみである。

しかし、この場合、若し助かる道があるとすれば、一つある。それは身代り。僕の友人が、そこへ飛び込んで来て、人を殺したものは、彼ではござらぬ。拙者でござる。拙者が人殺の犯人であるから、どうぞ拙者を死刑に處して下さいと、僕の罪をみな自分に引つかぶつて、僕の代りに死んでくれる。御蔭で僕は死刑を逃れる。この身代りは、今はできぬが、昔は随分あつたもの。子が親の身代りに立つ。家來が主人の身代りに死ぬる。いづれも美談として傳はつてをる。

さて、僕は死刑を逃れると言つたが、それでも、たゞ逃れるといふ譯ではない。人を殺した僕の罪は、友人の身に於て、既に罰せられてをる。罰はもうすんだ。法律は執行された。僕の放免は、殺さるべき罪人が、裁判官のなさけによつて、たゞ許して貰うたといふ譯ではない。一旦、僕の上にかゝつた人殺の罪が、今は僕を離れて友人の上にかゝつた以上は、僕にはもう罪はない。罪がなければ、死ぬべき筈もないから、僕は大手を振つて法廷を出ることが出来る。いはゞ、罪ある僕と、罪なき友人とが、互に入れ代つたやうなもの。友人は僕の代りに死に、僕は友人の代りに生きてをる。今こゝに生きてをるのは、その實、僕ではない。僕の友人。友人が僕の中にあつて生きてをる。これから後の僕の生涯は、全く友人の賜物である。

○十字架の救ひ

さて、キリストの十字架の死が、丁度、この友人の身代りのやうなもの。人はみな神に對して謀叛の罪を犯してをるから、地獄の刑罰を逃るゝことはできぬ。人間は既に死刑の宣告を受けてをる。今となつては、後悔しても、改心しても及ばない。受くべき罰を受けて、行くべき地獄に行かねばならぬ。そこで、キリストがそれを憐み、天より降り、人となり、尊き御身に、我々の罪をみな引き受けて、我々に代つてその罰を受けて下さつたのである。神は己の子(キリスト)を、罪の肉の状となして、罪のためには遣はし、肉に於て罪を罰しぬ(羅馬書八の三)。すなはち神は、我々が犯した凡ての罪をキリストに負はせて、それを十字架につけて罰し給ふた。キリストは、我々が受くべき地獄の刑罰の代りに、あの十字架の上で、無限の苦しみをなして死んで下さつた。これがキリストの身代り。この身代りによつて、我々の罪はみな消える。無論、これもたゞ消えるのではない、キリストが代つて贖うて下さつたから消える。借金でいへば、金主のなさけで、たゞ棒引にして貰うた譯ではない。借りた金は、みな返し

て貰うてをる。我々が受くべき地獄の刑罰は、あの十字架の上で、もう既にすんでしまつた。我々は、あの時キリストと偕に十字架について、受くべき罰を受けたのである。罪人である我々は、キリストと偕にもう死んで生きては居ない。いま生きて居るのは我々ではなく、我々に代つて死んで下さつたキリストである。我れキリストと偕に十字架に釘けられたり、もはや我れ生るにあらず、キリスト我れに在つて生るなり(加拉太書二の二〇)。さきに、僕と友人とが、互に入れ代つたといふ喩のやうに、今は、我々とキリストとが、互に入れ代つてをる。これは喩ではない、本當である。ほんとうに、キリストは我々に代つて死に、我々は今キリストに代つて生きてをる。今より後の我々の生涯は、舊き罪の生涯の續きではなく、キリストの十字架によつて始まつた、罪なき疵なき神の子の新生涯である。此の故に、人キリストに在るときは新に作られたる者なり、舊きは去つて皆新しくなるなり(哥林多後書五の一七)。

されば、この十字架の身代りで、罪人なる我々は、始めて無罪放免となつて、天國の

良民たる資格ができた。神は今我々を、一點の罪なき疵なき神の子供として、天國の限りなき幸福に受け入れたまふことができる。これが救ひ。救ひとは、地獄に行くべく定まつてゐた罪人が、キリストの十字架の身代りによつて、その罪を贖はれて、天國に入る権利を得たことである。夫れ十字架の教は、沈淪者には愚なるもの、我等救はるゝ者には、神の能たるなり（哥林多前書一の一八）。

○救ひの信仰

キリストは、以上の如く、十字架の身代りによつて、我々の罪を贖うて下さつた。この贖ひで、罪はみな消える。天國に入る道は開けた。これで、キリストの救ひは全く成就したのである。さて、これからが、その救ひにあづかる我々のなすべき分であるが、それはもう、ただ信じて受くるだけのこと。その救ひを受けさへすればよい。御馳走でいへば、膳立はできてゐる。箸をつけて食ふばかり。食へばよい。今から自分で、その御馳走を拵らへて食ふ譯ではない。これから自分で、教訓を守つて、罪を潔めて、義人になつて、そして救はるゝといふものではない。罪はもうキリストの十字

架で取つてある。義はもうキリストの身にできてゐる。我はもう神の前には、一點の罪なきものにせられてゐる。それを只信すればよい。ア、さうであつたか。キリストは我を愛して、我が罪を引きとつて、我に代つてその罰を受けて下さつたか。ありがたい、辱けないと、真心からキリストの御身代りを感謝して受くるだけのこと。これが信仰。信ずるとは、まこととすること。疑はぬこと。キリストの十字架の身代りを、まこととして疑はぬのが、すなはち救ひの信仰である。併しまた、この信仰がなければ、人は救はれぬ。假令キリストの救ひは、十字架の上で完全にできあがつてゐても、それを信じて受くることをしなければ、その救ひは我がものにはならぬ。假令山海の珍珠がならべてあつても、箸をつけねば、その御馳走は、我が身につかぬ。目の前に据ゑてある結構な料理を見ながら、我は餓えて死なねばならぬ。有りがたいキリストの救ひを、十字架の上に眺めながら、我は地獄に落ちて滅びねばならぬ。

○千年も一日の如し

しかし、キリストの十字架の死は、今より千九百年も昔のできごとではないか、さう

いふ昔のできごとが、どうして、今の我々と、そんな直接の關係があり得るだらうか。どうしてキリストは、まだ生れてもゐない我々を愛して、我々の罪を引き取つて、我々のために死んで下さることができたのだらう。そこがまだどうも分らぬといふ人がある。なるほど。尤もな疑ひだと思ふ。若しキリストが只の人間であつたら、この身代りはできぬ。聖人でも、大聖人でも、そんな事のできやう筈がない。併し、そこが即ちキリストは神であるからできたのである。神には、過去、現在、未來などいふ時間の關係はない。神は、永遠から永遠まで、いつも今、いつも現在。神に於ては、一日は千年の如く、千年は一日の如し（彼得後書三の八）であるから、神なるキリストの前には、我々は千九百年前どころではない、もう限りなき昔からチャンと存在してゐた。それでキリストは、その限りなき昔から、我々を愛して、我々の罪の身代りをなさつて下さることができた。いや、我々が信仰の目で見れば、キリストの十字架は、千九百年前のできごとではない、現在のできごとである。キリストは、今我々の目の前で十字架につけられて居たまふのである。イエス、キリストは、昨日も

今日も永遠も變らざるなり（希伯來書一三の八）。

○十字架の死

キリストが、十字架の上で、我々が受くべき地獄の刑罰の代りに受けて下さつた靈の苦しみは、どういふものであつたか、又どれほどのものであつたか、素より、人間の智慧で窺ひ知ることはできぬ。しかし、こゝに一つ、我々にもいくらか察することのできるものは、キリストが十字架の上で受けさせたまうた肉の苦しみである。

そも／＼ハリツケの刑といふのは、日本では、あの佐倉宗五郎のハリツケの外は、あまり知らない。あの時は、宗五郎等を十文字の木に縛りつけ、目を隠して、左右から槍でその脇腹を突き通したと言つてある。槍で脇腹を突き通さるゝ刑は、随分恐ろしい刑ではあるが、それでも併し、たゞ殺すだけなら、一突きで死んでしまふから、怖いも、痛いも、ほんの時の間である。

ところで、キリストの時のハリツケは、さうではなかつた。その時は、體を十字架に縛りつける代りに、その手を兩方に引き延ばして、各々の手の平から、大きな鐵の

釘を打ち込んで、それを十字架の横木に張りつける。足は又、両方をならべたまゝ、同じ鐵釘を一本づゝ打ち込んで、これは十字架の堅木に張りつけて置く。丁度、張りものでもしたやうに、人間の體を、四本の釘で、十字架に張りつけてしまふのである。そして、そのまゝ突き立て、置く。張りつけられた者は、両手兩足に打ち込まれた四本の釘で、その柱にぶらさがつてをる事になる。それから、こゝが日本のハリツケとはちがふところ。その人を張りつけたまゝ、槍で突くでも、刀で切るでもなく、たゞ突きたてたまゝ、生きながら晒らしものにして置く。さうすると、その両手兩足に打ち込まれた四本の釘疵から痛みを起して、終には大熱を發し、非常なる苦しみに陥るのである。さうだらう。小さな針が一寸體のどこかにさゝつて、その先が折れ込んでも、中々痛いもので、終にはそれがため寝られぬやうにうづくこともある。ましてや、槍の穂先のやうな大きな釘で、両手兩足を突きぬかれて、十字架にぶらさがつてをるのだから、それより起る痛みといふは、實に非常なものであるさうな。それでも、切るか突くかして、早く殺して呉ればまだ助かるのに、これは又中々殺さぬ。

只いつまでもそのまゝで苦しめて置く。時によると、一日も二日も、十字架に張りつけられたまゝ、釘にぶらさがつてをることもある。後には、もう堪らなくなつて、殺してくれ、殺してくれと、頻りに叫んでをるが、素より、誰も殺してやるものはない。到々そのまゝ、獨りで狂ひ死にするといふ。凡そ死刑の目的は、その命を取るにある。刀で切るも、槍で突くも、その間に多少の苦しみはあるが、つまるところは殺すだけのこと。十字架の刑はさうではない。命を取るの目的ではない。目的は苦しむにある。それだから、切つたり、突いたりして、はやく殺しては、刑の目的にかなはないから、活かせるだけは活かしておいて、成るべく長く苦しめて、終に狂ひ死にさせるやうにする。これがいはゆる十字架の刑。キリストが我々に代つて受けさせたまうた罪の罰は、即ちこの極刑であつた。彼は、われらの愆のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みづから懲罰をうけて、われらに平安をあたふ。そのうたれし痕によりて、われらは癒されたり（以賽亞五三の五）。

○罪は犯せぬ

キリストの十字架は、我々を罪の結果すなはち地獄の刑罰より救ふと同時に、また現在の罪よりすくふ神の能である。一たび、キリストが、我々の罪を引き受けて、その身代りになつて死んで下さつたことを、真心から信ずる時は、かくまでして贖うて下さつた罪を、又々犯すといふことは、もうどうしてもできぬ事になる。一旦救はれたものが、再び罪を犯すのは、取りも直さず、キリストを再び十字架に釘けるのである。さういふ事は、キリスト信者としては、勿體なくて、できるものではない。だから、ほんとうにキリストの十字架の救ひを受けて、新に生れかへつたものは、もう再び罪を犯す事はできなくなる。凡そ神に由て生るゝ者は罪を犯さず、そは神の種の中にあるに因る。かれ亦罪を犯すこと能はず、そは神に由て生るればなり。(約翰第一書三の九)

○殉教者

キリストの十字架は、これを信ずる者に、たと罪を犯させぬといふ、消極的の働きだけでなく、積極的に、キリストのためならば、どんな事でもする、火の中でも、水の中でも構はぬといふ、大なる勇氣を起させるものである。弱いものも、この十字架を

見れば強くなる。卑怯なものも、これに由て大膽になる。

昔から、キリストを信ずるために、命を捨てたものは、幾千萬あるか分らぬ。その中には、女もあれば、子供もある。それがみな従容として死んでをる。キリスト教ぐらゝ多くの殉教者を出した宗教は、世界には他にない。これがみな十字架の御恩に感じている。今でも、いざと言つたら、キリストのために、命を捨てることを辭せぬ者が、どれくらいをるか分るまい。

○眞の愛

キリスト信者は、キリストの弟子である。弟子はその師に習ふべきもの。その師が世のために、十字架にかゝつて命を捨てたまうた上は、弟子も亦それに習うて、世のため、人のためには、身を捨て、盡す覺悟がなければならぬ、またその覺悟のできない人は、本當のキリストの弟子といはれまい。

キリスト教は愛の教といふ。さて愛といふのは、只かはいゝといふ感情だけではない。無論、その感情もある。併しそれは愛の本體ではない。愛の本體は、我が愛する

人の、ためをおもひ、ためをはかり、ためをすることである。そして、その人のために生き、その人のために盡し、又その人のために死ぬるのが愛の極である。人その友のために己の命を捐るは、此より大なる愛はなし(約翰傳一五の一三)。キリストは愛の人。さうして、その愛の手本を十字架によつてあらはしたまうた。凡てキリストを信する者も、またその手本に習うて、愛の人となり、その愛の働きのためには、キリストの跡を追ふて、自らも十字架にかゝる覺悟がなくてはならぬ。若しわれに従はんと欲ふ者は、己を棄て十字架を負ひて我に従へ(馬太傳一六の二四)。

○先生は愛の人

京都の同志社の第一の校長は、新島襄先生であつた。明治の教育家中で、先生ほど偉い教育家はなかつた。とらうと、先生を知つてをる人は皆いつてをる。しかし、その先生の偉いところは、必ずしも、學問でない。智慧でない。力量でない。先生を、英雄か豪傑のやうに言ひ囃やすのはまちがつてをる。先生はまた、大した雄辯家でも、文章家でもなかつた。然らば、先生の偉いところは、どこにあつたかと言ふに、それは、

藝能でなく、その人物にあつた。先生は愛の人。同志社を愛し、生徒を愛すること、子の如しぐらいでは言葉が足りぬ。それこそ眞に命がけて愛してゐた。誰でも、一度先生の前に出ると、丁度氷が太陽の熱に逢うて溶けるやうに、いつの間にか、その固い冷たい心が溶かされてをる。僕はその後、大分多くの教育家に出會つて見たが、なるほど。えらい學者も、えらい智者も、えらい力量家も澤山にをる。併しながら、いまだ會つて、新島先生のやうな愛の教育家には出會つたことがない。先生は實に命がけの愛の教育家であつた。實際に、その愛する同志社のために命を捨てた人である。先生の死は同志社のための殉教の死であつた。

○愛の反響

愛は御互。彼れ愛すれば、我れもまた愛す。眞の愛には反響がある。僕はこの反響を新島先生の葬式で見た。明治二十三年一月二十七日、京都の町は車軸を流す、大雨降り。泥濘脛を没すといふ大悪路であつた。その中を、つぶ濡れになつて、同志社から東山まで、先生の柩をかついで、泣き／＼行つた一隊は、當時の同志社生徒千有余名

の青年であつた。彼等は始めから、先生の柩には、他人には指一本もさしせぬといふことを誓つてゐた。實に盛んな葬式で、僕はその前その後、あんな盛んな葬式を見たことがない。葬式にもいろ／＼ある。花の多い葬式。御供の多い葬式。馬車自動車の多い葬式。しかし、新島先生の葬式には、さういふものはあまり見なかつた。けれども、そんなものは金でも買へるが、あの青年の涙ばかりは、金でもなんでも、買へるものではない。あれが反響。愛の反響である。

○先生手を打つて己れを罰す

さて、新島先生の校長時代に、ある組の生徒が、全級擧つて學校に反抗したことがある。今のいはゆるストライキをやつた。しかるに、當時の同志社は、微々たる一私立學校ではあつたが、今のある學校のやうに、意氣地なく、反抗生徒と妥協するやうなことはしなかつた。學校は斷然たる處置に出た。先生は、生徒と教員との間に挟まつて、非常に苦心されたが、今となつては、その成行きにまかせるより外は、もう致し方はないことになつた。

ある朝のこと、教員生徒一同が講堂に集つてをるところへ、新島先生が入つて來られたが、先生の手にはステッキがあつた。講堂にステッキは、チト變だと思つて居ると先生は一同の前に立つて、そも／＼今度の不始末について、その責めの歸するところは、教員諸氏でも、生徒諸氏でもない。この學校を預つてをる同志社の校長新島襄である。襄は、その身校長でありながら、生徒を指導する道を誤り、かゝる不始末を引き起して、同志社にも、生徒にも、少なからぬ迷惑をかけた。誠に不都合千萬なものである。依つて、今日はまづこの者から罰しますと、言ふやいなや、右に提げたるステッキを振りあげて、左の手に向つて打つてかゝつた。打つた打たんの、非常なる勢ひで打つたから、到々ステッキは三つに折れた。ステッキが三つに折れるほどに打たれた手は堪らない。終に破れて血が流れ出た。

○全校泣く

この時までには、教員も生徒も、皆アツケに取られて、たゞ茫然として見てゐたが、ステッキが三つに折れて、血が先生の手から流れ出して來ては、もう誰もジツとして見

てをすることはできなくなつた。一人の生徒が飛び出して来て、先生の手にすがりついて泣いた。これが導火線となつて、教員も生徒もみな泣いた。殊に泣いたのは、反抗組の生徒等であつた。

学校のために、寢食を忘れて、日夜その身を削りつゝ、生徒を教育してをる愛の先生に、素より、なんの罪かある。全校の生徒からは、たゞ尊敬と愛慕とを受けて、未だ曾て一人の先生を批難する者はない。しかるに、今己等を子の如くに愛して教育してくれた、この大恩ある先生に反抗するなど言ふは、言語道斷、如何なる嚴罰に處しても、尙あきたらぬ程であるのに、先生はそれをも憎まず、却つてその罪を自分に引き受けて、彼等のために鞭たれ、彼等のために傷つけられ、終に彼等のために血を流すまでに至つたのである。嗚呼、これより正しく先生が身を以て生徒を救ふ愛の身代り。生徒もまたこれを覺つた。今先生が鞭たれつゝあるのは、すなはち我が爲めであること。またその先生の手を打ち破つたものは、あの無心のステッキではない。すなはち我が犯した謀叛の罪であることを。彼等が先生のまへに泣き倒れたのもことはりである。

ある。

○五つの結果

ところで、この先生の身代りによつて收め得た結果が五つほどあつた。

- (一) 反抗組の生徒の改心。學校に對しては、昨日までの謀叛生徒が、今日からは、無二の忠良生徒となつた。先生に對しては、その命をも捧げんとするほどに愛慕の念を増して來た。自分に對しては、この一事で、一身上に大革命を來たし、全く生れかほつた人間となつた。その後彼等はこの事件を記憶するため、クラス一同で、記念寫眞を取つたが、その時は、三寶の上に、例のステッキの三つの折れを乗せて、それを正面に飾つて取つた。その寫眞も、そのステッキの折れも、今なほ残つてをる。
- (二) この身代りによつて、生徒處分の聲は消えてしまつた。これも只消えたのではない、先生が鞭たれたことによつて消えたのである。
- (三) 學校の規律は、これによつて一層引き締つて來た。學校に對する不平不満の聲は、この悲劇で、全くその跡を收めた。

(四) 只に反抗組の生徒のみでなく、學校そのものが全く生れかはずた。

(五) 校長が講堂の真中で鞭たれてゐるのは、如何にも、生徒の前に耻ぢを晒らしてゐるやうで、それがため、校長の威嚴が落ちはしなかつたかと云ふに、これがまた反對で、校長の威嚴は、これがため更に一層あがつたのである。

以上五つは、先生の身代りによつて收め得た効果であるが、僕等はこれによつて、身を捨て、人を救ふ愛の力の如何に大なるかを見た。僕等は、しばしば先生の涙の説教を聞いて感奮した事がある。しかし、先生の血の説教を聞いたのは、これが始めてであつた。又その後も聞いたことはない。

して、先生は、この愛をどこから得た。我が身を破つて人を救ふ、その身代りの手本を、どこで學んだ。言ふまでもない、キリストの十字架である。先生は、キリストの十字架を信じ、十字架を學び、そして、その十字架を身に行うた人である。

○十字架のおもかげ

素よりこれは、一學校内の小さなでき事で、これを取つて直ちにキリストの十字架に

擬らへるのは、甚だ憚り多いことだと思ふ。そして又、若しあの謙遜なる先生が、今生きてをられたら、僕等に、この事をいふことを許されなかつたかも知れぬ。けれど、この事實によつて、或はいくらか、キリストの十字架の御身代りを説きあかすことができはしまいかと思ひ、敢て憚らず、こゝにこの事を擧げたのである。ことに、そのこれによつて收め得た五つの結果の如きは、キリストの十字架によつて、神の國に收め得られた、大なる効果に、聊か似たるところもあるやうである。キリストの十字架の結果は、(一) 罪人の悔い改めとその生れ代り、(二) 人間の罪が十字架によつて罰せられ、神の律法が嚴重に執行されたこと、(三) 神の律法が更に一層その嚴かさを増したること、(四) この世界の罪人がこれによつて生れがはつたばかりではなく、十字架の悲劇によつて、神の國全體が又改まつたこと、(五) 神の威嚴とキリストの榮光とが、一層これによつて表はれたる事。

○泣きかたがまだ足らぬ

さて、僕はこれまで、度々公衆に向つて、新島先生のこの逸事を話したことがある。

その度ごとに、先生の愛に感じて、同情の涙を流がしてくれた人を多く見受けた。いつも我が敬愛する先生のために感謝してをる。君等もまたこれを聞いては、一掬の涙を惜しまれぬであらう。併し、先生はその生徒を救はんがため、僅かにその左の手を打ち破つたにすぎぬ。然るに、それに向つてすら、なほ且つ同情の涙を惜しまぬといへば、我々を地獄の刑罰より救はんがため、あの十字架の上で、両手兩足に釘を打たれて、無限の苦しみをして死んで下さつたイエス、キリストに向つては、我等はなにをしたら宜いだらう。たゞ主のために同情の涙を流すぐらいですむか。只その前に泣くだけでよいか。素より泣かねばならぬ。キリストの十字架を見て泣かないものは、本當のキリスト信者ではない。若しわが親が敵のために、なぶり殺しにでも遭つて無残の最後を遂げたとき、その當時の有様を、あとで書に書いて見せられたなら、それを見て泣かぬ子があるだらうか。若し泣かなかつたら、それだけでも不孝の罪は免されぬ。我々は、主の十字架の前に泣きかたがなほ足らぬ。併し泣くだけでもまだ足らぬ。我々は、まづ第一に、主の十字架の前に伏して、己の罪を悔い改めねばならぬ。

そして、我が身を主に捧げ、これより後は、主のために生き、主のために死ぬるものとならねばならぬ。また、主が十字架にかゝつて救うて下さつた世界の罪人のため、我れもまた捨身になつて盡す覺悟をきめねばならぬ。いはゆるその友のため命を捨つる眞の愛の人とならねばならぬ。これが眞のキリスト信者と言ふものである。

第八章 献身

○決心

以上の話で、キリスト教の根本眞理である、天地の間にたゞ獨りの神の在ます事、人はみな神に對して罪を犯してをる事、罪人は死んだのち必ず神の審判を受くべき事、そして、地獄に落ちて限りなき刑罰を受くべき事、キリストはそれを救はんがため天より降り、十字架にかゝつて、我等の罪の贖ひをなし給ひし事、これを信ずる者は救はれて天國に入る權利を得る事などは、もうよく分つたであらうと思ふ。既にこれが分つた上は、こゝに一大決心が入る。こゝで決心といふは、斷然意を決して、キリスト教に入り、キリスト信者になることである。また我れは既にキリスト信者になつた

といふ事を公然と人の前に言ひあらはす事である。たと心の中でのみ信じて、人の前に言ひあらはすことをしない間は、まだほんとうの信仰に入つたものではない。ナアニ、信仰は神を信ずることであるから、自分ひとり心の中で信じてをれば別にそれを人の前に言ひあらはさぬでも宜いなどいふのは、要するに、卑怯から出た口實である。自分の信仰を公然と言ひあらはしたら、元の友達に笑はれはすまいか。交際なさしつかへが起りはすまいか。商賣の妨げになりはすまいか。不信者から迫害に遭ひはすまいかなど、世間の人のおもはくや、信仰から起る面白からぬ結果などを考へて、それを恐るゝところから、右のやうな引込みを出すものである。

キリストは、かういふ人を指して、されば、凡そ人の前に我を識ると言はん者を、我も亦天に在す我父の前に之を識ると言はん、人の前に我を識らずと言はん者を、我も亦天に在す我父の前に之を識らずと言はん(馬太傳十の三二、三三)と申されたのである。人の前にキリストを識ると言ふは、すなはち人の前に我が信仰を言ひあらはすこと。この言ひあらはしのできない人は、まだほんとうに、キリストに屬してをるも

のではない。天國行きの資格はまだないものである。それ人は心に信じて義とせられ、口に認はして救はるゝなり(羅馬書十の十)。

○凡ての妨げに勝たねばならぬ

中にはまた、自分が入りたいけれど、親が許さぬとか、兄弟が喧ましくいふとか、親類がさらふとか、いろ／＼な事情に捕へられて、それで入れぬといふ人がある。これも亦まちがつてをる。信仰は、神と我との間のこと。その中には、誰も立ち入つて故障などをいふべきものではない。假令親でも兄弟でも、又誰であらうが、我々を造つて下さつた神に従ふことを、妨ぐるといふことはできぬ筈である。若しこれを妨げたなら、その人は神に對して、大變な罪を犯すことになる。然ど、我を信ずるこの小子の一人を躓かす者は、磨石をその頸に懸られて海の深みに沈められん方なほ益なるべし(馬太傳十八の六)。それで、かういふ場合、親兄弟の故障のために、我が信仰をまげて、彼等の心に従ふのは、みす／＼彼等を、この大なる罪に陥るゝ不孝の所爲に當るから、たとひどういふ苦しい場合であらうとも、ほんとうに親兄弟を思ふ人なら、

この事ばかりは、決して彼等に從うてはならぬ。折々親孝行の意味を取りちがへて、親がいふ事ならば、なんでもかでも從はねばならぬやうに言ふ人もあるが、眞の親孝行は、決してそんなものではない。親が悪いことを言ひつけたとき、悪いと知りつゝそれに從ふのは、孝行ではない、不孝である。若し我々が君命により、國家の爲に戦死せねばならぬといふ場合、分らぬ親がやつてきてお前が死んで己れが困るから、今度の戦死はよしてくれと、こういつて止めたら、畏まりました、では、このたびの戦死はよしにしませうと、國家の大事をよそにして、親の愚痴に從ふのが、本當の孝行だらうか。若しさういふことでもやつたなら、それこそみすゝ、親に不忠の大罪を犯させる、大の不孝者ではあるまいか。

ところが、天地の主なる眞の神に從ふことは、君命に從つて國家の大事に赴くよりも、まだ大事な務である。實は、人間の務の中で、これほど重い務はない。その重い大事な務を、親がとめるからと言つて、ハイ／＼と言つてそれをよすのは、國家の大事を捨て置いて、親の愚痴に從ふよりも、なほ大なる不孝の罪を犯すものである。である

から、こればかりは、誰がなんと言つて止めようが、それがためには勘當に逢はうが、義絶に逢はうが、たとひ命がなくならうが、そんなことには頓着せず、たと自分の信仰を立てぬいて、斷々乎としてその道を行ふべきものである。

○道は只一筋である

キリスト教を信ずる者は、同時に他の宗教を信ずる事を止めねばならぬ。かの神佛こころのやうに、神も拜めば、佛も念ずるといふやうな譯にはゆかぬ。キリストも信ずるがよい、併し、これまで拜んでゐた神佛を捨てぬでもよからうなど、兩道かけて歩むべきものではない。人は二人の主に事ふること能はずで、只獨りの眞の神に事

ふる者は、神でもない偶像を拜む事は、もう斷然止さねばならぬ。佛敎でも、耶蘇敎でも、なんでも構まはぬ。登れば同じ峯の月を見るかななど、宗教を詩的に説き去らうとするものがある。これも亦まちがつてをる。宗教は詩ではない。その道は、山登りの道みたやうに、東西南北いづれからでも登りさへすれば、行きつくところは同じ山の峯といふやうなものではない。なるほど。道は道だが、眞の宗

教は、人間の行くべき道で、この世の中には、たゞ一筋の外あるものではない。あれからでも、これからでもといふ譯にはゆかぬ。あれか、これか、どちらか、その中の一筋が本道である。たとへて言へば、四ツ辻の道みたやうなもの。四筋の内、どれでもよい、どれを行つても、行きつくところは同じといふことはない。その四筋の中で、我が道は必ず一筋である。あとの三筋は迷ひの道。我が目的とは方角ちがひに行く道である。我々を天國につれ行く道は佛教でもない、儒教でもない、神道でもない、たゞ一筋のキリストの道あるのみ。我は途なり、眞なり、命なり、人若し我に由らざれば、父の所に往くこと能はず。(約翰傳一四の六)

○宗教は道具でない

また、宗教は、精神修養の道具であるから、それで修養ができさへすれば、どれを信じても構はぬといふ人がある。如何にも、度量のひろい、公平な議論のやうに聞えるが、實はこれまた大なる誤りである。宗教は道具ではない、精神修養の手段ではない。目的である。人生の最大目的である。人生の最大目的は、未來行きの用意をする

こと。精神修養は、その用意の一つの手段にすぎぬ。しかるに、その肝心な目的である。未來行きの道筋にまちがひがあつたときは、たとひ手段は、如何によくできても、これこそ、ほんの骨折ぐんのくたびれ儲けといふことになる。

○眞理はたゞ一つ

宗教は眞理である。眞理は二つない。たゞ一つ。これも眞理、あれも眞理といふことはない。これが眞理なら、あれは眞理ではない筈である。二と二を合はすれば四になる。五にはならぬ。三にもならぬ。必ず四になる。五でも、四でも、三でも構はぬとはいへぬ。必ず四でなくてはならぬ。若しキリスト教が眞理なら、他の宗教は誤りである。キリスト教も眞理、佛教も眞理、キリストも救主、釋迦も救主といふことはない。必ずその一方がほんとうで、他は誤りである。だから、キリスト教を信ずる者は、誤りである他の宗教は、すべてみな捨てねばならぬ。キリストと佛像とを、一緒に拜む譯にはゆかぬ。全體、妥協といふことは、どこに用ひても、あまり面白くはないが、宗教の妥協の如きは、全然有害である。近ごろは、大分この宗教の妥協説が流

行して来たやうであるが、真正なる宗教のためには、甚だ惜しむべきことである。どうか注意してもらひたい。

○凡ての罪と縁を切る

キリスト教に入るものは、凡ての罪とは縁を切らねばならぬ。情實とか、行掛りとか言つて、舊き罪をそのまゝにして入る譯にはゆかぬ。酒飲は酒をやめ、妾を持つものは、その妾を出し、藝者や娼妓に關係ある者は、斷然その關係を絶たねばならぬ。若しまた、その身が藝者であるか、娼妓であるか、妾であるなら、その不義の身分を全く改めて、たとひどういふ難儀に逢はうとも、さういふ事を構はずにその足を洗はねばならぬ。酒屋、料理屋、藝者屋、貸座敷などは、斷然その家業を廢めねばならぬ。たとひそれがため、丸損をしようが、身代限りにならうが、そんなことを願ふ場合でない。若し人全世界を得るとも、その命を失はば何の益あらんや（馬太傳一六の二六）。博徒は博奕をやめ、相場師は相場をやめ、嘘つきは嘘をやめ、喧嘩ずきは喧嘩をやめ、懶け者は懶けをやめ、怒るもの、憎むもの、嫉むもの、怨むものは、その惡し

き心を改めねばならぬ、若し人に對して不義理でもしてをることがあつたら、まづそれを償はねばならぬ。キリスト教を信じたため、人の物を盗んでゐたものが、その舊惡を白狀して、取つたものを返へしに来たことがある。また、人を殺して隠してゐたものが、それを自訴して、進んでその罪に服したといふ美談もある。キリスト教には、慾惡煩惱をかへながら入ることはできぬ。世間にはそれをかへながら、入れる宗教もある。酒屋料理屋を大事のお得意にしてをる宗旨もある。又、藝妓娼妓博徒泥坊などを特別に保護するといふ神もある。しかし、そんな宗旨は惡魔の宗旨。そんな神は惡魔の神に相違ない。キリスト教は、清き神の教であるから、その門内には、汚れたものは、一步も足を踏みいることはできぬ。葦酒山門に入るを許さずと、表には立派に書いておきながら、裏口からは、なんでもござれといふ宗教とはちがふ。

○凡てをキリストに捧げる

キリスト教を奉ずるについて、今一つ大事なことがある。それは、自分は勿論、自分の家族も財産も、一切みなキリストに捧ぐること。これを献身といふ。しかし、一切を捧

ぐるといつても、なにも、自分の財産をことごとく教のために出してしまつて、自分は今日から無一文になれといふのではない。素より、場合によつては、キリストの命を蒙つて、さういふ事を実行する人もないではない。昔から、自分の持物一切を投げ出し、自ら無一文になつて、教のために盡した人はいくらもある。しかし、それは特別、普通の場合にはさうでない。この一切をキリストに捧げるといふことは、若し法律の語を用ひたら、所有権の移轉とでもいつて宜いだらう。今までは、わが身も、わが家族も、わが財産も、皆わがものと思つてゐたから、凡てをわが心のまゝに使つてゐたが、これからは、その一切をキリストに捧げ、凡ての所有権をキリストに移してしまつたので、もうわがものといふはなんにもない。凡てみなキリストのもの。キリストのものはわが勝手に使ふことはできぬ。今までのやうに、食ひたいから食ふ、飲みたいから飲む、爲たいからする、言ひたいから言ふといふやうな譯には行かぬ。金でも、今までは、自分の金だと思つて居たから、自分の勝手にこれを使うた。子供でも、自分の子供と思つて居たから、自分の勝手に扱つた。時には打ち叩きした事もある。中に

は又、悪い商賣の道具にするものもある。甚しきは、賣り飛ばす者までがある。實に法外千萬な話ではないか。

しかるに、一度キリストに凡てを捧げたものは、まつたくその心得かたがちがつてくる。財産に對しては、自分はもう所有主ではない。主人のものを預つてをる番頭である。すなはちキリストの番頭である。番頭に大切なものは忠實といふこと。主人のものを、主人のために、忠實に扱はねばならぬ。子供に對しても、もうたゞの親ではない、キリストに雇はれた乳母の如く、家族に對しては、その保護者の如く、凡て主の御心に従つて、主に盡す心を以て、彼等のために盡さねばならぬ。これがすなはち一切をキリストに捧げたものゝ心得かたである。人はさういふ心得をると、凡てのことが圓滿にゆく。自分の身から、凡てわが儘を取つてしまつて、常にキリストに對して、忠實を守つてをるほど麗はしいものはない。キリスト信者の生涯は、すなはち忠實の生涯である。死ぬるまでこの忠實を守り通さねばならぬ。キリスト信者は、もう己れのために生き、己れのために死んではならぬ。生きるも、死ぬるも、みなキリス

トのためである。何をするにも、まづキリストの御旨を尋ねて、それが御旨であると分つたら、どんな辛い事でも辭せずに行ふ。若しまたそれは御旨に逆ふ事だと分つたら、どんなにしたい事でも、斷じてやめる。決してその間にわが心を交へない。たとひどういふ結果にならうとも、たゞ御心のまゝに任せる。我父よ、若しかなはゞ、此杯を我より離ち給へ。されど、我心のまゝを成んとするに非ず、聖旨に任せ給へ（馬太傳二六の三九）。

第九章 祈の禱

○名醫の遺言

いよく決心して、信仰の道に入つたのは、丁度、人間がこの世に生れてたやうなもの。生れはしたが、まだ赤ん坊である。この信仰の赤ん坊を大きくするについて、三つの大事なものがある。それは、祈禱と聖書と救霊である。祈禱は、丁度呼吸のやうなもの。祈禱によつて、常に神と交り、神の聖き靈を吸ひ込まねばならぬ。又聖書を讀んで、その中から靈の滋養分を取らねばならぬ。救霊は靈の運動である。自分の救

はれた話を人に聞かせ、自分の信ずるところを人に傳ふるのは、我が信仰をきたへあげる上に於て、これよりよき運動はない。以上三つは、我々の信仰生活に、一寸も缺くことのできないものである。この三つをよく守り、よく行うて怠らなければ、信仰は獨りでに進んでゆく。信者の中に、色々な靈の病氣にかゝつて、その信仰が衰へるのは、要するに、この三つの内のどれかゝ缺けてをるからである。祈禱を怠るか、聖書を讀まぬか、又は救霊のために働くことをしないかであらう。

ある有名な醫者が死ぬるとき、大勢の弟子どもが、その枕許に集つて来て、先生が御死になさつたら、あとは眞闇になる。もう世界に誰も先生のやうな名醫がないからと、頻りに悲しんでゐた。すると、名醫が笑つて、なにもさう心配することはない。己れが死んでも大丈夫だ。あとにはまだ三人の名醫が残つてをるからと。弟子どもは大に驚いて、先生。その三人の名醫とは、どなたのことですか。どうぞその御名前を聞かせて下さいと言ふと、よし聞かせてやらう。第一が、ドクトル呼吸。第二が、ドクトル食物。第三が、ドクトル運動。若し世界の人が、この三名醫の言ふことをよく

聞いて、その教へをよく守つたら、もうこの世界には、病人といふものは皆なくなつてしまふ。さうすれば、醫者も薬も入らなくなる。

これはたゞ一場の昔話であるが、この中には、深い一衛生上の意味がこもつてゐる。健康を保つ秘訣は、恐らくこゝにあるだらう。良い空気をすひ、良い食物をくひ、又よく運動をすれば、病氣なんぢは寄りつかなくなる。信仰も同じこと。よく祈り、よく聖書をよみ、そしてまた、人の魂を救ふために、常によく働いてをれば、たとひ名牧師の説教は聞かんでも、信仰はひとりでに太つて行く。

○祈りは話しをすること

キリスト教の祈禱は、たゞ空に向つて唱へごとをするのではない。活る眞の神と話しをすることである。神は常に我々と偕に在ます。いつも我々の目の前に在ます。その神に向つて、わが思ふところ、欲するところ、願ふところを、訴へるのが祈りである。そも／＼宗教の奥義といふは、神と交り、神に親しみ、神に化せられて、神の子供となることにある。しかし、交りといふものは、互に話しをすることによつてでき

る。話さずに黙つてゐては、いくら面を見合はせてゐても、交る事はできぬ。我々が友だちと交るには、まづこちらから、わが心を打ちあけて語り、又先方の話をよく聞いて、向ふの心をも知り、それで互に親しむやうになる。神と我とは親子であるが、その親子の親しみも、互に話さなければできないものではない。無論、神は全智全能で、我々の心の中にあることは、話さぬさきから凡て皆御存知である。しかし、我々人間と交り給ふについては、神もまた人間のやうになつて、まづ我々の口から凡てのことを語らせたまふのである。聖書には、求めよさらば與へんとある。求めなければ、與へては下さらぬ。尋ねよ、さらば逢はんとある。尋ねなければ、逢ふては下さらぬ。門を叩けよ、さらば開かんとある。叩かなければ、開いては下さらぬ。ナアニ、心さへ誠であれば、祈らぬでも、與へて下さるなど、自分勝手な理屈をつけてをつたら、とんでもない誤りをする。それだから、丁度、親しい友達に向つて話しをするやうに、包まず、隠さず、又遠慮せず、なにもかも、心の有りだけを打ち出して祈らねばならぬ。よしまた、神に向つて包み隠しをしたところが、駄目なはなしであ

る。神はなにもかも御存知であるから、包みも隠しもできるものではない。それよりも、イツソのこと、始めから、耻も秘密もみな打ち出して祈るがよい。神はさういふ丸裸の祈りを好みたまふ。

○なんでも祈れ

それでは、なにを祈るかといふに、なんでもよい。自分の祈りたいことを祈る。祈りにはさまりはない。願ひたいことがあれば、それを願ふ。欲しいものがあれば、それを求む。又なにか心配ごとでもあれば、すぐそれを頼む。親のこと、子のこと、夫のこと、妻のこと、親類のこと、友達のすること、なんでも心にかゝることがあれば、すぐそれを祈る。病氣が起つたら、その病氣を直して下さるやうに祈る。難儀があつたら、その難儀から救うて下さるやうに祈る。金に困つたら、その金を與へて下さるやうに、職業に離れたら、その職につかせて下さるやうに、酒ずきはその酒がやむやうに、煙草ずきはその煙草がやむやうに、懶けものは勉強家になるやうに、心の汚ないものは潔まるやうに、怒るものは怒らぬやうに、貪るものは貪らぬやうに、弱いもの

は強くなるやうに、罪に負けるものは負けぬやうに、體の事も、心の事も、自分の事も、人の事も、家の事も、國の事も、社會の事も、世界の事も、なんでもその心に祈りたき事を祈るのである。但し罪である事は、祈つてはならぬ。悪いことは祈つてはならぬ。慾ばつた事を祈つてはならぬ。よく偶像信者の中で見ると、相場師が一攫千金を祈り、貸座敷屋の主人が、その不義な商賣の繁昌を祈るが如きは、却つて罪の上塗りをするやうなものである。

○祈りは聞かれる

しかし、そんな色々なことを祈つて、神がそれを聞いて下さるだらうかといふ人があつるが、祈れば必ず聞いて下さる。求むれば必ず與へて下さる。どんなことを祈つても、罪でさへなければ、神は必ず叶へて下さる。咎めはなさらぬ。惜しみもならさぬ。祈りは空に向つて獨り言をいふのではない。活る神に向つてもものを申してをるのである。我々が祈る言は、一々皆神の耳に達してをる。既に神の耳に達した上は、神は決して聞き流しにはなさらぬ。凡ての祈りには必ず神の答へがある筈。答へのない祈

りといふは決してあるものではない。若しあつたら、それは、その祈りが嘘であるから。心の中で眞實に願うてもおなじことを、口先のみで、さも熱心さうに祈るのは、あれは、嘘の祈りである。神に向つて嘘を言つたら、罰せられても、聞かれはしない。しかし、嘘でない、真心から出る熱心の祈りを、神が聞きたまはぬといふ筈はない。

○祈りの答へは様々である

祈りの答へについて、一つ注意しておかねばならぬことがある。眞の祈りには、必ず神の答へがあると云ふが、その答へが、果して我々が願うた通りにくるか、あるひは又、多少ちがつた形でくるか、又は全く反對でくるか、そこは分らぬ。人間は愚かなもので、時には、まちがつた祈りを真心から捧げてをることがある。若しさういふ場合に、神が、我々の言葉通りに與へて下さつたら、それこそ大變な不幸に陥るかも知れぬ。しかし、神は慈悲深き天の父上であるから、そんな場合には、必ずそれを改めて、我々が願うたその反對を與へて下さることがある。例へば、難儀に逢うたとき、

神に向つて、熱心に、どうぞこの難儀を取つて下さいと願うてをるのに、神は中々取つて下さらぬ。却つて益々その難儀が加はることがある。なぜこうだらうと、その時は、随分不平を漏らすことがないでもないが、さてあとになつて振りかへつて見ると、ア、よかつた、御蔭で助かつた。若しあの難儀がなかつたら、自分は生涯なまにえ信者で終つたかも知れぬ。ほんとうに、あの難儀が我を救うたと、その時には頻りに取つて下さいと願うた難儀のために、あとでは却つて感謝することがある。無論、我々も心では眞の幸福を祈つてゐても、わが智慧の足りないところから、言葉ではその反對を祈つてをることもある。それでさういふ場合には、神は我々の言葉の祈りでなく、心の祈りに答へて下さつたのである。

併し、多くの場合には、神は必ず祈つたそのものを與へて下さる。なぜならば、我々の祈りは、いつもくさうまちがつた祈りばかりではない。大抵はみな神の御心に適うてをる祈りである。それで、神は願うたそのものを與へて下さることが出来る。いつもそんな反對ばかりを下さらぬでもよい。パンを求むればパンを下さる。魚を求む

れば魚を下さる。金でも、十圓願へば十圓下さる。二十圓願へば二十圓下さる。殊に金は、こちらから願うたその額だけを下さるやうである。病氣でも、祈ればキツト直して下さる。その反對を與へて下さるのは稀である。だから、祈るときには、キツト祈つたそのものが與へらるゝものと信じてよい。たゞ始終服従の心を以て祈らねばならぬ。若し萬一、神がその反對を與へて下さつたときには、どういふ事でも悦んでそれに服従する覺悟がなくてはならぬ。

○祈つたら待つてをれ

いづれにしても、祈りには必ず神の答へがあるから、祈つたら、その答へのあるまで、ジツトして待つてをらねばならぬ。祈つたまふ、祈りつばなしにして、その答へのあるのを待つてゐないのは、本當の祈りではない。子供が親に向つて菓子をねだつてあきながら、その菓子がもらへるまで、そこにジツト待つて居らずに、言うたぎりで、すぐどこへか行つてしまつたら、せつかく親が戸棚から出してきた菓子も、居らぬ子供には、遣りやうがないだらう。

随分、キリスト信者の中には、神に對してこの子供のまねをする者がある。これらは決して信仰の祈りをする人ではない。願うたものが、確に貰へるつもりで祈つてをる者ではない。こういふ人は、海の浪のやうに、始終動いて同じところには暫らくも留つてゐないから、神も、そんな人の祈りには答へやうがないだらう。かくの如き人は、神より何物をも得ると思はぬがよい。何事でも祈つたら、その祈りが答へらるゝまで、始終そのことに氣をつけて、その答へが、どの方面からくるか、又どういふ形でくるか、よく注意してをらねばならぬ。口から出放題の祈りは祈りではない。

○信仰の祈り

信仰の祈りとは、今祈るところのことは、神がたしかに聞いて下さる、叶へて下さる、與へて下さると、思ひこんで祈る事である。どうだらうか。こんな事を祈つたところで、神が果して聞いて下さるやら、下さらぬやら、どうだか分らぬけれど、マア一つ、祈つて見ようかと、疑ひ半分はんぶんに祈るのは、ほんとうの祈りではない。それは、神を試すといふもの。こんな所に、魚さかなかをるかどうか分らぬけれど、マア一寸釣つて

見ようかと、試しに釣るのと同じこと。主なる爾の神を試むべからずで、祈るなら、信じて祈れ。たしかに貰へるつもりで祈れ。貰はねば承知ができぬ、どうでもこうでも、是非與へて頂かねばならぬといふ、大決心で祈るのが、信仰の祈りである。凡そ祈禱の時、その求ふ所のものは、必ず得べしと信ぜば、必ず得べし（馬可傳一一の二四）。これが信仰の祈り。こゝにある必ず得べしといふのが信仰の言で、キツト得らるゝ、決してまちがひはないと確信してかゝる事である。原語では、この必ず得べしと信ぜばが過古になつて、既に得たりと信ぜよである。祈るときには、その祈るところのものは、もう既に自分の手に握つたつもりで祈れといふこと。例へば、人に金を借りに行くとき、その人がたしかに貸してくれるかどうか分らぬといふときには、借りに行く道すがら、中々心配である。こうやつて行つたところで、あの人がウンといふだらうか。断はりはすまいか。ことによつたら玄關ばらひに遇ひはすまいか。併しながら、他には行くところもないから、マア一つ、當つて見ようかと、こうビク／＼して借りに行くのは、信仰の金借りではない。いはゆる當つて見ようかで、成否は保

しがたしといふ疑ひの金借りである。然るに、若しかねて、先方と約束でもあつて、行きさへすれば、すぐ貸してくれるといふ信仰を以て借りに行くときは、こんな心配は少しも入らぬ。まだ金の面を見ないさきから、はやもう握つた心持でをる。ことによると、借りに行く途中でも、借りられるか借りられぬかの心配ではなく、その既に借り得た金を、どう使はうかと、使ひ道について心配してをるかも知れぬ。これがすなはち、信仰の金借りといふもの。借りぬさきから、借りたつもりで、借りに行くのである。祈りがさうで、祈らぬさきから、聞かれたつもりで、祈らねばならぬ。

○いくらでも祈れ

祈りについては、神の約束がある。祈りさへすれば、なんでも聞いてやる。求めさへすれば、なんでも與へてやると。こんなたしかな約束が、聖書の中には、幾度も繰りかへされてをる。我々の祈りには、こゝにいふ保證が附いてをるから、凡て祈りは、無論、信仰の祈りでなければならぬ。信じてさへ祈れば、神はいくらでも、又幾度も聞いて下さる。人間は、始めの間は快く聞いてくれるが、あまり度々借りに行くと、

いくら親しい間でも、後には貸し澁るといふことがある。併し、神に於てはさうではない。我々が幾度行つて祈つても、決して聞き澁りはなさらぬ。又どんな大きな事を祈つても、聞き咎めはなさらぬ。惜しみもなさらぬ。その約束は無限である。又人の力には限りがあるから、たとひ貸したくも、さう度々は貸せぬといふ事もある。併し神の力には限りがないから、與へようと思ひ給へば、いくらでも與へて下さることができる。その分量にも、その度数にも、祈りには限りはない。神は却つて、成るべくしつこく、成るべく熱心に、成るべく度々祈るものを好み給ふ。神の一番嫌ひ給ふものは、我々がよそ／＼しくして祈らないこと。願はないこと。求めないことである。こゝろに有りがたい神を持つて居ながら、なぜ我々は祈らぬだらう。祈りさへすればどんな事でも叶へてやるといふ神を、目の前にひかへて居ながら、その恵みにあづかることのできぬといふは、實にどういふ愚かなことだらう。これがいはゆる、寶の山に入りながら、手を空しうして歸るといふのではあるまいか。

○祈りの稽古

なんでも、初めから旨くできるものはない。祈りもさうである。始めから旨い祈りもできぬ。始めは誰でもまづい祈りをする。始めからさう立派な祈りのできる筈はない。しかし、まづくても、なんでも構はず、熱心に祈つてをると、後には段々と旨い祈りができるやうになる。或人が僕の所にきて、

先生。私は祈りができません。これまでも祈つてはをりましたが、どうも、形式ばかりのまづい祈りで、ほんとうの旨い祈りができませんから、近ごろは、そんな形式ばかりの祈りをするより、寧ろ祈らぬ方がましだと思つて、祈りを暫く止めてをります。しかし、祈りの大切なことは、私もよく存じてをりますから、どうか、祈りたすとは思つてゐますが、先生。どう致したら、本當の祈りができませうか。

さうですか。祈りができねば、祈つたら宜いでせう。

しかし先生。祈りができぬといふのに、祈れとは、無理ではありませんか。

無理だかどうか、そこは知らぬが、祈りができねば、祈るより外、これではできません。道はないではないか。若し君のところに来て、僕は字が下手で、いくら書いても、

拙い字ばかりしかできぬから、こんなことなら、いつその事、書かぬ方がましだと思つて、暫らく字を書くことを止めてをるが、どうしたら、旨い字が書けるやうになるだらうかと、こういつて尋ねたら、君は、どう答へるつもり。恐らく、君の答へも同じであらう。すなはち、書けといふこと。習へといふこと。書かなければ、上手にはなれぬ。手習ひせねば、旨くは書けぬ。字の上手になる道は、たゞ書くの一方あるのみ。書いて、書いて、書きぬいて行くと、終には立派な書家になる。その書いたものが、額にもあがり、床の間にもかゝるやうになるだらう。

祈りもまたさうである。なんでも構はず、祈つて祈つて祈りぬいて行くと、終には本當の旨い上手な祈りができるやうになる。なんでもよいから祈りなさい。そんなくだらぬ講釋を言はずに、もつと子供らしくなつて、無邪氣な祈りを務めたらよからう。一體、君等は神に對してあまり大人ぶるからいかぬ。どうも理屈が多すぎる。たゞ祈りなさい、いくらでも祈りなさい、始めの間は、拙くとも形式でも構はない、屈せず構はず祈りなさい。さうすれば、後にはキット本當の旨い祈りができると。

こういつて答へておいたが、これは、獨りこの人のためだけではない。凡て祈りをする人に向つてすゝめたい所である。祈るときには、あまり理屈や講釋を言はずに、丸で子供のやうになつて、親にものをねだるやうにして祈るがよい。

○上手な祈り

祈りについて、上手と下手のあるやうに言つたが、その意味をまちがへられては困る。勿論、祈りには上手下手がある。しかし、祈りの上手といふは、なにも、祈るときに言葉が立派であるといふ意味ではない。随分、世間には、その意味の上手な祈りをする人もある。時によると、學校生徒が、骨折つてこしらへた作文でも朗讀するやうに、奇麗な言葉で飾り立てた名文的の祈りをする人がある。そんな祈りは、人の前ではどうか知らんが、神の前では、決して上手な祈りとはいへぬ。神の前で上手な祈りは、言葉にはない。言葉なんぞはどうでも構はぬ。たゞ泉の如く、心の奥底から湧き出してくる願ひである。子供が母親に向つて物をねだるときやうに、無邪氣な、遠慮のない、さうしてどうでもこうでも、貰はねば承知が出来ぬといふやうな熱

心の願ひである。そんな祈りは、神が悦んで聞いて下さる。又悦んで答へて下さる。これがほんとうの上手な祈り。一言にいへば、上手な祈りとは、神が聞いて下さる祈り。打てば響くといふほどに、すぐ答へて下さる祈りである。どんな奇麗な言葉をならべて、雄辯滔々、あたりの人を驚かすほどの祈りをして、若しそれに答へがなければ、なんにもならぬ。答へのない祈りは、下手の下手なる祈りである。いな、それは祈ではない、たゞ獨り言をいふのである。であるから、祈りについて一番大事なものは、その祈りが、聞かれたか、聞かれぬかと言ふこと。聞かれぬ祈りは、下手な祈り。聞かれた祈りが、上手な祈り。

しかし、前にもいつたやうに、始めは、誰でも、下手な祈りをする。それでも構はぬ。屈せず撓まず、祈つてをると、その内には、キツト立派な祈りができるやうになる。さうして、一度でも、自分の祈りが、たしかに聞かれたと云ふ實驗ができてくると、それから後は、祈りはずん／＼上達して行く。終には、山を動かすほどの力ある祈りができるやうになる。

○祈りと聲

祈りには、色々ある。聲を出して祈ることもある。黙つて祈ることもある。人と偕に祈るときは、無論、聲を出して祈らねばならぬが、自分一人で祈るときには、黙つて祈ることがある。併しながら、自分一人で祈るときも、どちらかといへば、僕等は、聲を出して祈る方がよいと思ふ。なぜなれば、聲を出して祈ると、祈ることがはつきりとしてくる。黙禱は、やゝもすると黙想になる。祈りは黙想ではない。神に向つてお話をしてをるのであるから、友達と話をする時のやうに、成るべくはつきりと、順序を立てて祈つた方がよい。さうすると、如何にも、神が目の前に在まして、わが祈る言葉を一々聞き取つて下さるやうに思へる。

祈るときには、成るべく人のをらぬ部屋に入るか、二階にあがるか、庭にをりるか、木の下にかゞむか、どこでも宜いが、聲を出しても、人の妨げにならぬところ、又祈る事柄を人に聞かれる心配のないところを撰んだ方がよい。そんなところは、求むればどこでも得らるゝものである。若し山に行くか、野に出るか、さういふ機會に出

會つたら、思ふ存分大きな聲で祈るがよい。あたりに氣兼ねせず、思ひきつた聲を立て、祈るときには、非常によい祈りのできることがある。田舎の山の中や、野原なんろに住んでゐる人は、祈りのためには、最もよい機會を持つてをる。會堂なうも、たゞ公けの集會の時だけでなく、祈りたい人は、いつでもそこに入つて祈ることのできるやうに、常に開けておいて貰ひたいものである。わが家は祈禱の家と稱へらるべしと録さる(馬太傳二一の一三)。

又深夜の祈りが中々よい。夜中に目が醒めて、あたりがシントして、草木も眠つてをるといふころ、獨りで、靜かに、神に祈るのは、實になんともいへぬ愉快なものである。寢床の中で、くだらぬことを考へて、寢がへりばかりしてをるよりは、すつと起き出て、暫く靜かに、祈りをするが一番よい。

○長い祈りと短い祈り

祈りには、長い祈りと、短い祈りとがある。長い時には、一時間も二時間も、あるいは徹夜して祈ることもある。或人は、どうして、そんな長い祈りができるだらうかと

いふが、たしかにできる。神に親しくなると、御話をする種がいくらでもできてくる。自分の事、人の事、家の事、國の事、祈ることは、かず限りなくある。お互が親しい友達と、久し振りに出會つたときには、夜どほし寢ないで話することもあるではないか。祈りもまたその通り。或人の如きは、一週間、山にこもつて斷食して祈つてゐたといふことがあるが、我々にも、時々、この斷食祈禱の必要がある。

祈りはまた、必ずしも長いばかりが必要と言ふものでもない。短いのも入る。一日の中に、何十回といふ短い祈りをする必要がある。時々刻々、湧いてくるべき事のため、いつも我がそばに在ます神に向つて、一寸一口の御願ひをすることが入る。この一口の祈りをするには、別に、二階にあがつたり、部屋に入つたりせぬでもよい。何をしてゐても、すぐその場で、そのまゝ祈つたらよい。これが聖書に教へてある。常に祈れといふこと。一體信者には、祈りの態度といふことが大事。いつでも、どこでもすぐ祈る事のできる態度でをらねばならぬ。

○御名に依て祈る

凡ての祈りには、必ずその終りに、キリストの御名に依つてといふことが附かねばならぬ。これがキリストの教へ給ふた祈りの方式である。爾曹すべて我名に託て求ふ所のことは、我すべて之を行はん(約翰傳一四の二三)。我々は罪人であるから、神に向つて祈る権利がない。罪人といふものは、凡ての権利を剝奪されてしまふものである。然るに、キリストは神の獨子で、神に向つて、どんなことでも願ふ事のできる御方である。神はまたキリストのためには、どんなことでも叶へて下さる。さういふ特権あるキリストの御名に依つて祈れば、神はキリストの祈りに答へ給ふやうに、我々の祈りにも答へて下さる。いはゆる、キリストにめんじて聞いて下さるのである。喩へていへば、僕は今一錢も銀行に預金してゐないから、僕が自分の名で金を取りに行つても、銀行では出してくれない。然るに、僕の友人には、その銀行に大金を預けてをる者がある。そこで、その友人の名を借りて、その銀行に取りに行つたら、彼の預金のあらん限りは、銀行からも金を出してくれるやうなものだらう。又キリストの御名で祈るといふは、たゞにキリストの御名を借りて祈るといふ意味は

かりでもない。その上に、キリストに代つて、キリストの名代として、キリストのために祈るといふ意味も含まれてをる。贖罪の章でいつたやうに、我々は、キリストと偕に十字架について、もう既に死んでをる。今生きてをるのは我々ではない、我々の身代りに死んで下さつたキリストである。すなはち、我々はもうキリストのために生き、キリストのために死するものである。すでにキリストのために生きてをるといへば、凡てのこと皆キリストのためになすべきである。キリストのための外、別にわがためといふことはない。それだから、祈るのも、キリストのために祈る。實は、キリスト信者には、キリストのために祈る外、己れのために祈ることはない筈である。たゞに祈りだけでない、言ふことも、行ふことも、みなキリストのため。飲むも、食ふも、みなキリストのため。我々キリスト信者の生涯は、全然キリストの御名代としての生涯でなくてはならぬ。

○祈りは靈の呼吸である

人間が呼吸をするのは、たゞ空気を吸うたり吐いたりするだけではない。空気を吸ひ

こむと、その中の酸素が、肺を通つて、血に交りて、體中にまはり、至るところに、酸化作用を起して、それが體の中の凡ての運動の原動力となる。若し呼吸をせずにて、この酸化作用が、體の中に起らなかつたら、體の運動はみな止まつて、人間はすぐ死ぬる。だから、人間は五分間空気を吸はぬと、すぐ死ぬといふのである。

祈りが丁度このやうなもの。我々キリスト信者が祈るのは、たゞ神に向つて、あれを下さい、これを下さいと言つて、願ひごとをするだけではない。無論、願ひごとをするのも大事であるが、それよりもなほ大事なものは、祈りによつて神の靈を吸ひこむことである。この靈が空氣の中の酸素のやうに、我々の心の中に入つて、我々に善をなさしめ、惡を止めさせる原動力となるのである。この神の靈を失へば、善をなす力も、惡を止める力も、みな無くなつて、我々の靈は、すぐ死んでしまふ。

そも／＼悪い事はしてはならぬ、善い事はせねばならぬといふぐらいな事は、誰もよく知つてをる。しかし、知つてをるだけで、行ふことができぬ。若し人が、知つてをるだけの善を行ひ惡をやめたら、その人はすぐ聖人になれるだらう。それができぬの

は、する道を知らぬからではない、これを行ふ力が無いからである。今の心靈界に必要なもの、議論や講釋ではない、たゞ實力である。實力さへあれば、實行はすぐできる。喩へていふと、人間は電車のやうなもの。電車には車がついて、それが二本のレールの上に乗つてをるから、押しさへすれば、ゴロゴロ／＼轉んで、どこまでも行く筈である。ところが、電車は、人の手で押したぐらいでは、中々動かぬ。それも、大勢かゝつて押したら、すこしぐらいは動くかも知れぬが、そんなことでは、電車を用をなさぬ。然るに、電車の上には、鐵の棒がついてをる。その鐵の棒を、一寸その上に引つばつてある電線にくつ付けると、それから電氣が傳うてきて、車がまはり出して、電車はたちまち矢の如くに飛んで行く。

人道もまた電車の二本のレールを見たやうなもの。その一本は、善をせよ。今一本は、惡をすな。人間はこの二本のレールの上さへ走つてをれば、間違ひはない。然るに、その上が中々走れぬ。たま／＼走れば、脱線ばかりする。してはならぬ惡をして、せねばならぬ善をせぬ。いくら人間の力で、その心の車を押して見ても、中々動かぬ。

昔から、色々な人が出て、色々な教へを説いて、この車を押して見たが、どれも、これも、みな失敗。人の心はますます脱線するのみである。そこで、キリストが此の世に降り給うて、それではいかぬ。人の心が神を離れてゐては、決して人道が走れるものではないから、何よりさきに、まづその心を、神にくつ付けるやうに務めんければならぬ。心が神にくつ付きさへすれば、神の靈が降つてきて、たやすく人道の二本のレールの上を走つて行くことができると教へたまうた。

さて、どうすれば、その神にくつ付いて、その靈を受けることができるか。これがすなはち祈りである。祈りによつて神にくつ付く。祈らなければ神より離れる。神より離れると、丁度、電車の上の鐵の棒が、電線をはづれたときのやうに、進行がすぐとまる。それだから、我々は常に祈らねばならぬ。片時でも、祈る心を失うてはならぬ。始終祈つて、始終神にくつ付いてをらねばならぬ。ほんとうに、祈りをするのは呼吸をするやうなもの。呼吸がとまると人はすぐ死ぬる。

第十章 應 驗

○デョージ、ミュラー

神に祈つて、その祈りの聞かれた話はいくらもある。キリスト信者で、多少とも、その經驗を持たないものはない。だが、その中にも、英國のデョージ、ミュラーの祈りの經驗は、また格別である。

ミュラーは、もと獨逸の人。千八百五年にプロシヤ國で生れた。しかし、その全生涯を殆んど英國で送り、千八百九十八年に、九十四歳の高齡を以て、英國のプリスター市で死んだ。彼は最初キリスト教の傳道師であつた。しかるに、三十二歳の時、深く感ずるところがあつて、プリスター市に一つの孤兒院を起したが、その經營法が、他の孤兒院とは全く違つてゐた。その違ひの點は、この孤兒院では、一切人に向つて寄附を請はぬといふこと。一體、孤兒院といふものは、自給のできる性質のものではない。必ず人の助けを仰がねばならぬ。それで、いづれの孤兒院でも、口に、筆に、廣く世間の同情に訴へて、その寄附を仰いでをる。素より當然の事である。しかるに、

ミュラーの孤兒院ばかりは、一切人を頼まない。口でも、筆でも、世間の同情に訴ふことをせぬ。遊説にも出ぬ。廣告もせぬ。手紙も出さぬ。印刷物も配らぬ。どういふ場合でも、一切人にたよることをせぬ。そんなら、この孤兒院には、始めから基本財産でもあつたかといふに、それもない。ミュラー自身は貧乏である。おまけに借金も罪惡だと言つて、一切させぬ。さうすれば、この孤兒院には、金の入るべき道は、みな塞がつてしまつてをる。

○祈りの孤兒院

それでは、どうして、この孤兒院を經營して来たかといふに、これが、恐ろしい篤い信仰に基いてをる。聖書に、神はみなし兒の父(詩篇六八の五)とある。神は素より、凡ての人の父であるが、とりわけ孤兒のためには、特別の意味で父であるといふこと。ミュラーは深くこれを信じた。そして、果してさうなら、その孤兒を集めて、これを育つことは、神の御旨に適ふことである。神の御旨に適ふ以上は、彼等を養ふに必要なのは、必ず神が下さるに相違ない。だから、孤兒院經營については、人間に頼

む必要はない。神にさへたよつてをれば、神がかならず與へて下さると、かう信じたので、一切人にたのまず、たゞ神にのみ祈つてゐた。自分だけでなく、部下のものにも祈らせた。彼等にも一切人に向つて寄附を仰ぐことを禁じた。どこまでも、祈禱一つで、この孤兒院を經營する大決心を起したのである。

ところで、世間の人は皆笑ふた。狂氣の沙汰だと言つた。そんなことをして、始めは珍らしいから、一時は人が好奇心に驅られて、金を出すかも知れぬが、好奇心も、さう長くは續くものでない。今に行きづまつて、キユウ／＼言ふだらうと、かういつて嘲つてゐた。しかるに、不思議にも金がくる。どこから来るか、頼まぬのに来る。その慈善家、この金持、中には貧乏人もをる、寡婦もをる、子供もをる、知るも、知らぬも、續々として金を送る。無論、ミュラーは、こちらからこそ頼まぬが、人が自由發意で送つてくれる金は、神が自分の祈りに答へて、與へて下さつたものとして皆悦んで受けた。但し、どういふ場合にも、院の經濟事情を、人に向つて語ることはしなかつた。

○金持にも頼まない

あるとき、金持の夫婦が孤兒院を見に来た。見たあとで、いろ／＼なことを尋ねた。ことに、経済の點をたづねた。その意味は、若し金に困つてゝもをれば、少しぐらいは、助けてやつても宜いといふやうであつた。しかるに、ミユラーは例によつて、院の經濟事情は一切話さぬ。たゞこれは神の孤兒院であるから、いつでも入用なものは神が下さると、こういつたきり、他に一言も答へなかつた。そこでその金持は、寄附を言ひ出す機會を得ずに、そのまま歸つてしまつたといふこと。ところで、その時院内には、一シルリングの金もなかつた。これがミユラーだ。たとひ一シルリングの金がなくても、人に向つて、訴へることは一切しない。たゞ神にのみ祈る。神はまた、彼の祈りに答へ給うた。ミユラーの一生涯、即ち三十二歳から九十四歳まで、六十餘年の長いあひだに、この孤兒院に向けて、自由發意の寄附金が、絶間なく入つて来て、一度も、大勢の孤兒をかつゑさすやうな事はなかつた。素より、難儀をしたことは度々あつたが、どういふ場合も、ミユラーが祈りさへすれば、神が必ず聞いて下さつた。

○二千の孤兒の晝飯がない

あるとき、晝飯に、食ふものがなにもなかつた。食堂掛が、十二時二十分前にやつてきて、先生。今日は、子供に食はせるものが、なんにもありません。どう致しませうかといふ。ミユラーは答へて、さうか、それでも、今に神が下さるから、御飯の用意をしておけと言つた。用意をせよと言つても、なにもないのに、用意のしようがないから、只から皿をならべておいた。暫くすると、又やつて来て、先生。もう十分前ですが、まだなんにも來ません。如何でせうか。よいから、今に神が下さるから、あつちに行つて待つてをれと叱られた。今度は、五分前になつた。食事の鐘をならす時が來た。食堂掛が青くなつて、先生。先生。もう五分前です。鐘を打たねばなりません。が、まだなんにもきません。どうしませうかと、追つて來た。さうすると。ミユラーが激しく叱つた。御前は、こゝをなんと思つてをる。こゝは神さまの孤兒院だぞ。この二千の孤兒は（當時この院内には二千有余の孤兒を收容してゐた）神の子供だぞ、神の子供には神が食はせて下さる。決してかつゑさせはなさらぬ。御前は、神を疑

ふのか。もう再びそんな不信仰な事を言うて、己れのそばに来ることはならぬと言つて追ひかへした。食堂掛は、さう叱つても、無いものはないのだから仕方がないといふ風で、澁々と歸つていつた。すると、丁度その時、大きな荷車數臺に、パンを載せて、ある人から寄附して來た。そらパンだと、早速、それを二千余の孤兒に分けたが、みな腹一ぱいに食つて餘りがあつた。

○食堂掛の免職

しかるに、その午後、ミユラーは、例の食堂掛をよんで、御前は、長いあひだ、この院のため、忠實に働いてくれて、誠に悦んでゐたが、しかし今日は、氣の毒ながら、御前を解雇せねばならぬことになつた。その譯は、御前は今日晝飯まへに、十五分間神を疑うた。いつも言ふ通り、こゝはミユラーの孤兒院ではない。神さまの孤兒院。院長はミユラーではない。神さまである。その院長を、只の十五分間でも疑ふやうな人は、こゝの事務員にはしてあげぬから、どうぞ今日限り、こゝを出て貰ひたいと、早速その日、その食堂掛を免職した。さすがはミユラーだ。自分ばかりではない、部

下一同にも、自分と同じ信仰を持たせることを務めてゐた。

○六十年間に千三百五十萬圓の寄附

この孤兒院を始めた時は、院生が僅かに二十人ばかり、家は借屋で、誠に微々たるものであつたが、追々に擴張して、後には大した建築もでき、院内には、いつも數千の孤兒を收容してをるといふ、一大孤兒院となつた。ミユラーが、死ぬる數ヶ月前の報告書に、左の如き統計が載せてあつた。

創立以來、過去六十一年間に、この院に收容した孤兒の總數、九千七百四十四人。この孤兒養育のため、諸方から受けた寄附總額、九百六十四萬七千四百四十圓。この外に、同じくミユラーの經營にかゝる貧民學校に收容した生徒の總數、十二萬千六百八十三人。聖書を配附したる部數、舊新兩約書、二十八萬千六百五十二冊。新約書、百四十四萬八千六百六十二冊。また内外宣教師を補けたる者數百名。凡てこれらの事業のため、とくに指定してうけた寄附金總額、三百八十九萬四千二百六十圓。以上二口を合せて、寄附金合計、一千三百五十四萬千九百圓となる。これが、只の一度も人に請はずに、

祈り一つで神から戴いた賜物である。

○偉大なる信仰

實に驚くべき事實ではないか。これを聞いては、誰も祈りの應驗を疑ふことはできないだらう。こういふことは、決して偶然にできるものではない。若し本當に活る神が在まして、ミユラーの祈りに答へて、實際に彼が求めたものを與へて下さつたものでなければ、一萬の孤兒を、六十年間、無事に養うて行くといふやうな事が、どうしてできるものか。人間の目から見れば、ミユラーのやりかたは、實に冒險きはまつてをる。いな寧ろ無謀といつてよい。寄附金は請はぬ、借金はせぬ、基本金は無い、自分は貧乏、それで、何千といふ活きた人間の子をかへて、若し人が自由意志で寄附してくれなかつたら、彼は一體、どうするつもりでゐただらう。一人や二人なら、どうでもなるが、もう何千といふ大勢になつては、どうすることもできぬ。若し寄附金が續かなかつたら、それだけの孤兒を干乾しにするか、又は再びもとの大道に投り出してしまふか、この外には、道はなかつただらう。しかるに、それを干乾しにもせず、

大道にも投り出さず、立派に養うて來たといふのは、たしかに、世界には活る神があつて、祈れば必ず答へたまふといふ立派な證據になる。しかし、その神あるを信じて、人間の同情などをあてにせず、たゞ祈り一つでやり通して來た、ミユラーの信仰も亦實に偉大なものであつた。爾鼻より息の出入する人に依る事を止めよ(イザヤ二の二二)

○ミユラーの大目的

そもく、デヨージ、ミユラーが、かゝる特殊の方法を以て、この孤兒院を經營したのは、たゞに、世の中の憐れなる孤兒を救はんがためばかりではなかつた。それも無論、その目的の一つではあつたが、まだその外に、大なる目的があつた。それは、天地の主なる我が神は、活る神、昔も今も變らざる祈りに答ふる恵の神、昔の預言者や、キリストの使徒たちの祈りに答へて、様々の奇跡をあらはしたまうた神は、今もかならず我々の祈りに答へて不思議をあらはしたまう神であるといふ事を、實驗的に、世界の人に教ふるためであつた。さうして、彼は、その六十餘年の長き實驗によつて、たしかに、それを我々に教へてくれた。ほんとうに、世界を動かす神の御腕を動かし

て、一千三百五十萬圓の金を得て、一萬の孤兒を養うた、デョージ、ミユラーの祈りは、力ある義人の祈りであつた。

○三萬遍の答へ

ある人が、ミユラーに向つて、あなたの御生涯中に、たしかに神に聞かれたと信ずる事のできる祈りが、何遍ぐらいありましたかと聞いたたら、ミユラーは答へて、祈つたその時、若しくはその日の内に、聞かれたと信ずることのできる祈りが、たしかに、三萬遍以上はありましたと言つたといふこと。驚くべき祈りの答へではないか。三萬遍以上も、即時若しくは即日答へられたといふ實驗を持つてをるとは。ミユラーの日誌は祈りの日誌。いつ何を祈つて、それがいつ聞かれたといふことが、一々精しくつけてある。金のことは何シルリング何ペンスまでつけてある。それで聞かれた祈りの大概の數を覚えてゐたものと見える。若し我々に同じ問をかけられたら、御互はなんと答へる。誠に耻かしい話ではないか。ほんとうに、答へのあつた祈りといふは、瓜の花のあだ花の多い中に、稀れに實を持つ眞花のあるのと同じぐらいではあるまい

か。しかし、ミユラーが祈つた神は、我々が毎朝毎夜祈る神。同じ神に同じ事を祈りながら、どうして、それが聞かれぬだらう。彼は祈つて、一千三百五十萬圓を貰うたといふが、御互はいくら貰うた。何を貰うた。祈りは彼の專有物ではない。求めよさらば與へんとの御約束は、彼一人のためではなかつた。我々もたしかにその中に加つてをる。それになぜ、彼は得て、我々は得ないか。外でもあるまい、彼は信じて祈り、我々にはその信仰がないからであらう。求めよさらば與へんとの神の約束を、彼は命がけて信じて祈つた。若しその約束通りに、神が與へて下さらなければ、彼は、孤兒と偕に餓死するつもりでをつた。彼の祈りは決死の祈り。決死の祈りは聞かれる祈り。祈りの秘訣はこゝにある。

第十一章 聖書

○聖書の讀みかた

聖書は舊約と新約との二つから成つてをる。舊約は、ユダヤ民族の歴史、法律、詩歌、預言などをあつめたもの。それが三十九卷ある。新約は、キリストの四つの傳記、弟

子たちの傳記とその書翰。これが二十七卷ある。新舊兩約書を合して、總體では、十六卷になつてをる。

聖書は、人間の力でできたものではない。凡てみな神の默示に基いてをる。こゝが、他の書と全くちがふところである。聖書を読むときは、その中に載せてあるところは、凡て皆神の言として、信じてこれを読み、疑つて読むべきものではない。敬虔の心を以て、祈りつゝ読み、その深き意味を、聖靈によりて教へらるべきものである。敬虔の心なくして聖書を読むものは、神の言を讀すものである。

さて、始めて聖書を読む人のために、その読む順序をいへば、まづ新約書中のキリストの傳記を、馬太傳から約翰傳まで、一通り読むこと。この四つの傳記を四福音書と言つて、四人の弟子が、キリストの言行を、各々の見るところを以て書いたもので、丁度、一つの物を、四方から眺めて、各方面からそれを説明したやうなものである。その次に、弟子たちの傳記と、その書翰とを読む。まづこれで、キリスト教の大體が分る。そこで今度は、舊約に戻つて、創世記から始めて、ユダヤ民族の歴史、法律、

詩歌などを讀み、さうして最後に、預言の書を読む。書物の順序からいへば、舊約がさきで、新約があとになつてをるが、實際は、新約が本で、舊約はその準備であるから、まづ本がよく分つた上で、その準備を讀んだ方がよい。

○聖書の飛び読み

聖書を読む人が、始めから心得てをらねばならぬ事は、讀む間に分らぬところの澤山に出てくること。普通の書物をよむやうに、一讀して、すぐ分るやうに思つて掛つたら、大間違ひをする。しかし、分らぬところもあるが、又分るところも澤山にある。どちらかといへば、分る部分が多い。その分る部分を、繰り返し繰り返し、敬虔の心を以て、祈りつゝ讀んで行くと、聖書の深い意味が次第に分つて、信仰を養ふための靈の滋養分は、それで十分に得られるものである。そこで、始めて聖書をよむ人にすむる讀方は、飛び読みといふことである。飛び読みとは、分らぬ部分は飛び越して、分るところを撰り讀みすることである。始めから、分らぬところに頭を突き込んで、どうでもこうでも、それを分らせようとするれば、却つてその骨折りに屈托して、後に

は聖書を投り出すようになる。多くの人が、聖書は分らぬと言つて、少し読んで、すぐ投つてしまふのは、畢竟この讀方をするからである。なるほど。今は註釋本も澤山できてをるから、それによつて一々質して行つたら、それで分りもするだらうが、それでは中々面倒で、容易に聖書の全體を見通すといふ譯には行かぬ。それよりも、分らぬ分は暫らくぬきにして、分つた分から撰り食ひして掛つた方がよい。

魚を食ふとき、誰も始めから、骨の間や、頭の中に挟まつてをる、取りにくい身をさがし出して食ふ事はせぬ。始めは誰でも、取り易いよい身から食ふ。さうして、愈々それを食ひ盡したら、そこで始めて、骨しやぶりや、頭の中の身さがしをやるだらう。聖書もまたその心得でよんでよい。聖書の中でも、滋養分の多いよい身は、誰にでもすぐ分るところにある。註釋なをを引き出して來て、漸くに分るやうな所は、あまりよい身ではない。そんな所はズット後まはしにしてもよいだらう。

○靈の糧

我々が聖書を読むのは、なにも聖書學者になるためではない。これを讀んで靈の糧を

得るためである。聖書學者もあつて結構。丁度、世の中に、植物學者や動物學者があるやうに。しかし、人間は皆そんな學者にならぬでもよい。動物の研究や植物の研究も、必要ではあるが、それよりも、我々に取つてもつと必要なことは、その動物や植物から、我々の體を養ふために必要な滋養分を取ることである。八百屋や魚屋の店先にならべてある品物は、そんな學者に、研究の材料を提供するためではない。あれは我々に食物を與へるためである。我々は、あれを買つて、うまく料理して食ひさへすれば事は足る。

神が聖書を下さつたのも、これを、文學的や哲學的に研究させるためではない。これもまた我々の信仰を養ふために必要な靈の滋養分を取らせるためである。すなはち食ふためであつて、たゞ知るためだけではない。いくら聖書を研究して、その道に精しくなつても、若しそれで信仰を養ふことができなければ、それこそほんの聖書よみの聖書しらずといふものである。いな知つてはをるが、食つてはゐない、聖書の眞味はまだ分らない人である。今時の聖書よみにはこれが多い。彼等は聖書についての智識

は持つてをる。また理屈も知つてをる。しかし肝心の靈の滋養分を取る道が分らない。それで、聖書は読みながら、その靈は痩せ衰へて見るかげもない。どうぞ、これから聖書を読む人は、こんなつまらぬ真似をせず、ほんとうに、聖書を靈的に読んで、食つて味うて滋養分を取つて、それでよくその信仰を太らせて貰ひたい。

○毎日よめ

聖書を靈の糧として読むには、かならず毎日讀まねばならぬ。體のためには、日に三度づゝ飯を食ふ。これを怠るものはない。毎日食ふのは面倒だから、一遍に四五日分も食ひ溜めておかうと云ふものはない。いくら面倒でも、こればかりは毎日食ふ。聖書も同じ。一度に十日分も二十日分も讀み溜めておく譯には行かぬ。これもまた毎日よんで、日々の滋養を取らねばならぬ。怠らずして少しづゝ讀むと、書物はなかゝく讀めるものである。たとへば、毎日一章づゝよんでも、丁度二百六十日間、すなはち八ヶ月と二十日間では、新約聖書全部を讀み終ることになる。聖書の一章を讀むには、凡そ五分間ぐらいはかゝる。しかし、どんな忙しい人でも、一日の中に、五分の時間

の取れぬといふ筈はあるまい。朝と晩と、三度の食事の後に、一分づゝ讀んでも、五分はよめる。若しそれでも、暇がないといつたら、その人は、朝五分だけ早く起きたらどうだらう。目がさめてから、いつまでも寢床の中でつまらぬ事を考へて、グズグズしてをる代り、サツサと起きて聖書でもよんだらよからう。

○どこへでも持つて行け

聖書は、いつも持つてをるべきものである。煙草飲が煙草入を放さぬやうに、信者は聖書を放してはならぬ。煙草飲になると、他の物はなにを忘れても、煙草だけは決して忘れぬ。こればかりは、いつでも持つてをる。ポケットの中か、袂の内か、腰のまはりか、どこぞに煙草はくつ付けてをる。それを面倒とも、なんとも思はず、どこへでも持つて行く。新約聖書の小形の分は、丁度巻煙草入の大きさがぐらいであるから、あれならば、袂の中に入れておいても、さう邪魔にもなるまい。

また、煙草飲が煙草を飲むやうにして聖書をよんだら、随分よめるだらう。まづ朝目がさめると一服、食後に一服、出がけに一服、寢しなに一服、退屈すれば一服、人の

家に行つて火鉢が出る一服、仕事のあひ間に一寸一服、汽車に乗ると一服、といふやうに、いつでも構はぬ、どこでも機さへあれば一服やるのが、煙草飲の癖である。彼等が煙草のために費す時間を勘定して見たら、一日の中でも、随分大したものになるだらう。若し我々信者が、凡ての機を捕まへて、一寸一口と言ふあんばいで聖書をよんだら、一日の中にも、どれくらい読む時間が興へらるゝか分るまい。一年中には一回や二回は、聖書全部を読み通すこともできるだらう。

○聖書と雑書

今はいろ／＼な書物が澤山にできてをる。これからもまた續々できる。我々が読む書物の数は、ますます殖える一方である。それにまた新聞や雑誌もあるから、よみものはいよ／＼多くなる。それで、ことによると、そんな世俗の読み物に追はれて、肝心な聖書を読む時間を失ふといふ恐れがある。今時の読書家は、こゝによく注意せねばならぬ。宗教の本でも、なか／＼澤山にできてをるから、それを読むのに忙しくて、却つて聖書を読むことを怠るやうなこともある。これもよくない。たとひ、宗教の本

であつても、聖書の代りにはならぬ。どんな旨い御菜でも、飯の代りをするにはできぬ。人間のかいた宗教の本は、聖書の添へものとして読むには誠に結構であるが、聖書の代りとして読むべきものではない。それだから、どういふ結構な書物にでも、我々が聖書をよむ時間を譲つてはならぬ。まして俗界の新聞雑誌の如きものに、その大切な時間を奪はれてはならぬ。

大抵な人が、朝はかならず新聞を読む。新聞を読まずに出ると。世の中のできごとが分らないので、その日の事務に差支へがあると言ふ。それは成程さうかも知れぬ。しかし、聖書を読まずに出ると、その日の靈の戦ひに、心の守りを失ふて、どんな不覺を取るかも知れぬ。だから、キリスト信者は、たとひ新聞は読まずに出ても、聖書だけはかならず読んで出ることにして貰ひたい。

○一生涯のよみもの

人の書いた本は、一遍よむと、その旨味は大抵取りつくしてしまふ。二度見るには及ばない。たまには、二三度ぐらい繰りかへして読むべき本もないではないが、そんな

本は稀れである。しかるに、聖書だけは、いくら読んでも、その旨味を取り盡すことはできぬ。一度より二度、二度より三度と、読めば読むほど、その味ひが深くなる。聖書は實に一生涯の讀物である。人の書いた本は、丁度 桶にくんだ水みたやうなもの。少しくめば、すぐくみ乾してしまふ。聖書は、滾々として湧き出る井戸の水のごときもので、いくら汲んでも、くみ乾すといふ心配はない。汲んでも汲んでも、いつも一ぱいである。これがすなはち聖靈によつてかゝれた神の書物といふ證據であらう。それで、我々は、生涯これを読むやうに務めねばならぬ。少くとも、舊新兩約書を合はせて、一年に一回ぐらひは讀み返へすやうにしたいものである。デヨージ、ミユラーは、その生涯中に、聖書を數百回讀んだといふことである。

○聖句の暗記

聖書はたゞ讀むだけでも足らぬ。讀む間に、自分の心に深い感じを與へたところは、一寸そこだけ暗記しておく必要がある。この聖句暗記が、我々の潔めのために、どれだけの助けになるか分らぬ。人間の頭の中には、とかく妄念邪想がみちたがるもの。

これが凡ての罪惡のもとになる。まづ頭の中で悪い事を思つて、それからそれが、言や行に表はれてくる。そこで、かねてその頭の中の思ひを清めておくのが、罪惡を未發に防ぐ一番よい方法である。それならどうして、これを清むるかといふに、丁度池の中の濁水をすますときのやうに、なんでも構はず、ドン／＼水口から清水を流し込むと、濁水は獨りでに出口から押し出されて、終に池の中は澄み切つた清水のみになるのと同じこと。我々の濁つた頭の中に、清い聖句をドン／＼つきこんで行くと、い／＼な妄念邪想は、いつの間にか押し出されてしまつて、頭の中は清き思ひのみに満たされてくる。全體、頭の中が空であるから、そんな邪念が入つて来る。それを聖句で満たしておけば、さう滅多に入らぬものではない。

かねて聖句を暗記して、それが頭の中にみちてをると、少しでも頭に隙ができる時には、すぐそれが浮んで出る。道を歩いてをる時、夜ねてをる時、仕事のあひ間に一寸氣の轉じた時、人と話してをる時、獨りで黙想してをる時、神に祈つてをる時、フイ／＼といろんな聖句が浮んで来て、それがため、氣が清々するやうになる。そして又、

短い聖句は、そんなに覚えにくいものではない。それを暗記するのは、さう面倒なものではない。例へば、己れの如く爾の隣を愛せよ。己れに敵するものを愛せよ。心の清きものは福なり。求めよさらば與へられん。酒に酔ふなかれ。宜しく靈に充たさるべし。常に祈るべしなどの短い聖句を、一日に一つづつ暗記しても、一年には、三百六十五聖句を頭の中につめておむ事になる。これだけの聖句が、頭の中に満ちてをたら、邪念邪想も容易には入りこめない。これを成るべく務むるがよい。一日に、こんな聖句の一つや二つを覚えるぐらひは、なんでもない筈である。若しそれができぬと言つたら、できぬのではない、せぬのであらう。

第十二章 救 靈

○信仰は後生道樂ではない

信仰は道樂ではない。ある宗旨でいふやうな、年寄りの後生道樂とはちがふ。またただに、精神修養の道具といふだけでもない。若しこれがさういふものであつたなら、人には好不好がある、また得手不得手があるから、さう無理に、誰に向つても、自分の

信仰をすゝむるには及ぶまい。なんでも構はぬ。悪いことさへせねば、マア、人々の好みにまかせておいても宜いだらう。

ところで、キリスト教の信仰は、そんなものではない。我々がキリスト教を信ずるのは、素より道樂のためではない。また精神修養の道具のつもりでもない、我々はこれを救ひの道として信じてをる。キリスト教は、人間を罪より救ふ唯一の救ひの道で、この世界には、救ひの道といふものは、もうこの外にはないのである。果してこれが唯一の救ひの道なら、どうしてこれを人々にすゝめずして居られるだらうか。

○すくひの船

若しこゝに船が沈んで、人々が溺れてをるとき、一艘の救助船が来て、自分は手早く飛び乗つたが、あとにはまだ乗り得ずに、海の中にボカ／＼浮んでをる者があるといふ場合、さういふ人々を、その救助船に引つぱりあげずにくだらうか。そんな時は、遠慮もなにも入つたものではない、わが手の届くかぎり、その人々を船の中へ引つぱりこまねばならぬ。若しさうせず、自分さへ助かれば、人はもうどうでもと

いふ風で、船の中に寝ころんでをるものがあつたら、そんな人を、人がなんと云ふだらう。

いま人間の魂は、みな罪の淵にはまつて溺れてをる。暫らくはまだこの世の中でもがいてをるが、遅かれ早かれ、いづれ一度は、みな地獄に落ちて限りなき刑罰を受けねばならぬ。しかるに、これをすくふ道としては、たゞ一つのキリストの十字架のみである。自分は幸にその十字架の救ひを受けて、早や安心の身の上となつて居ながら、まだその救ひを知らずに、淵の中に残つてをる人々を、その救ひの船に引っぱり込ませず、自分さへ救はるれば、人は構はぬといふ風で、世の人々の滅び行く有様を、たゞジツト眺めてをれるだらうか。あまつさへ、その滅びゆく人々の中には、自分の親もをる、兄弟もをる、親戚もをる、友達もをるのに、さういふ人々を見殺しにして、打つちやつてをけるだらうか。若しそれができたら、その人はヨッポドどうかしてをる人。正氣の沙汰ではないだらう。當りまへの人であつたら、どうでもこうでも、その救ひに引っぱりこむやうに務むべき筈である。たとひ親が怒らうとも、兄弟が嘲け

らうとも、そんな事を構ひをる場合ではない。若しグズグズしてをる間に、その親兄弟が死んで地獄に落ちたらどうする積り。だから、キリストの十字架の救ひを、早く彼等に知らせてやらねばならぬ。これが救霊傳道といふものである。傳道とは、只人に向つて、キリスト教の教理を講釋するばかりではない、實際に、世の人々を罪の中から引っぱり出すことである。

○救ひは説教家の専門でない

いま我々の周囲には、わが國だけでも、この救ひの船に引っぱりこまねばならぬ人が、七千萬人もをる。右を見ても、左を見ても、みな罪の淵に溺れてをるものばかり。どうしたら、この大勢が救へるだらうか。どんなえらい救助者が出て來ても、七千萬の大衆を救ふといふ事は、中々容易ではない。今アメリカに、ピリー、サンデーといふえらい説教者がをる。この人は、二十五年間に、二十五萬人を救うたといふ人。一年平均一萬人づゝに當つてをる。えらい働きではないか。どうだらう、一つ、そんなえらい説教者を僱うて來て、わが國の救ひを頼んで見ては。さうしたら、何年

ぐらいかゝるだらうと、實は計算して見て驚いた。一年に一萬づゝの平均でも、七千萬を救ふには、丁度七千年かゝる勘定。どうして中々容易な事ではない。日本の救ひは、逆でも、さう長くは待つてをれない。いまま少し近路をとらねばならぬ。全體、人の魂の救ひの事を、そんな説教者や傳道師の専門事業のやうに心得て、彼等にはかり頼んでゐるのがまちがひである。なるほど。説教は説教者の専門だらう。しかし、救ひの事はさうではない。これは、キリスト信者一同の共同事業である。かの少數なる牧師や宣教師や士官や傳道師等の手にまかせておくべきものではない。

○敵を打つものは兵である

そも、戦の時に、敵を打つものは誰だらう。小隊長でも大隊長でもあるまい。平の兵卒ではないか。敵を殺すものは、その兵卒どもが持つてゐる小銃である。士官のサーベルではない。隊長が抜いてゐるサーベルは、わが兵を指揮するためで、あれを以て敵を撃つのではない。時に接戦にでもなれば、士官のサーベルで敵を切ることもあるが、それは特別の場合で、平生は、兵卒どもの小銃で敵を撃つ。靈の戦に於ても

また然り。敵を撃つものは士官ではない、平の兵卒である。人の魂を救ふ働きは、牧師や傳道師の説教ばかりではない、平信者おのゝがつとむる個人傳道にある。かの兵卒どもが、ひとりびとりに、敵に向つてねらひ打ちをするやうに、キリストの兵士もまた、おのゝその相手を探して、このねらひ打ちをやらねばならぬ。この平信者一人一人のねらひうち傳道が、救ひの戦には、最も有効なものである。實は、如何に立派な牧師や士官があつても、若し平信者が、おのゝこのねらひうち傳道を務めなかつたら、靈の戦は決して勝てるものではない。どうだらう、今の日本のキリスト信者は、おのゝ靈の小銃を掲げて、個人々々で、敵に肉迫して、このねらひ打ちをやつてゐるだらうか。若し我が國のキリスト信者が、總掛りになつて、このねらひうち傳道を始めたならば、たとひビリ、サンデーのやうな、一年に一萬人を救ふ、えらい説教者はなくとも、七千萬の同胞を救ふことは、さう難くもあるまいと思ふ。

○一人一人倍增傳道

試みに、いま日本にある十萬のキリスト信者が、一人も残らず、皆この小銃を掲げて

あのく敵に向つてねらひ打を始めたとしたら、その結果は、どうなるだらう。僕等は、信者あのくに向つて、あまり餘計な注文をしないつもり。一人で一年に一萬の敵を打ち取れとは言はぬ。しかし、小銃を持つてゐるほどの兵卒ならば、一人で一人の敵をねらひ打ちするぐらいの事はできさうなもの。一挺の小銃を提げて居ながら、一人の敵をもねらひ打ちをすることができぬと言つたら、それは兵ではない、却つて戦の邪魔物である。苟もキリストの兵卒である以上は、その信仰の小銃を、一人の未信者に向けて、それをねらひ打ちするぐらいの事は確にできる筈である。それも、一日に一人とか、一ヶ月に一人とか言ふのではない。一人のキリスト信者が、一年中かゝつて、一人の未信者をキリストの前につれてきて貰ひたいと言ふのである。一年は三百六十五日ある。この長いあひだに、たつた一人の未信者をキリストに導くことができぬだらうか。なんとしても、これぐらいの働きは、誰にでもできさうなものだと思ふ。たとひ病氣で寝ついてゐても、ほんとうの信仰があつたら、これ位の働きは寝ながらできる。さうして、現今のキリスト信者が、一齊にこれを實行したなら、いはゆる

る一齊射撃をやつたなら、今日の十萬人は、忽ち倍して一年内には二十萬人となる。そして、來年も同じく、その二十萬のキリスト信者が、またる一齊射撃をやらうもんなら、その結果は、またく倍して四十萬人となる。これを一人一人倍增傳道と言ふ。こういう風で、毎年々々、倍から倍に進んで行くと、今より丁度十一年目には、日本に於けるキリスト信者の總數は、一億二百四十萬人となる。全國の同胞をことごとく救ひえてなほ餘りある勘定。實にえらい働きではないか。僅か十一年にして、七千萬の同胞をことごとく救ひ、我が國をしてキリストの御國とならしむることが出来ると言ふのは。これが、日本傳道十年計畫とでも言ふべきものだらう。どうだ。この十年計畫がやれぬだらうか。しかし、やれると、やれぬとは、我々が、するとせぬとにありはすまいか。信者あのくが一挺づゝの小銃を提げて、一年かゝつて、一人の敵を倒すことを務むると務めぬとにありはすまいか。それが、どうして、できぬだらうか。若しみんなが、やる氣になつたら、これしきの事のできないと言ふ筈は決してないと思ふ。

○天下の信者我れ一人

しかし、十萬人が十萬人、ことごとく同じ心になると言ふことは、随分六かしい話である。今日の信者は、みなキリストの精兵といふのではあるまいし、中にはまた屑もあらうから、さういふ事は、言ふべくして、到底行へることはないと言ふ人があつたら、それでは一つ、大にまけて、十萬人ことごとくとは言はず、只その中の一割だけ、すなはち、一萬人を精兵として、あとの九萬人を、小銃なしの無駄兵と見て、それで一人一人倍増傳道を始めようか。それにしても、今から十四年かゝると、日本中の人はみな救はるゝことになる。今度は、更に下つて、總數の百分の一、すなはち、一千人で始めて見ると、この救ひが、丁度十八年ほどかゝる。百人で始めると、二十一年かゝる。十人で始めると、二十四年かゝる。

ところで考へたのは、十人と言つても、自分の外に、なほ九人の同意者が入る。それが果して得られるだらうか。自分だけは、確にこの一人一人倍増傳道をやるときめても、外の九人が自分同様に實行してくれなかつたら、これも亦ダメになる。それではよろし。兵法にも、來らざるを頼むなかれとあるから、もう一切人を頼まぬ。入の同意も、同情も、何も求めぬ。天下の信者は我れ一人、我れより外には、日本國中一人の信者なしと見て、只我れ一人で、この一人一人倍増傳道を始めよう。

○倍増の表

さて。いよく、我一人で、一人一人倍増傳道を始めるとすれば、無論、第一年目には、天下の信者は我れ一人として、その二年目から、それが倍増になつて行くものと見ねばならぬ。さうすれば、その結果、丁度今より二十七年目には、日本に於る信者の總數は六千七百十萬八千八百六十四人となる。その順序は左表の通り。

倍増の表

九	八	七	六	五	四	三	二	一
年	年	年	年	年	年	年	年	年
二五	二八	六四	三二	一六	八	四	二	一
十	十	十	十	十	十	十	十	十
八	七	六	五	四	三	二	一	一
年	年	年	年	年	年	年	年	年
一	一	一	一	一	一	一	一	一
三	五	三	一	八	四	二	一	五
一	六	二	七	三	一	〇	〇	二
〇	七	七	六	八	四	二	二	二
七	二	六	八	四	二	二	二	二
二	二	二	二	二	二	二	二	二
十	十	十	十	十	十	十	十	十
七	六	五	四	三	二	一	一	一
年	年	年	年	年	年	年	年	年
六	七	一	〇	八	四	二	一	二
七	二	七	七	三	一	〇	〇	二
二	二	二	二	二	二	二	二	二
十	十	十	十	十	十	十	十	十
七	六	五	四	三	二	一	一	一
年	年	年	年	年	年	年	年	年
六	七	一	〇	八	四	二	一	二
七	二	七	七	三	一	〇	〇	二
二	二	二	二	二	二	二	二	二

○一人ではできぬ

實に驚くべき計算ではないか。たつた一人から始つて、しかも一年に一人で一人づゝ殖やして行つて、二十七年目には、約七千萬を救ふといふは。しかし、この傳道は、一人から始まつては居ても、素より、一人だけでできることではない。たゞ自分一人て一人傳道を實行しても、それだけでは、こんな結果にはならぬ。毎年一人づつ救ふとすれば、二十七年間に、自分が直接に救うた人は、僅かに二十七人である。あとはみな、新に救はれた人々の働きである。この新に救はれた人々が、みな自分と同じやうに、一人傳道の實行者になつてくれれば、こういふ大結果を見ることはできぬ。それだから、この傳道の行はるゝと行はれぬとは、その新らしい信者に、この働きができるかできぬかといふ問題にある。ところで、これは確にできる、できぬ筈はない。なぜならば、一年に一人づゝ作る信者は、名ばかりの信者ではないだらう。名ばかりの信者を、いくら作つても、それは無益なことである。作るなら、ほんとうの活きた信者を作らねばならぬ。活きた信者ができれば、その信者は必ず働く。一年に

一人の未信者を導く位は、決して六かしい事ではない。それだから、この傳道の秘訣は、一年に一人でもよいが、その信仰は必ず活きて燃えてをる信者を作るといふことにある。これさへできれば、信仰の火はひとりで燃え擴つて行く。

○火元になれ

全體、火といふものは、ひとりで燃えひろがつて行くものである。火は、それに觸るゝものには、必ず燃え移る力を以てをる。若し觸れても、燃え移らない火があつたら、それは恐らく、ほんとうの火ではないだらう。書にかいた火かも知れない。信仰にも、時々書にかいた火を見たやうなものがないでもない。しかし、眞實燃えてをる信仰ならば、どうしても、それに觸るゝものに燃え移らずにはをれない筈である。キリストの十字架の血によつて、地獄の滅えざる火から救はれた悦びを、ほんとうに味うてをる信者なら、どうしても、その悦びを自分ひとりで、黙つて持つてをることはできなくなる。かならずその悦びを隣へ傳へようとする。そして、その傳へられた人も、同じやうに、またその隣へ傳へるやうになる。丁度、一軒の家から燃え出した火

が、隣から隣へと燃えひろがつて、終には全町内を焼き盡す大火事になるやうなもの。人一人倍增傳道の秘訣はこゝにある。すなはちこの火にある。この火の燃え移るところにある。我々は、一人ですぐ全町内を焼き盡すやうな大火事にはなれぬでも、その大火事の火元には確になれる。人一人傳道の大事なところは、凡て作るころの信者を、みなこの火元にするところにある。火元にするには、その火の大小を問ふ必要はない。たゞ燃えてさへをればよい。火は燃えてさへをれば、僅かな煙草の火からでも、大火事になる事がある。燃えない信者がいくらできても、それは無駄。人一人傳道に、あまり慾ばらずして、たゞ一年に一人といふのは、大に意味のあることである。火元は一つで澤山である。

○新らしい信者と古い信者

又、こゝに一つ、面白い事實がある。それは、傳道の熱心は、古い信者よりも、却つて新らしい信者に多いといふこと。古い信者は、とかく、信仰がこぢれてゐて、感じが鈍くなつて、人一人傳道などにも、すぐ飛びついてこぬやうなところもあるが、今

生れたほやほやの新らしい信者は、その信仰の火が抑へきれぬほど燃えてをるから、それをすぐ人一人傳道で隣へ移させることは、甚だ容易である。それだから、この傳道を実行するには、古い信者を相手にするより、寧ろ自分が一人で作り出した新らしい信者を相手にした方が、ヨツポド成功がし易いやうに思ふ。無論、古い信者を顧みぬといふ譯ではないが、どちらかと言へば、新らしい信者の方が、實行し易いと言ふことだけは、争はれぬ事實である。

○人一人傳道はキリストの命である

この人一人倍增傳道は、たゞ人間の考へだけから出たものではない。これには、キリストの權威がある。約翰傳第十五章の一節に、我は眞の葡萄樹、我父は農夫なり、我にありて凡て實を結ばざる枝は、父これを剪除り、凡て實を結ぶ枝は、これを潔む。そはます／＼繁く實を結ばせんためなりとある。

果物の木は、一年に一度は必ず實を結ばねばならぬ。熱帯地方では、一年に數回實を結ぶ木もあるが、それは例外として、普通實を結ぶのは、一年一回ときまつてをる。

若し一年に一回も實を結ばぬ木があつたら、それは無益な木であるから、その運命は切られて火の中に投げ入れらるゝより外はあるまい。キリスト信者もまたさうで、少なくとも、一年一度は、是非實を結ばねばならぬ。若し一年に、一人の未信者をも、キリストに導くことができなかつたら、それこそは、實を結ばざる無益の木であるから、いくら信者の皮を被つて居ても、その運命は、悪魔と偕に地獄の火の中ときまつてをる。一人一人倍增傳道の實行のできない信者の運命は、實に恐るべきものである。

○八つの規則

さて、この一人一人倍增傳道を實行するについて、信者の守るべき規則が八つある。この八つを嚴重に守つたら、誰でも、この一人一人傳道のできない筈はない。

(一) 毎年の始めに、今年は、この人を救はうといふ、一人の人をきめて、それをその年の一人一人傳道の標的とすること。若しさういふ標的が、二つも三つもできれば、結構である、多いにこした事はない。しかしまた、あまり多すぎると、却つて一も取らず二も取らずといふ事になるから、寧ろそれよりも、一つの標的に向つて全力を集めた

方がよい。實は、この一人一人傳道は、その一人といふところに味ひがある。ナアニ、一人ぐらいがと、とかく一人を輕蔑する風があるが、人間一人は中々ナアニではない。一人の魂は、全世界よりも貴いから、一年かゝつて、一つの魂を救ふことは、決して小さいことではない。天國に於ては、神の使たちの前で大なる悦びのあるほどの大事業である、而もその一人が火元となつて、全國を燃やすといふ望みがあるから、この一人の救ひが非常に大切なものになる。

(二) 既に標的の人ができたら、毎日その人の名をよんで、神に向つて、その魂の救ひを祈ること。人の救ひは神の力による。神の靈の働きによらなければ、一つの魂も救はれるものではない。だから、傳道の第一は、その人に向つてすゝめをする前に、先づその人のため神に向つて祈ることにある。この祈りを怠つて居て、たゞ話をしたりすゝめをしたりばかりしても無益である。

この祈りは、一日一回位では足らぬ。體を養ふためにすら、日に三度の食事をするではないか。まして、貴い魂を救ふためには、少くも一日に三度位は祈らねばならぬ。

毎日三度づゝ祈れば、一年間には千九十五度祈ることになる。一つの魂の救ひのために、神に向つて千遍祈つたら、その祈りの聞かれぬといふ筈はあるまい。どんな頑固な親でも、その子供に千遍もねだられたら、逆も聞かずに居られまい。

(三) 神に祈ると偕に、自分もまた働かねばならぬ。まづ信仰のことをその人に話さねばならぬ。この本に書いてあるやうな順序で、神の事、罪の事、救ひの事などを、できるだけ精しく、また分るやうに、話して聞かせねばならぬ。それにまた、自分の救はれた身の上ばなしを交へると、救ひの話が一層よく分るやうになる。實は、説教者の上手な説教よりも、信者の作り飾りのない救ひについての身の上ばなしの方が、人を導く上には却つて力あるものである。立派な説教はできぬでも、自分の信仰の身の上ばなしなら、誰にでもできる筈である。

(四) 自分の話だけでは、まだ分らぬと思つたら、誰なりとも、話のよくできる人に頼んで、その人にすゝめて貰ふこと。

(五) その人を成るべくキリスト教の集りにつれて行くこと。日曜日の説教には勿論のこ

と、その他の集りにも、その人のためになる話があると思ふときは、なるべく引つぱつて行くやうにする。まだ信仰の起らぬ内は、集りなうには出たがらぬものであるから、こちらから引き出しに行くやうにせねばならぬ。それには、いくら暇もつぶれる。骨もをれるが、一つの魂を救ふためには、それ位の骨折りはしてもよからう。

(六) 聖書を始め、その他信仰を起すに有益な書物や雑誌は、なるべく、貸すか、遣るかして、讀ませるやうに務めねばならぬ。これがまた大事な傳道である。

(七) その人が若し引越して、遠方にも行くやうな事があつたら、その時は見失はぬやうに、すぐその行先を突きとめて置いて、始終手紙で、その信仰をすゝめるやうにせねばならぬ。この手紙傳道が、なか／＼有効なものである。面を見ては言へない事でも、手紙には書けることがある。また受くる方でも、聞くよりも、讀んだ方が受け易い場合もある。若しまたその地方に、キリスト信者が居たら、すぐその人の事を、その信者たちに頼んでやるやうにする。とにかく、一度標的にした人は、その魂の救ひを見るまでは、決して見放してはならぬ。

(八) 一週一度ぐらいは、斷食してその人の救ひのために祈る必要がある。人の世に生れてくるには、必ずその母の産みの苦しみが入る。この産みの苦しみによらずして、世に生れた人は一人もない。肉體の生るゝのですらさうであれば、魂が新たに天國に生れるについては、誰かその魂のために、靈の母となつて、靈の産みの苦しみを見てやるものがなければならぬ。この人一人傳道は、凡ての信者をして、おのゝ、誰かのために、その靈の母となつて、産みの苦しみを見て貰ふといふことである。

○かならず出来る

以上八つは、人一人倍增傳道を實行するについて、是非守らねばならぬ規則である。これを若し守らなければ、この傳道の實行を期することはできぬ。いくら澤山の兵卒が居ても、その兵が一定の規律の下に動かなければ、戦は勝てるものではない。さうして、この八つの規則の中、どれ一つ六かしくて守れぬといふやうなものはない。守らうと思へば、誰にでもすぐ守れるものばかり。いづれも平凡な規則である。一人の未信者を標的として立てること。その人のために祈ること。話しをすること。人に話

して貰ふこと。集りにつれて行くこと。書物を貸して讀ませること。手紙を出すこと。斷食して祈ることなど、みな誰にでもできることのみである。さうして、これをみんなが守つたら、早くて十年、遅くとも二十七年を期して、わが七千萬の同胞を救ふことができるといへば、キリスト信者として、これを守らぬといふ法があるだらうか。ありがたい事には、今は我國の救ひの時、恵みの時である。神の靈は將に大なる働きを顯はさんとして居給ふのである。たゞこの上は、我々信者が、おのゝその本分を盡すことのみである。どうぞ盡して貰ひたい。凡てこの「信仰のすゝめ」を讀んで我れと同じ信仰を起された人は、どうぞ我々と偕に、この人一人倍增傳道を實行して、一日も早く御國をこの國に來らせ、御旨の天になる如く、この地にもならせさせて貰ひたいものである。

信仰のすゝめ終

大正五年八月十七日印刷
大正五年八月二十日發行

定價 上製廿錢
並製十錢

著作者

金森通倫

東京市京橋區尾張町貳丁目拾五番地

發行者

福永文之助

橫濱市太田町五丁目八十七番地

印刷者

村岡平吉

東京市京橋區尾張町貳丁目十五番地

發行所

警醒社書店

(振替東京五五參
電話新橋一五八七)

不許複製

著 倫 通 森 金

基 督 教 三 綱 領

■ 貯金のすゝめ

定 價 五 錢
郵 税 二

上 製 廿 八
郵 税 四
並 製 十 二
郵 税 二

■ 兒童の貯金

定 價 五 錢
郵 税 二

■ 貯金獎勵用色紙摺
いろは組十二枚揃

定 價 三 錢
郵 税 二

貯金獎勵用色紙摺に限り三十組以上は無郵税

■ 安田善次郎翁

定 價 十 五 錢
郵 税 四